多賀城市文化財調査報告書第152集

多賀城市内の遺跡２

―令和３年度ほか発掘調査報告書―

新田遺跡　山王遺跡　市川橋遺跡
高崎遺跡　野田遺跡　小沢原遺跡
留ヶ谷遺跡　東田中窪前遺跡

令和４年３月

多賀城市教育委員会

序　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、それらは市域の約３割にも及んでおります。これらの貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。

近年は、西部地区を中心に宅地造成工事や個人住宅建築工事などによる発掘調査件数が増加傾向にありますが、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、令和２年度と令和３年度に国庫補助事業として実施した個人住宅建築等に伴う 27 件の発掘調査の成果を収録したものです。その中で、市川橋遺跡では、多賀城南面に広がる方格地割を形成する東１道路西側溝を確認しました。また、山王遺跡では古代の区画溝の他、中世の井戸等を発見し、生活の実態に迫る成果が得られました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げ、挨拶といたします。

令和４年３月

多賀城市教育委員会
教育長　麻生川　敦

例　言

1　本書は、国庫補助事業による令和２年度に実施した発掘調査５件と、令和３年度に実施した発掘調査22件の成果をまとめたものである。
2　遺構の番号は、各遺跡とも第１次調査からの通し番号である。
3　平成14年４月１日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年３月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約３m、南に約１mの補正をかけている。
4　挿図中の高さは、標高値を示している。
5　土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6　執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は各執筆担当者が行い、本書の編集は丹野修太が行った。
Ⅴ：赤澤靖章　Ⅱ・XX：大木丈夫　Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・XII・XIII・XIV・XV・XXIV・XXV・XXVI：丹野修太　Ⅲ・Ⅵ・XVI・XVII・XXII：小原駿平　XI・XVIII・XXIII・XXVII：桑折肇　X・XXI・XXVIII：高橋伶奈
7　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　次

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ　山王遺跡第226次調査 …… 3
Ⅲ　高崎遺跡第127次調査 …… 17
Ⅳ　東田中窪前遺跡第9次調査 …… 18
Ⅴ　小沢原遺跡第21次調査 …… 19
Ⅵ　留ヶ谷遺跡第10次調査 …… 20
Ⅶ　新田遺跡第151次調査 …… 21
Ⅷ　新田遺跡第152次調査 …… 21
Ⅸ　新田遺跡第153次調査 …… 21
Ⅹ　新田遺跡第154次調査 …… 29
XI　新田遺跡第155次調査 …… 34
XII　新田遺跡第157次調査 …… 41
XIII　新田遺跡第158次調査 …… 46
XIV　新田遺跡第159次調査 …… 49
XV　新田遺跡第161次調査 …… 52
XVI　山王遺跡第225次調査 …… 53
XVII　山王遺跡第227次調査 …… 63
XVIII　山王遺跡第228次調査 …… 75
XIX　山王遺跡第229次調査 …… 86
XX　山王遺跡第230次調査 …… 93
XXI　山王遺跡第231次調査 …… 98
XXII　山王遺跡第232次調査 …… 103
XXIII　山王遺跡第234次調査 …… 109
XXIV　山王遺跡第235次調査 …… 112
XXV　山王遺跡第237次調査 …… 113
XXVI　市川橋遺跡第101次調査 …… 114
XXVII　高崎遺跡第129次調査 …… 122
XXVIII　野田遺跡第6次調査 …… 123

調　査　要　項

1　調 査 主 体　多賀城市教育委員会　教育長　麻生川敦

2　調 査 担 当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　伊藤文昭

3　調査担当者　多賀城市埋蔵文化財調査センター

副主幹　赤澤靖章　齋藤健（～Ｒ３．３）

研究員　大木丈夫　丹野修太

技　師　小原駿平　桑折肇　髙橋伶奈

調査員　佐藤則之　金子かおる　大友二重　神山晶子　佐々木瑠美

4　調査従事者　令和２年度（多賀城市会計年度任用職員）

阿部清次　安藤美喜子　伊藤幸夫　内田節子　内田正樹　大塚芳弘　大友文夫

奥山妙子　岡澤一清　糟川良谷　加藤勝二　門脇公貴　門脇公貴　叶内正悦

工藤正好　桑折一博　佐々木久志　佐々木啓太　佐々木正則　佐々木勉

佐藤長次　佐藤道子　佐藤弥悦　菅原富次男　菅原正義　清水泰昌　鈴木真由美

鈴木優子　関内久子　瀬戸口弘行　瀬谷良雄　竹本裕昭　但野順子　千葉辰子

土佐実　中村宣之　畑山眞次　古瀬律子　幕田裕子　村上喜代中　山田信治

横山和雄

令和３年度（公益社団法人　多賀城市シルバー人材センター）

渥美静香　阿部純一　阿部信夫　石堂紀　板橋仁志　内海かつ子　鵜沼静夫

江口文夫　梶井敏弘　菅ひふみ　菊田忠　熊谷洋一　小林伸一　小堀内功

齋藤義治　齋藤恵子　佐藤良雄　髙橋秀一　千葉良二　土居文彦　中野鉄正

長谷川誠　平塚訓章　平塚武慶　福原寛　松島征昭　三浦義昭　山田佐男

横田隆昭　吉田邦勝

5　整理従事者　有路尚子　石垣玲子　浦山紀以子　奥田美雪　菊池あかね　佐々木直美

佐々木宣子　佐藤ゆかり　高橋明子（～Ｒ３．３）　千葉貴久江　千葉都美

長瀬真貴子　秦千尋　堀川紀子　宮城ひとみ

調査一覧

令和2年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	山王遺跡第226次	多賀城市南宮字町61番	令和2年11月30日～12月25日	83.2㎡	大木 齋藤
2	高崎遺跡第127次	多賀城市高崎二丁目144-3	令和2年12月9日～12月25日	23.6㎡	小原
3	東田中窪前遺跡第9次	多賀城市東田中一丁目283-2	令和2年12月9日～12月25日	18.8㎡	丹野
4	小沢原遺跡第21次	多賀城市浮島二丁目319番1、341番、349番1、351番1	令和2年11月30日～12月25日	239㎡	赤澤 桑折
5	留ヶ谷遺跡第10次	多賀城市留ヶ谷一丁目330番13	令和2年12月7日～12月8日	88㎡	小原

令和3年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
6	新田遺跡第151次	多賀城市南宮字一里塚101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	65.5㎡	丹野 佐々木
7	新田遺跡第152次	多賀城市南宮字一里塚101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	61.6㎡	丹野 佐々木
8	新田遺跡第153次	多賀城市南宮字一里塚101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	54.2㎡	丹野 佐々木
9	新田遺跡第154次	多賀城市新田字後104、105番1	令和3年4月13日～5月7日	200㎡	高橋 佐藤
10	新田遺跡第155次	多賀城市南宮字一里塚81-1、102-1、104-4、75-2、79-1 南宮字庚申294、293-5	令和3年4月12日～6月3日	200㎡	赤澤 桑折
11	新田遺跡第157次	多賀城市新田字後16番7	令和3年9月15日～10月19日	56.4㎡	丹野
12	新田遺跡第158次	多賀城市南宮字庚申228番、298番	令和3年10月20日～11月30日	50.4㎡	丹野
13	新田遺跡第159次	多賀城市南宮字庚申295番1、299番	令和3年10月20日～11月30日	62.9㎡	丹野
14	新田遺跡第161次	多賀城市新田字六歳5番地2、5番地16、7番地1、7番地2	令和3年12月22日	16㎡	丹野
15	山王遺跡第225次	多賀城市南宮字町81番14	令和3年4月13日～5月11日	159㎡	小原 金子
16	山王遺跡第227次	多賀城市山王字西山王8番1	令和3年5月28日～7月1日	119㎡	小原 金子 大友
17	山王遺跡第228次	多賀城市南宮字町77番1	令和3年6月8日～7月19日	233㎡	赤澤 桑折
18	山王遺跡第229次	多賀城市南宮字町77番1、77番2、77番3	令和3年7月28日～9月7日	1209㎡	赤澤 桑折
19	山王遺跡第230次	多賀城市南宮字町81番16、字伊勢202番12	令和3年7月20日～9月22日	145㎡	大木 金子 大友
20	山王遺跡第231次	多賀城市南宮字町81番15、字伊勢202番4	令和3年7月20日～9月22日	50㎡	高橋 神山
21	山王遺跡第232次	多賀城市南宮字伊勢207番2	令和3年10月5日～10月22日	30㎡	小原 金子 大友
22	山王遺跡第234次	多賀城市山王字山王二区144番地	令和3年10月18日～11月2日	170㎡	赤澤 桑折
23	山王遺跡第235次	多賀城市南宮字町92番	令和3年11月19日	26.7㎡	丹野
24	山王遺跡第237次	多賀城市南宮字八幡地内	令和4年2月8日～2月9日	45.9㎡	高橋 神山
25	市川橋遺跡第101次	多賀城市城南二丁目6－9	令和3年7月26日～9月8日	59.2㎡	丹野 佐々木
26	高崎遺跡第129次	多賀城市高崎二丁目135番7、139番4、541番	令和3年9月27日～10月6日	28.5㎡	赤澤 桑折
27	野田遺跡第6次	多賀城市留ヶ谷二丁目87番地　他14筆	令和3年6月15日～8月13日	1600㎡	高橋 佐藤 神山

凡　　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＡ：柱列跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＩ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑

Ｐｉｔ：柱穴及び小穴　　ＳＸ：その他の遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会　2003）に従った。詳細は下記のとおりである。

（1）土師器坏

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切りによるものをcとして細分する

（2）土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（3）須恵器坏

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切りによるものをcとして細分する。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に延びている。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高５～６mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高５～６mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8㎞、南北約1.6㎞である。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高３～４mの微高地に立地し、その範囲は東西約２㎞、南北約１㎞である。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ１町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4㎞、南北約1.6㎞である。多賀城南面の広い範囲を占めており、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3㎞、南北約１㎞である。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約60軒の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

東田中窪前遺跡は、高崎遺跡の南端部に隣接している。南側300m付近を砂押川が東流しており、その西側には仙台平野が開けている。これまでの調査では、遺跡中央付近で実施した第1次調査で布堀りを施した柱列跡や溝跡、北端部で実施した第2次調査で竪穴建物跡3軒をはじめ溝跡や土坑が発見されている。

留ヶ谷遺跡は、古代から中世までの複合遺跡で、特に中世から近世の遺構・遺物が多く発見されている。これまでの調査では、平場とそれに伴う掘立柱建物跡、柱列跡、土塁跡、溝跡、土坑、柱穴を検出している。土塁や平場は中世の館跡に伴うものと考えられている。

小沢原遺跡は、多賀城市北部の標高10～23mの低丘陵に立地し、その範囲は東西・南北ともに約400mである。これまでの発掘調査では、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝跡、土器埋設遺構などいずれも平安時代を中心とした遺構・遺物を発見している。

野田遺跡は、多賀城市北部の標高10～23mの低丘陵に立地し、その範囲は東西400m、南北90mである。これまでの調査では、古代の竪穴建物跡、溝跡、土坑を発見している。

令和２年度分

1：山王遺跡第226次調査　2：高崎遺跡第127次調査　3：東田中窪前遺跡第９次調査
4：小沢原遺跡第21次調査　5：留ヶ谷遺跡第10次調査

令和３年度分

6：新田遺跡第151次調査　7：新田遺跡第152次調査　8：新田遺跡第153次調査
9：新田遺跡第154次調査　10：新田遺跡第155次調査　11：新田遺跡第157次調査
12：新田遺跡第158次調査　13：新田遺跡第159次調査　14：新田遺跡161次調査
15：山王遺跡第225次調査　16：山王遺跡第227次調査　17：山王遺跡第228次調査
18：山王遺跡第229次調査　19：山王遺跡第230次調査　20：山王遺跡第231次調査
21：山王遺跡第232次調査　22：山王遺跡第234次調査　23：山王遺跡第235次調査
24：山王遺跡第237次調査　25：市川橋遺跡第101次調査　26：高崎遺跡第129次調査
27：野田遺跡第６次調査

第１図　調査地点の位置

Ⅱ　山王遺跡第 226 次調査

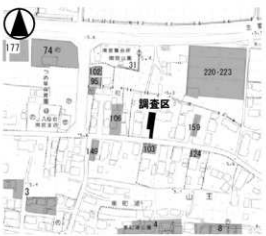
1　調査に至る経緯と経過

本件は南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である（第１図）。

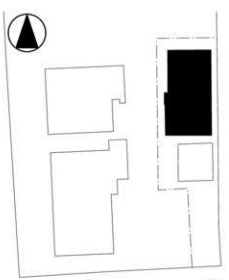
令和２年７月 28 日、地権者から当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、地盤改良工事として宅地部分 30 箇所に、現地表から深さ４ｍまで柱状改良杭を打ち込むというものである。

当該地近隣では、平成 24 年度に第 103 次調査と第 106 次調査を実施し、現地表面から深さ 60 ～ 70cm で古代から近世の遺構を検出している。このことから、遺跡への影響が懸念されるため、地権者との工法変更による保護協議を行った。しかし、提出された工法以外では十分な地盤強度をえられないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を実施することとなった。

令和２年８月 21 日に、地権者から発掘調査に関する依頼書・承諾書を提出されたことを受け、11 月 30 日より現地調査を開始した。重機で現地表面から約 70cm の深さまで掘削し、土砂は調査区外の仮置き場へ搬出をした。翌 12 月１日から遺構検出作業を行い、約 10cm ほど掘り下げた層で溝跡などの遺構を検出した。さらに、調査区外周に排水溝を兼ねたトレンチを設定して土層の確認を行った結果、複数の遺構確認面が存在することが判明した。人力で徐々に掘り下げながら遺構の検出及び掘削、写真撮影、測量を順次進めた。12 月 24 日には遺構の精査作業などや写真撮影、平面図作成作業を終了した。12 月 25 日にテント等の撤去と機材撤収、調査区の埋め戻しを完了し、調査を終了した。



第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

調査は、既存宅地から分筆する調査対象面積 267.08 ㎡のうち、住宅建設で遺構面まで影響を受ける 83.22 ㎡を調査区として設定した。（第２図）

（1）基本層序

Ⅰ～Ⅲ層は近現代の層、Ⅳ層は近世末から近代にかけての層、Ⅴ層は近世の層、Ⅵ層は古代の層と考えられる。Ⅴ層、Ⅵ層とも数度整地が行われており、細分できる。（第４、５図）

Ⅰ　層：現代の盛土層。黒褐色シルト（10YR3/2）。

Ⅱａ層：灰黄褐色砂質シルト（10YR4/2）。黄褐色砂質シルトブロックを含む盛土層。

Ⅱb層：黒褐色シルト（10YR3/2）。ややしまっている。炭化物を多く含む。
Ⅱc層：暗灰黄色砂質シルト（2.5Y4/2）。黄褐色砂質シルトブロックを多く含む盛土層。
Ⅲ　層：黒褐色砂質シルト（2.5Y3/1）。炭化物を多量に含む。明治32年に南宮地区で発生した大火による炭化物と考えられる。
Ⅳa層：灰色シルト（7.5Y4/1）。やや粘性有り。しまっている。炭化物と黄褐色ブロックを含む。
Ⅳb層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。やや粘性有り。炭化物を少量含む。
Ⅳc層：灰黄褐色シルト(10YR4/2)。Ⅳ2層と同質であるが、Ⅵ2層との境に灰黄色の微砂層が堆積している。
Ⅴa層：黄灰色シルト（2.5Y4/1）。やや粘性有り。炭化物を大量に含む。出土遺物から近世末期の火災で生じた炭化物堆積層と考えられ、以下の層をⅤ層とした。
Ⅴb層：黒褐色シルト（10YR3/2）。非常にしまっている。上部が酸化している。
Ⅴc層：黒褐色粘質シルト（10YR3/1）。腐植を含む。
Ⅴd層：黒褐色シルト（10YR3/1）。炭化物を含む。土師器片や近世陶磁器片を少量含む。
Ⅵa層：黒褐色粘質シルト（2.5Y3/1）。しまっている。炭化物を含む。以下、陶磁器を含まず、古代の層と考えられる。
Ⅵb層：オリーブ黒色粘質シルト（5Y3/1）。しまっている。青灰色地山ブロック砂を斑状に少量含む。
Ⅵc層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。やや粘性有り。しまっている。
Ⅵd層：オリーブ黒色シルト（5Y3/1）。しまっている。炭化物を微量に含む。青灰色地山ブロックを含む。
Ⅵe層：黒褐色シルト（10YR3/2）。ややしまっている。炭化物を少量含む。青灰色地山ブロックを含む。
Ⅶ　層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）。古代の遺構確認面。

（2）発見遺構と遺物

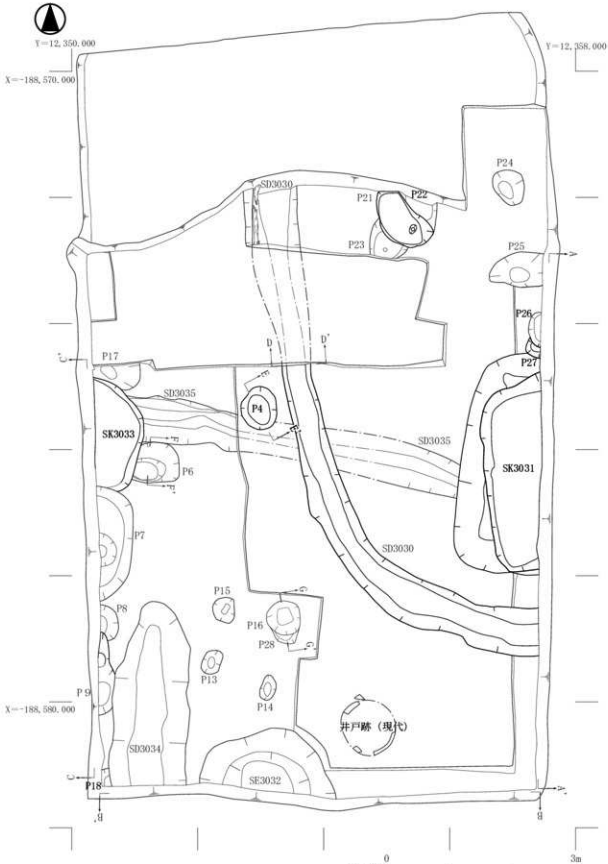
遺構を確認したのは、Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層上面である。以下、確認した層序ごと述べる。

〔Ⅶ層上面検出遺構〕

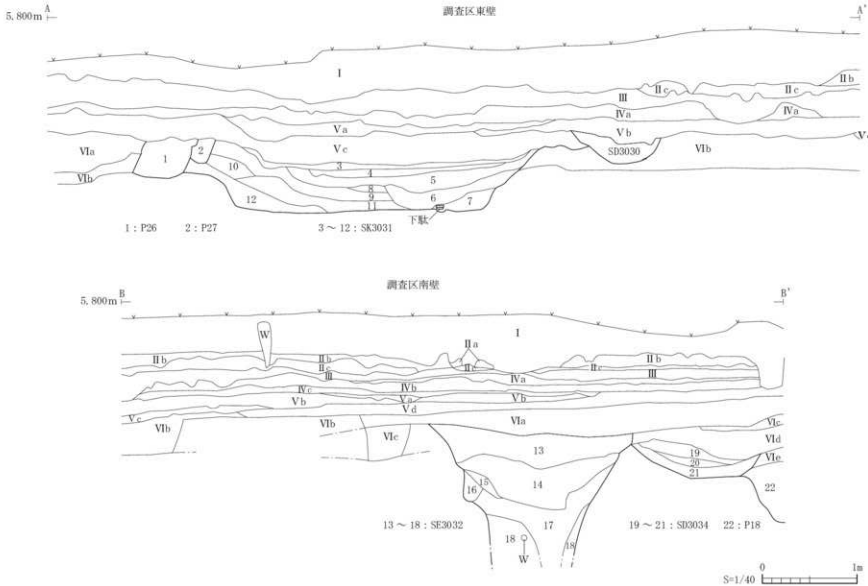
Ｐ17（第３、５図）
【位置】調査区の西壁沿いに位置している。
【重複】ＳＤ3035溝跡より新しい。
【方向・規模】検出した範囲では、径約0.6ｍで、深さ約10cmの規模である。
【遺物・年代】土師器の坏片が出土してるが、正確な年代は不明。

Ｐ18（第３、４、５図）
【位置】調査区の南壁沿いに位置している。
【重複】ＳＤ3034溝跡より古い。
【方向・規模】検出した範囲では径約0.4ｍで、深さは約60cmである。
【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序や他の遺構との関係により、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＤ3035溝跡（第３、５図）
【位置】調査区のほぼ中央に位置している。
【重複】ＳＫ3031土坑、Ｐ17より古い。


Y=12,350.000
Y=12,358.000
X=-188,570.000
X=-188,580.000
SD3030
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P17
D
D'
SD3035
P4
SK3033
P6
SD3035
SK3031
P7
SD3030
P15
P8
P16
P28
P13
P9
P14
井戸跡（現代）
SD3034
SE3032
P18
C
C'
B
B'
0
3m
S=1/60

第３図　調査区平面図



第４図　調査区東壁・南壁断面図

第４図　土層注記表

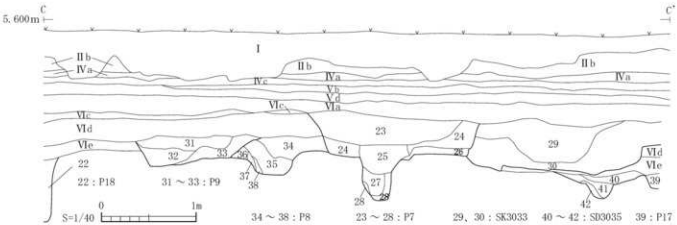
No.	遺構	層位	土色	土性	備考
3	SK3031	1層	黒色（10YR2/1）	腐植	腐植の堆積層。
4	SK3031	2層	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	粘性ややあり。青灰色シルトブロックを少量含む。
5	SK3031	3層	黒褐色（10YR3/1）	粘質シルト	しまっている。腐植と木材片を含む。
6	SK3031	4層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	しまっている。腐植を含む。
7	SK3031	5層	黒色（2.5Y2/1）	粘質シルト	しまっている。砂分と木材片を含む。
8	SK3031	6層	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土	ほぼ混じりがない。
9	SK3031	7層	黒褐色（10YR3/1）	シルト	しまっている。粘性はややある。炭化物と腐植を含む。
10	SK3031	8層	黒色（10YR2/1）	粘質シルト	ややしまっている。炭化物と腐植を含む。
11	SK3031	9層	黒褐色（10YR3/1）	粘質シルト	しまりに欠ける。腐植を多く含む。
12	SK3031	10層	黒色（10YR2/1）	シルト	ややしまりに欠ける。腐植を含む。自然堆積層。
13	SE3032	1層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	しまっている。炭化物を少量含む。
14	SE3032	2層	黒褐色（2.5Y3/1）	砂質シルト	しまっている。灰白色火山灰が2次堆積している。
15	SE3032	3層	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘質シルト	しまっている。青灰色地山をブロック状に量含む。
16	SE3032	4層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	しまっている。青灰色地山を斑状に含む。
17	SE3032	5層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	ややしまっている。青灰色地山ブロックを少量含む。木片を含む。
18	SE3032	6層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	ややしまっている。青灰色地山ブロックを含む。木片を含む。
19	SD3034	1層	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	粘性ややあり。青灰色地山を斑状に少量含む。
20	SD3034	2層	黒褐色（2.5Y3/2）	粘質シルト	ややしまっている。
21	SD3034	3層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物を微量に含む。青灰色地山を斑状に含む。

【方向・規模】検出した範囲では、長さ約７m、幅約 0.７m、深さ約 20cm である。
【埋土】層序は３層に細別できた。いずれの土層も色合いも地山ブロックを多く含むなど特徴も近似していることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。
【遺物・年代】図化はしていないが、９世紀前半と思われる土師器坏、須恵器高台付坏、壺、甕などの破片が出土している。

〔Ⅵｅ層上面検出遺構〕

ＳＤ 3034 溝跡（第３、４図）
【位置】調査区南壁の西壁寄りに位置している。
【重複】ＳＥ 3032 井戸跡より古く、Ｐ９、Ｐ 18 より新しい。
【方向・規模】検出した範囲では、長軸約 2.８m、短軸約 1.３mの長楕円形で、深さ約 40cm である。
【埋土】３層に分層できた。青灰色地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。
【遺物・年代】須恵器高台付坏や須恵系土器坏の他、図化はしていないが土師器の甕の破片などが出土している（第７図３～５）。10 世紀前葉以降の時期と考えられる。

Ｐ９（第３、５図）
【位置】調査区の西壁沿いやや南側に位置している。
【重複】ＳＤ 3034 溝跡より古く、Ｐ８より新しい。
【方向・規模】検出した範囲では、長軸約 1.３m、短軸約 0.３mの不定形で、深さ約 30cm の規模である。
【遺物・年代】土師器と須恵器坏片が出土しているが、正確な年代は不明。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
23	P7	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	しまりに欠ける。炭化物小片を少量含む。
24	P7	2層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に含む。
25	P7	3層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色砂質シルト地山ブロックを含む。
26	P7	4層	暗灰黄色（2.5Y5/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に多く含む。
27	P7	5層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色砂質シルト地山ブロックを少量含む。
28	P7	6層	黄橙色（2.5Y5/3）	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
29	SK3033	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
30	SK3033	2層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
31	P9	1層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山ブロックを少量含む。
32	P9	2層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山を斑状に含む。
33	P9	3層	黒褐色（10YR4/2）	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山を斑状に多く含む。
34	P8	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロックを微量に含む。
35	P8	2層	黒褐色（10YR2/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロックを少量含む。炭化粒を少量含む。
36	P8	3層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。炭化物を微量に含む。
37	P8	4層	灰黄褐色（10YR4/3）	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
38	P8	5層	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂質シルト	ややしまっている。黒褐色シルトブロックを含む。
39	P17	1層	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	しまっている。粘性やや有り。炭化物を少量含む。
40	SD3035	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。炭化物を微量含む。黄褐色地山ブロック少量含む。
41	SD3035	2層	黒褐色（10YR3/2）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロック含む。
42	SD3035	3層	黒褐色（10YR3/1）	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に含む。

第５図　調査区西壁断面図

Ｐ８（第３、５図）

【位置】調査区の西壁沿いやや南側に位置している。

【重複】Ｐ７、Ｐ９より古い。

【方向・規模】検出した範囲では、径約 0.6 ｍで、深さ約 40㎝の規模である。

【遺物・年代】土師器と須恵器坏片が出土してるが、正確な年代は不明。

Ｐ 16（第３、６図）

【位置】調査区の南側に位置している。

【重複】Ｐ 28 よりも新しい。

【方向・規模】約 0.５ｍ×約 0.５ｍの不定形で、深さ約 30㎝の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していない。検出層がＳＸ 3034 性格不明遺構と同じ層なので、同時期とみられる。周囲のＰ 13、14、15 ピットも同時期とみられる。

〔Ⅵｃ・Ⅵｄ層上面検出遺構〕

ＳＥ 3032 井戸跡（第３、４図）

【位置】調査区の南壁沿いほぼ中央に位置している。

【重複】重複関係はない。

【方向・規模】検出した範囲では、直径約２ｍの円形とみられる。現地表面からの深さ約 2.6ｍ、検出面から深さ約 1.2ｍまで掘り下げたが、安全管理上の理由で、それ以上の精査作業は断念した。

【埋土】１層は自然堆積とみられるが、２～４層までは地山ブロックを多く含んでおり、灰白色火山灰が２次堆積しているので、人為的に埋め戻された層と考えられる。それより下層は、土質がほぼ均質であり、自然木の枝木を含むことから自然堆積と考えられる。井戸枠の痕跡は確認できなかった。

【遺物・年代】内外面の摩耗が激しく、詳しい調整は不明である土師器の坏２点（第７図１・２）と図示していないが、砥石が出土している。他にも、須恵器の坏や蓋、甕の他にも須恵系土器の底部破片なども出土している。このことから、10 世紀前葉以降の時期と推測される。

Ｐ７（第３、５図）

【位置】調査区の西壁沿いやや南側に位置している。

【重複】ＳＫ 3033 土坑、Ｐ８より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、径約 1.8ｍで、深さ約 90㎝の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序との関係より、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ 3033 土坑（第３、５図）

【位置】調査区の西壁沿いほぼ中央に位置している。

【重複】Ｐ７より古く、Ｐ６、17、ＳＤ 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、長軸約 1.7ｍ、短軸約１ｍの楕円形で、深さ約 50㎝の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していない。基本層序との関係より、平安時代の遺構と考えられる。

Ｐ６（第３、６図）

【位置】調査区の西壁近くほぼ中央に位置している。

【重複】ＳＫ 3033 土坑より古い。

【方向・規模】検出した範囲では、長軸約１ｍ、短軸約 0.6ｍの楕円形で、深さ約 40㎝である。

【遺物・年代】平安時代の土師器の坏や甕の小破片が出土しているが、正確な年代は不明。

〔Ⅵａ・Ⅵｂ層上面検出遺構〕

Ｐ 26（第３、４図）

【位置】調査区の東壁沿いに位置している。

【重複】Ｐ 27 より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、径約 0.5ｍで、深さ約 40㎝の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序との関係より、近世の遺構と考えられる。

P 27（第３、４図）
【位置】調査区の西壁沿いに位置している。
【重複】ＳＫ 3031 土坑より新しく、Ｐ 26 より古い。
【方向・規模】検出した範囲では、径約 0.4 ｍで、深さ 15㎝の規模である。
【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序との関係より、近世の遺構と考えられる。

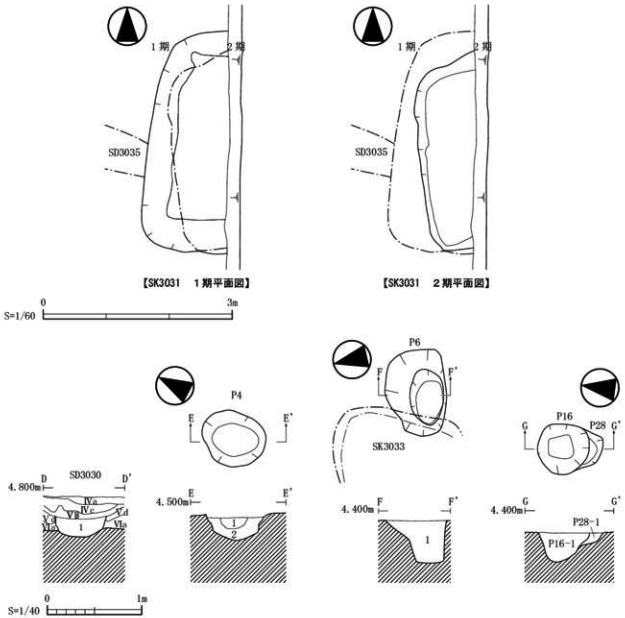
ＳＫ 3031 土坑（第３、４、６図）
【位置】調査区の西やや南寄りに位置し、西側は調査区外に延びている。
【重複】ＳＤ 3030 溝跡、Ｐ 27 より古くＳＤ 3035 溝跡より新しい。
【方向・規模】確認した範囲では、長方形で長軸約 3.3 ｍ、短軸約 0.9 ｍ、深さ約 60㎝の規模である。
【埋土】粘質シルトが主で、炭化物や腐植を多く含む。堆積層に針葉樹の枝葉など腐植を含む層が多い。詳しい用途は不明ではあるが、水を常時溜めた施設の跡と考えられる。平面と層序から、完掘状態の１期、２層まで埋まった２期の、大きく２つの時期があったと考えられる。
【遺物・年代】平安時代の土師器、須恵器片も出土しているが、近世の陶器の皿や碗、瓦片、瓦質土器の火鉢の破片が出土している（第７図７）。また、別の個体と考えられる下駄が片方ずつ出土している（第８図 19・20）。

〔Ⅴｃ・Ⅵｂ層上面検出遺構〕
ＳＤ 3030 溝跡（第３、４、６図）
【位置】調査区の東から中央部に位置し、北側と東側は調査区外に延びている。
【重複】ＳＫ 3031 土坑、ＳＤ 3035 溝跡より新しい。
【方向・規模】検出した範囲では、長さ約９ｍ、幅約 0.6 ｍ、深さ約 20㎝の規模で、湾曲している。
【遺物・年代】一部、壁際から木材が出土しており、機能時には板材により護岸が施されていたと思われる。19 世紀前半頃とみられる近世の陶磁器片や木製品が出土している（第８図 16・17）。

Ｐ４（第３、６図）
【位置】調査区のほぼ中央部に位置し、ＳＤ 3030 溝跡に隣接している。
【重複】ＳＤ 3035 溝跡より新しい。
【方向・規模】長径 0.7 ｍ、短径 0.5 ｍの楕円形で深さ約 20㎝の規模である。
【遺物・年代】平安時代と考えられる須恵器の坏片が出土しているが、ＳＤ 3030 溝跡と同じ層で検出されたことから、近世の遺構と考えられる。

３　まとめ

今回の調査の結果、近世の溝跡と土坑とピット、平安時代の井戸跡と溝跡と土坑とピットなどの遺構を検出した。遺物は平箱（590㎜ × 386㎜ × 75㎜）で２箱出土している。多くは近世から近代にかけての陶磁器であるが、平安時代の須恵器や土師器なども出土した。ただし、ほとんど図化するのが困難



遺　構	層位	土　色	土性	備　考
SD3030	1層	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	ややしまっている。炭化物を多く含む。

遺　構	層位	土　色	土性	備　考
P4	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	しまっている。炭化粒を少量含む。
P4	2層	暗褐色（10YR3/3）	シルト	非常にしまっている。炭化粒を少量含む。

遺　構	層位	土　色	土性	備　考
P6	1層	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	しまっている。青灰色地山ブロックを大量に含む。

遺　構	層位	土　色	土性	備　考
P16	1層	灰色（7.5Y5/1）	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルトを斑状に多く含む。
P28	1層	灰色（7.5Y4/1）	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルトを斑状に多く含む。

第６図　遺構平断面図

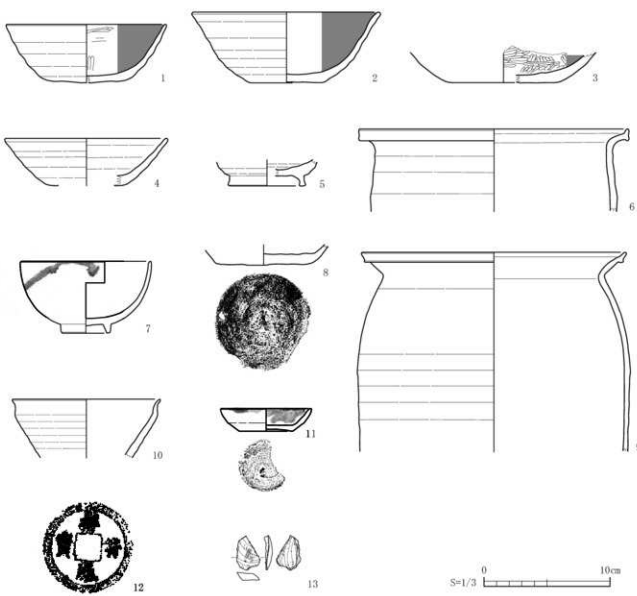
な小片である。

主要遺構の新旧関係や重複関係は第９図のとおりで、矢印は重複関係があることを示す。

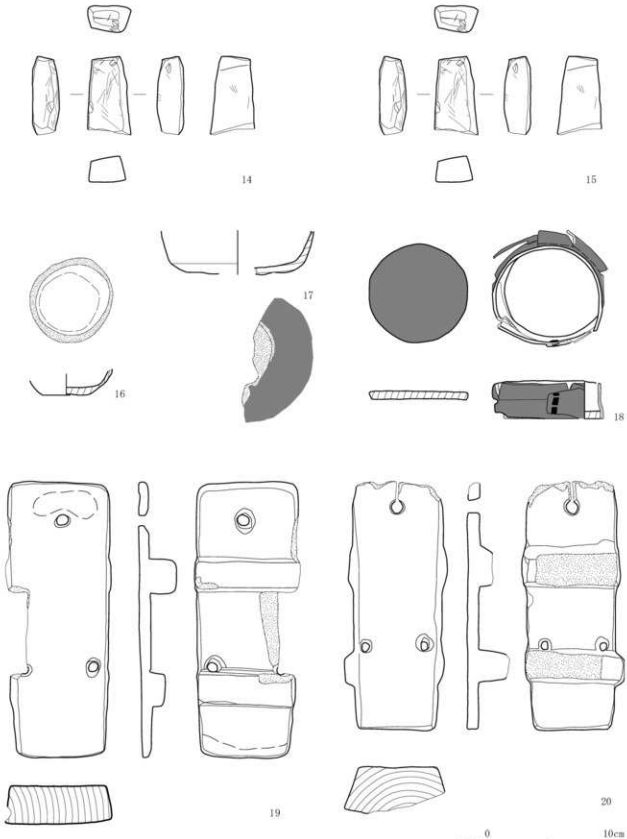
各層の概要については、Ⅰ層が現代の盛土層である。炭化材を多く含むⅢ層は近代の遺物を含むことから、近隣の第 106 次調査などで確認された明治 32 年に南宮地域で発生した大火による層と同一と考えられる。

Ⅴａ層は炭化物を多く含んでおり、近世末の火災層と考えられる。Ⅴｂ層からは 19 世紀前半頃の遺物が出土しているので、Ⅴ層は近世の整地層と考えられる。近世の遺構は、SD3030 溝跡とＰ４を検出した層が同じであることから、同時期とみられ、それらより下層のＳＫ 3031 土坑は大きく２時期に分けられる。

Ⅵ層は、陶磁器が出土しなくなり、土師器や須恵器などの古代の遺物が出土する層である。Ⅵ層から出土する遺物は、概ね９～ 10 世紀代に収まるとみられることから、遺構も同じ年代とみられ、数



第７図　出土遺物



第８図　出土遺物２

出土遺物観察表

（単位：cm）

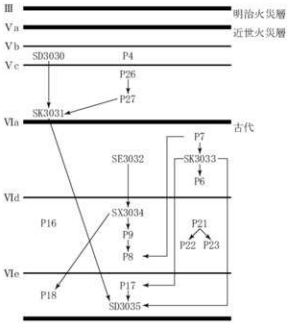
番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口　径 残存率	底　径 残存率	器高		
1	土師器 坏	SE3032	#1	ロクロナデ 底部：摩滅のため不明	ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) 8/24	(6.4) 16/24	4.6		R11
2	土師器 坏	SE3032	#1	ロクロナデ 底部：回転糸切	ヘラミガキ→黒色処理	(14.8) 4/25	(6.0) 14/24	5.6		R9
3	土師器 坏	P21	#1	摩滅のため不明	ヘラミガキ→黒色処理	－	(8.8) 10/24	－		R19
4	須恵系土器 坏	SD3034	#1	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.8) 5/24	－	－		R22
5	須恵器 高台付坏	SD3034	#1	ロクロナデ 回転ヘラ切→高台貼付け	ロクロナデ	－	(5.4) 8/24	－		R21
6	土師器 甕	SD3034	#1	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.2) 3/24	－	－		R23
7	陶器 碗	SK3031	#1	ロクロナデ・灰釉・鉄釉流し 底部：回転糸切　高台内黒釉	ロクロナデ→灰釉	(10.2) 14/24	3.5 24/24	5.7		R16
8	須恵器 坏	－	Vc	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切	ロクロナデ	－	(7.2) 18/24	－		R2
9	土師器 甕	－	Vc	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.9) 4/24	－	－		R1
10	陶器 天目茶碗	－	Va	ロクロナデ→鉄釉	ロクロナデ→鉄釉	(11.6) 1/24	－	－	瀬戸・美濃?	R7
11	カワラケ 灯明皿	－	Vb	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切	ロクロナデ	(7.0) 10/24	(4.4) 17/24	1.8	油煙あり	R4
12	古銭	－	VIa	－	－	－	－	－	洋符通寶	M1
13	石器 剥片	SK3031	#1	－	－	2.8	1.8	0.8	黒曜石 （湯の倉産）	R24
14	砥石	－	Va	－	－	(6.1)	3.4	2.1		R5
15	砥石	－	Va	－	－	(7.8)	4.2	2.6		R5
16	木製品 挽物	SD3030	#1	ロクロ挽き	ロクロ挽き	－	3.8	－		W1
17	木製品 漆器椀	SD3030	#1	黒漆	ロクロ挽き→黒漆	－	(8.0)	－		W2
18	木製品 円形曲物	SK3031	#1	赤漆	－	上蓋7.7 容器8.8	－	3.0		W3
19	木製品 下駄	SK3031	#1	－	－	21.8	8.4	2.9		W4
20	木製品 下駄	SK3031	#1	－	－	19.6	7.9	3.7		W5

度にわたる整地が実施されたと推測される。Ⅵc・d層上面で10世紀前葉の遺物を伴うＳＥ3032井戸跡とＳＫ3033土坑、Ｐ７、６などの遺構を検出した。Ⅵe層上面で、９世紀中盤から後半とみられるＳＤ3034溝跡やＰ８、９などを検出した。もっとも古いⅦ層で上面で検出したのは、９世紀前半ごろと想定される遺物を伴うＳＤ3035溝跡とＰ17、Ｐ18である。

当調査区が面している南側の市道新田浮島線は、近世の塩竈街道と同一であり、当調査区周辺のこれまでの調査でも、近世の遺構や遺物が多数確認され、塩竈街道沿いに集落が形成されていた。また、平安時代の遺構遺物については、町地区では９世紀になると増加する傾向があることが報告されており、今回の調査でも同様の傾向は確認できた。また、遺構は確認していないが、中世の遺物も出土している。

参考文献

多賀城市教育委員会 2018『新田・山王遺跡ほか一震災復興関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』多賀城市文化財調査報告書第137集



第９図　遺構新旧関係

調査区全景（南から）

ＳＤ 3030 溝跡完掘状況（北西から）

ＳＤ 3034 溝跡完掘状況（西から）

ＳＫ 3031 土坑・ＳＤ 3035 溝跡完掘状況（西から）

Ｐ７完掘状況（東から）

写真図版１

ＳＫ 3033 土坑・Ｐ６完掘・ＳＤ 3035 溝跡検出状況（東から）

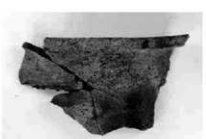
ＳＥ 3032 井戸跡全景（南東から）

3　ＳＥ 3032 井戸跡出土土師器坏

4　ＳＥ 3032 井戸跡出土土師器坏

5　ＳＤ 3034 溝跡出土須恵系土器

6　ＳＤ 3034 溝跡出土須恵器高台付坏



7　ＳＤ 3034 溝跡出土土師器甕

8　ＳＫ 3031 土坑出土陶器碗

9　Ⅴｃ層出土天目茶碗

10　Ⅴｂ層出土灯明皿

11　Ⅵａ層出土銭貨

写真図版２

Ⅲ　高崎遺跡第127次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は東田中一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和２年11月26日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現地表から最大約40㎝の掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。

同年12月７日に地権者から発掘調査の依頼を受け、12月９日には作業員を動員して人力での表土掘削を開始した。

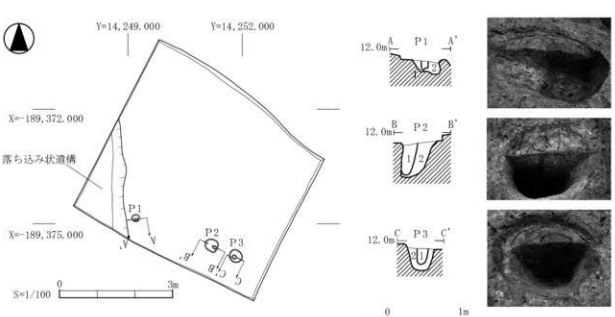
地表面より約30㎝の深さで時期不明の遺構を確認したため、遺構の掘削及び写真撮影、平面・断面図作成を行った。

12月25日には発生土による埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

第１図 調査区位置図

2　調査成果

調査区西側端部で性格不明の落ち込み状遺構を、南半部で柱穴３基を発見した。調査区内からは遺物は出土しておらず、いずれの遺構も年代不明である。



第２図　調査区平面・断面図

Ⅳ　東田中窪前遺跡第９次調査

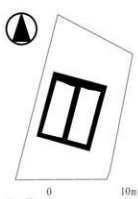
１　調査に至る経緯と経過

本件は、東田中一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和２年10月21日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に柱状改良杭の打設は予定されていないものの、申請地南側近接地で平成17年度に第３・４次調査を実施し、遺構が確認されているため、当該工事においても遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外への変更は困難であると判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出されたことから12月10日より作業員を動員し、建物基礎部分の表土掘削を人力で行った。

調査区壁面の土層観察から、当該地は過去に削平を受けており、遺構が残存していないと判断されため、調査区の写真撮影及び図面作成を行い、12月11日に埋戻して現地作業の一切を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

２　調査成果

Ⅰa層：現代の住宅整地層。青灰色砕石（5B5/1）。層厚約15cmである。

Ⅰb層：現代の住宅整地層。黄色粘質土（2.5Y7/8）。層厚約15cmである。暗褐色砂層が互層状に混じる。

Ⅱ層：地山。明黄褐色岩盤（2.5Y6/8）。

調査区全景（南西から）

調査区全景（北から）

Ⅴ　小沢原遺跡第21次調査

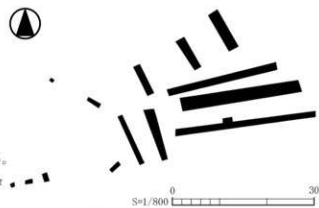
1　調査に至る経緯と経過

本件は、浮島二丁目地内における介護施設建築に伴う確認調査である。

令和２年11月11日、地権者より当該地での介護施設建築に伴う伐根、掘削、整地計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、3,292㎡の範囲において、既存盛土を90cm削平し、同敷地内へ150～190cm盛土して整地した上に、ベタ基礎で建物を建築するものである。約1,400㎡を超える開発が見込まれ、小沢原遺跡への影響が懸念されるため確認調査を行うこととなった。

地権者から令和２年11月25日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、11月30日から発掘調査に着手した。計画地内に14箇所の調査区を設定した。表土を除去し、Ⅲ層上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構や遺物は確認できなかった。12月25日に掘削及び平面図作成、写真撮影などの記録を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

Ⅰ層：現代の盛土。周辺の造成時に盛られたと推定される。計画地西側で確認した。

Ⅱ層：灰黄褐色土（10YR4/2）。表土で、厚さは８cmある。

Ⅲ層：明黄褐色土（10YR6/6）。大小の礫を含む地山（ローム層）である。

調査区全景（北から）

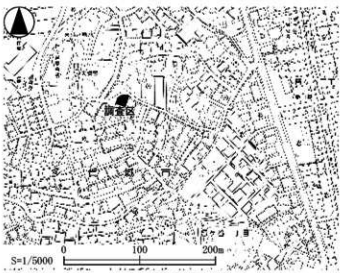
調査区全景（西から）

Ⅵ　留ヶ谷遺跡第10次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は留ヶ谷一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和２年９月２日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画地では、過去の造成工事により遺構は削平されている可能性が高いことから、慎重工事の対応が妥当と考えられた。

しかし、県文化財課と協議を重ねた結果、削平により遺構が失われている確証が得られず、遺跡への影響が懸念されることから、発掘調査を行うこととなった。



第１図 調査区位置図

12月７日には、重機による掘削を開始したが、遺構・遺物は発見されなかった。また、調査区西壁の断面観察により、調査区南端部から北側にかけて、当初の予想と同様に基盤層が大きく削平されている状況を確認した。その後、同日中に埋め戻しを完了し、現地作業の一切を終了した。

調査区全景（北から）

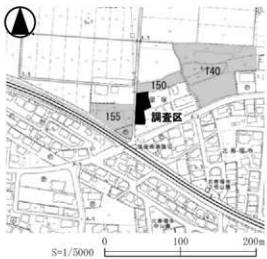
基盤層削平状況（西から）

Ⅶ～Ⅸ　新田遺跡第151 ～ 153次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字一里塚地内における個人住宅新築工事３件に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和２年11月25日（151・152次）及び12月３日（153次）に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に柱状改良杭の設置が予定されており、それぞれ長さ7.5mを42か所（151次）、長さ8.3mを28か所（152次）、長さ4.2mを27か所に打ち込む工事を行うものである。

申請地周辺では、北側隣接地で令和２年度に第150次調査を実施しており、現表土から約１mで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。



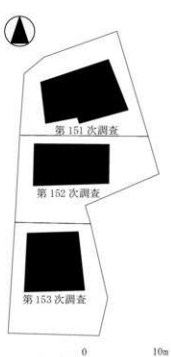
第１図　調査区位置図

その後、各地権者から令和３年１月７日に埋蔵文化財発掘の届出、４月５日に発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、４月12日（151次）、４月16日（152次）、４月19日（153次）に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。

表土掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、古代末頃と想定される基本層を確認した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。

その後、４月15日（151次）、４月27日（152次）、５月12日（153次）にそれぞれ遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代の溝跡やピット、小溝群を確認した。５月12日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、５月14日～５月20日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。また、調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、Ⅲ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断される。

５月25・26日には調査用器材を搬出し、６月１日に全ての調査区の埋め戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序（第６図）

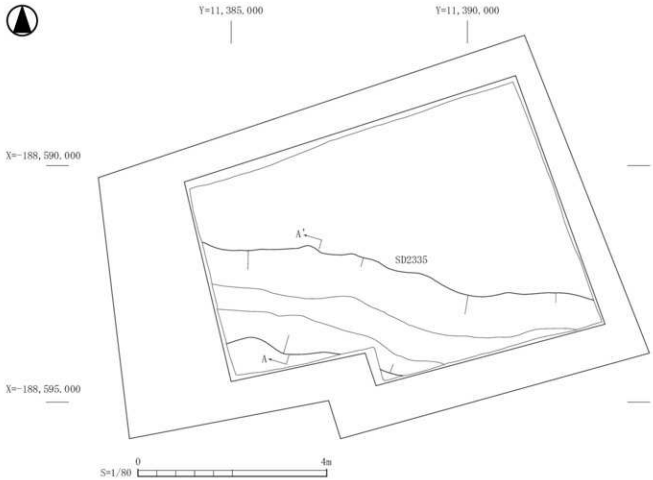
Ⅰa層：現代の盛土層。黄褐色砂質土（10YR5/6）、全調査区で層厚約50cmである。
Ⅰb層：近世以降の耕作土層。暗褐色砂質土（10YR3/4）、全調査区で層厚約20 ～ 40cmである。
Ⅰc層：近世以降の盛土層。にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）、全調査区で層厚約10 ～ 30cmである。
Ⅱa層：中世以降の堆積層。褐灰色粘質土（10YR4/1）。全調査区で層厚約10cmである。
Ⅱb層：古代末頃の堆積層。黒色粘質土（10YR1.7/1）。全調査区で層厚約10 ～ 15cmである。
Ⅲa層：古代の遺構検出面である。褐灰色粘土（10YR5/1）。全調査区で層厚約15cmである。151次では灰白色火山灰（十和田a）が部分的に混入する。
Ⅲb層：古代の基盤層である。褐灰色粘土（10YR4/1）。151・152次調査で確認し、層厚は約10cmである。
Ⅲc層：古代の基盤層である。暗灰黄色土（2.5Y4/2）。153次調査で確認し、層厚約20cm以上である。
Ⅳ 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)。全調査区で層厚約30 ～ 45cmである。
Ⅴ 層：古代以前の堆積層。灰黄褐色砂層(10YR4/2)。全調査区で層厚約15cm以上と考えられる。

（2）発見遺構と遺物

ＳＤ2335溝跡（151次：第３・４図）
【位置】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。方向は西で北に13度偏している。
【調査状況・重複】重複関係は認められない。
【形状・規模】上幅は224cm、深さ28cmである。底面は皿状であり、立ち上がりは非常に緩やかである。
【埋土】３層に区分される。１層は基本層Ⅱa層に相当し、部分的に土色は違うものの、黒褐色粘質土(10YR3/2)で、粘性やや強く、締まりは中、白色砂粒を少量含む。２層は基本層Ⅱb層に相当し、黒色粘土(10YR1.7/1)で、粘性強く、締まりは密、φ１～２cm黄褐色ブロック少量含む。３層は黒色粘土(10YR2/1)で、粘性強く、締まりは密、φ５cm黄褐色ブロック多量含む。
【遺物】遺物は出土していない。

ＳＸ2336小溝跡（153次：第７図）
【位置】調査区北部で発見した小溝跡である。方向は南東から北西に伸びた後に北方向へ約32度屈曲する。
【調査状況・重複】SX2337・SX2338と重複しており、それらより新しい。
【形状・規模】上幅は36cm、深さは約15cmである。底面はＵ字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。
【埋土】単層の暗褐色土(10YR3/4)である。粘性なし。締まり中。φ２cm程度の褐色ブロックを多量含む。
【遺物】遺物は出土していない。

ＳＸ2337小溝跡（153次：第７図）
【位置】調査区中央部で発見した小溝跡である。方向は北で東に約５度偏している。
【調査状況・重複】SX2336・SX2338と重複しており、前者より古く後者より新しい。
【形状・規模】上幅は約36cm、深さは７cmである。底面はＵ字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。
【埋土】単層の暗褐色土(10YR3/3)である。粘性なし。締まり中。φ２cm程度の褐色ブロックを少量含む。
【遺物】遺物は出土していない。



第３図　第 151 次　調査区平面図

第４図　第 151 次　遺構断面図

ＳＸ2338小溝跡（153次：第７・８図）

【位置】調査区全域で発見した小溝群で、７条確認した。方向は北で西に約０度から５度偏している。

【調査状況・重複】SX2336・SX2337・SX2339と重複しており、SX2336・SX2337より古く、SX2339より新しい。

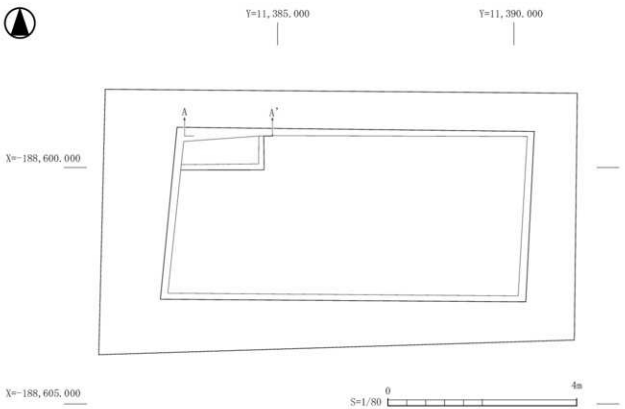
【形状・規模】上幅は36cmから68cm、深さ16cmから28cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土(10YR3/2)。粘性なし。締まり中。φ１～３cm程度の暗褐色ブロックを少量含む。

【遺物】遺物は土師器坏２点、土師器甕２点が出土しているが、いずれも小破片である。

ＳＸ2339小溝群（153次：第７図）

【位置】調査区西部で発見した小溝群で、２条確認した。方向は北で東に約16度から44度偏している。



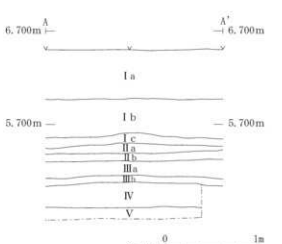
第５図　第 152 次　調査区平面図

【調査状況・重複】SX2338と重複しており、それより古い。

【形状・規模】上幅は30から40cm、深さ８cmから12cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土(10YR3/2)。粘性なし。締まり中。φ５cm程度の暗褐色ブロックを少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。



第６図　152 次　基本層

（３）その他の発見遺物

【151次】基本層Ⅲa層から、須恵器甕４点、須恵器瓶類10点が出土しているが、いずれも小破片である。

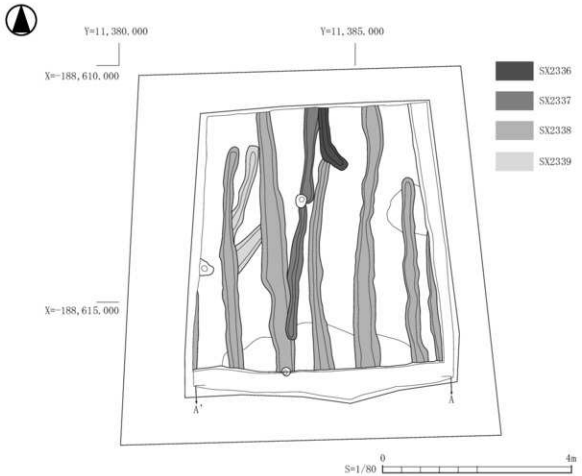
【152次】基本層Ⅲa層から、須恵器甕１点が出土しているが、いずれも小破片である。

【153次】基本層Ⅰc層から、土師器坏８点、土師器甕４点が出土しているが、いずれも小破片である。

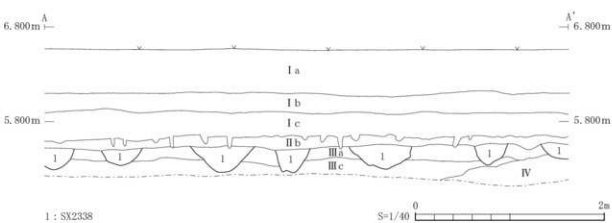
３　まとめ

（１）古代の溝跡と小溝群、ピットを発見した。

（２）出土遺物の様相から古代を中心とした遺構が分散していると考えられる。

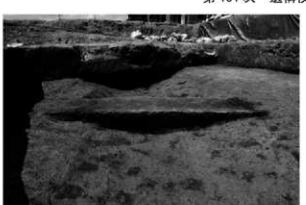


第７図　第 153 次　調査区平面図



第８図　第 153 次　遺構断面図

第 151 次　遺構検出状況（南西から）



第 151 次　ＳＤ2335 断面（南東から）

第 151 次　平面図作成状況（西から）

第 151 次　調査区完掘状況（北西から）

第 151 次　作業状況（北西から）

写真図版 1

第 152 次　調査区全景（南西から）

第 152 次　作業状況（南西から）

第 152 次　基本層序（南から）

写真図版 2

第 153 次　遺構検出状況（北東から）

第 153 次　平面図作成状況（北西から）

第 153 次　調査区完掘状況（南西から）

写真図版 3

X　新田遺跡第154次調査

1　調査に至る経緯と経過

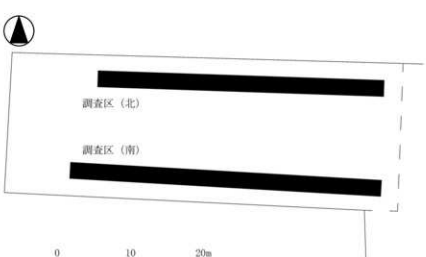
本件は、新田字後における賃貸住宅６軒及び道路造成工事に伴う確認調査である。

令和２年11月27日、事業者から当該地での当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、993㎡の敷地内で賃貸住宅６軒の新築及び位置指定道路を造成するものである。賃貸住宅の基礎は、１軒につき柱状改良杭27本を設置し、道路は長さ52.2m、幅6mを敷設し、給排水管を埋設する。また、道路部分には排水溝の設置も計画されている。これらの工事の際に、遺跡へ影響を与える可能性が考えられる。当該地周辺では、平成４年度に第13次調査が実施されており、現地表面より約100cmで遺構を検出している。そのため確認調査を実施することとなった。

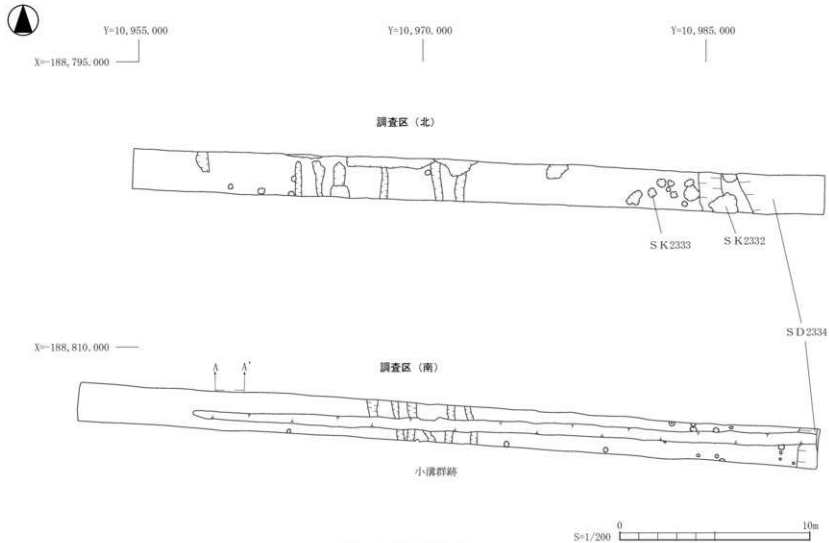
第１図　調査区位置図

事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことから、４月13日より現地調査を開始した。北と南にそれぞれ１つ調査区を設定し、４月13日から重機による表土掘削を行った。４月14日より作業員を動員し、北側の調査区から精査を開始した。その後、遺構の分布が確認できた段階で記録作業を行った。

４月27日に重機で埋め戻しを行った後に、休憩施設と発掘器材等の撤収を行い、５月７日に確認調査を終了した。



第２図　調査区配置図


Y=10,955.000
Y=10,970.000
Y=10,985.000
X=-188,795.000
調査区（北）
SK2333
SK2332
SD2334
X=-188,810.000
A
A'
調査区（南）
小溝群跡
0
10m
S=1/200

第３図　調査区平面図

2　調査成果

（1）基本層序（第４図）

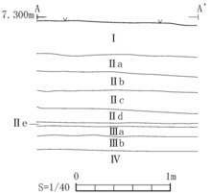
Ⅰ層：現代の耕作土。層厚約35cmである。

Ⅱa層：オリーブ褐色砂層（2.5Y4/3）。やや黒みを帯びている。層厚約20cmである。Ⅱ１層上面が遺構検出面。

Ⅱb層：にぶい黄褐色砂層（10YR4/3）。やや粘土質である。層厚約20cmである。

Ⅱc層：にぶい黄褐色砂層（10YR4/3）。Ⅱb層よりやや明るく砂粒も大きい。層厚約20cmである。

Ⅱd層：にぶい黄褐色砂層（10YR4/3）。Ⅱc層よりやや明るく砂粒もさらに大きい。層厚約10cmである。



第４図　基本層序

Ⅱe層：暗灰黄色砂質シルト層（2.5Y4/2）。やや粘性がある。層厚約4cmである。

Ⅲa層：黒褐色粘土層（10YR3/1）。植物由来と考えられる黒色粒を多く含む。層厚約10cmである。

Ⅲb層：褐灰色粘土層（10YR4/1）。層厚約15cmである。

Ⅳ層：灰黄褐色粘土層（10YR5/2）。

（2）発見遺構と遺物（第３・５図）

今回の調査では、南北に２つの調査区を設定し、それぞれ遺構検出面まで50cm程度掘削を行った。その結果、２つの調査区の東端で連続する大溝跡（ＳＤ2334）、小溝群跡、土坑、柱穴を確認した。なお、調査区（南）の中央には、東西方向に長い撹乱が存在している。小溝群跡は、畑の痕跡と推定される。

また、下層における遺構の有無を確認するため、調査区（南）の遺構が検出されなかった西端部を現地表面から１m30cm程度深掘りし、下層の状況を確認した。

［調査区（北）］

ＳＫ2332土坑（第３図）

【位置】調査区（北）の東側。

【平面形・規模】不整形。規模南北約１m、東西約1m50cm。

【遺物】内面に黒色処理を施した土師器坏の底部片（第５図３）が出土した。

ＳＫ2333土坑（第３図）

【位置】調査区（北）の東側。

【平面形・規模】円形を基調とする。規模南北約40cm、東西約40cm。

【遺物】須恵系土器小型坏（第５図２）が出土した。

［調査区（北・南）］

ＳＤ2334溝跡（第３図）

【位置】調査区（北）の東端、調査区（南）の東端。

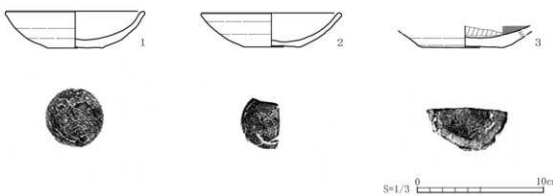
【平面形・規模】調査区（北）の幅４m70cm以上、調査区（南）幅１m10cm以上。

【遺物】遺物は出土していない。

3　まとめ

（1）出土した遺物から9～10世紀の遺構が分布している可能性が高い。

（2）小溝群跡は畑の痕跡であると考えられる。



（単位：cm）

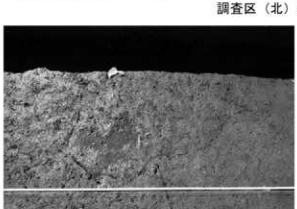
No.	器種	遺構	層	特徴 外面	特徴 内面	口　径 残存率	底　径 残存率	器高	登録 番号	備考
1	須恵系土器 小型坏	-	Ⅱa	ロクロナデ 底部：回転糸切り、無調整	ロクロナデ	11.0cm 4／24	4.4cm 24／24	3.0cm	R1	BⅢ類
2	須恵系土器 小型坏	SK2333	1	ロクロナデ 底部：回転糸切り、無調整	ロクロナデ	11.0cm 5／24	(4.2cm) 8／24	2.9cm	R3	BⅢ類
3	土師器 坏	SK2332	1	ロクロナデ 底部：手持ちヘラ削り、切り離し不明	ヘラミガキ、黒色処理	-	(6.4cm) 10／24	(1.5cm)	R2	A類

第５図　出土遺物実測図

出土遺物写真

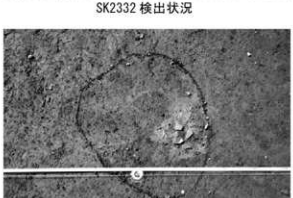
写真図版１

調査区（北）全景（東から）



SK2332 検出状況

調査区（南）全景（西から）



SK2333 検出状況

調査区（南）大溝（南から）

写真図版 2

XI　新田遺跡第 155 次調査

1　調査に至る経緯と経過

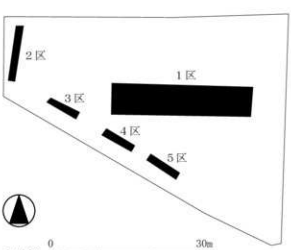
本件は、南宮一里塚地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和２年 12 月 25 日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、1776.74 ㎡の敷地内に現地表面から最大１ｍの盛土を施した後、幅６ｍの道路と９区画の宅地の造成を行うものである。申請地周辺では、北側近接地で令和２年度に第 150 次調査を実施しており、現地表面から約 0.7 ｍで遺構を発見しており、道路部分について遺構の分布を把握するため確認調査を実施することになった。

令和３年４月６日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、令和３年４月 13 日から発掘調査に着手した。

今回の調査では、調査区内に５箇所のトレンチを設定し、トレンチ１から順に重機による掘削を開始した。４月 14 日から作業員を入れてトレンチ１から遺構検出作業を開始した。22 日には平面図の作成を開始した。これ以降、写真撮影や図面作成を随時行い、５月 25 日には５箇所のトレンチ全ての作業が終了し、６月２日から６月３日にかけて重機による埋戻しを行い、調査を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序

Ⅰａ層：現代の耕作土。暗褐黄色シルト（2.5YR4/2）。厚さは 14 ～ 22 ㎝である。

Ⅰｂ層：現代の耕作土。暗褐黄色シルト（2.5YR5/2）。厚さは約 50 ㎝である。

Ⅱ　層：旧表土。褐灰色シルト（10YR4/1）。炭化物を含む。厚さは 10 ～ 14 ㎝である。

Ⅲ　層：古代の遺構検出面。灰黄褐粘質シルト（10YR4/2）。酸化鉄を含む。厚さは約 26 ㎝である。

Ⅳ　層：黄褐色シルト（2.5YR5/3）。マンガン粒を含む。厚さは８～ 16 ㎝である。

Ⅴ　層：黄褐色砂（10YR5/3）。厚さは約 30 ㎝である。

（2）発見遺構と遺物

ＳＫ 2325 土坑（第３図）

【位置】１区北側壁面中央で発見した土坑である。

【重複】ＳＸ 2327 より新しい。

【規模】東西約４m、深さが 80 cmである。

【埋土】５層に分けられる。全て自然堆積である。２層には灰白色火山灰が一次堆積層する。

【遺物】出土していない。

ＳＫ 2326 土坑（第３図）

【位置】１区東側で発見した土坑である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【規模】平面では南北約 3.3 m、東西約 3.4 mの隅丸方形である。深さは最大約 76 cmである。

【埋土】９層に分けられる。全て自然堆積である。５層には灰白色火山灰が一次堆積する。

【遺物】２層から土師器坏、須恵系土器高台付皿が出土している。

ＳＸ 2327 小溝群（第３図）

【位置】１区西側で発見した、東西方向の小溝群である。（第５図）

【重複】ＳＫ 2325 より古く、SD2329 より新しい。

【方向】東で北に 15 度偏している。

【規模】全長約５～７m、上幅約 30 cm、深さは約 20 cmである。

【埋土】黒褐色粘質シルト（10YR3/1）の単層である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ 2328 溝跡（第３図）

【位置】１区東端で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向】北で東に 10 度偏している。

【規模】調査区内では約５mの長さを確認した、上幅約 30 cm、深さは約 10 cm。

【埋土】灰黄褐色粘質シルト（10YR4/2）の単層である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ 2329 溝跡（第３図）

【位置】１区西側で発見した、南北方向の小溝跡である。

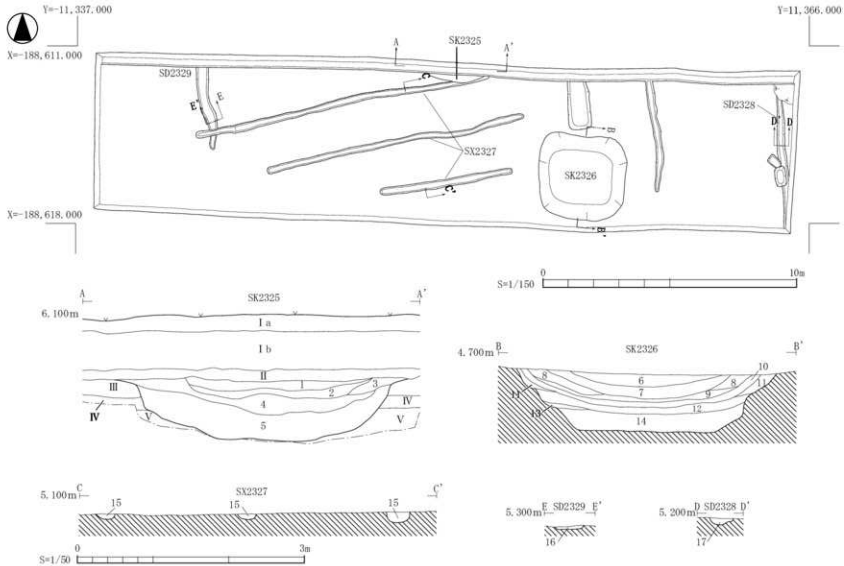
【重複】ＳＸ 2327 より古い。

【方向】北で東に５度偏している。

【規模】調査区内では約３mの長さを確認した、上幅約 50 cm、深さは約５cm。

【埋土】褐灰色粘質シルト（7.5YR4/1）の単層である。

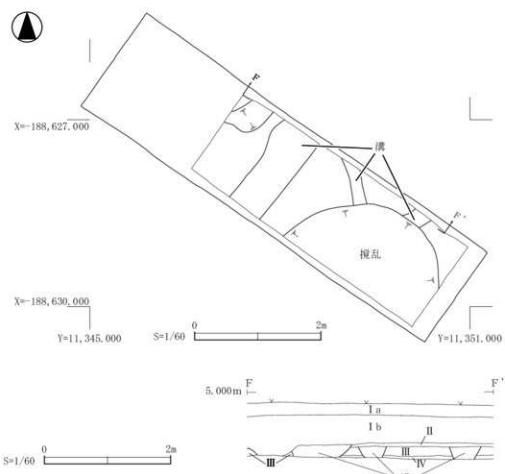
【遺物】出土していない。



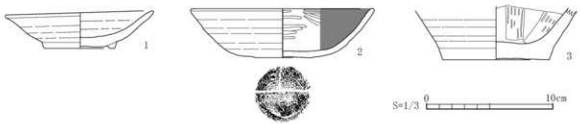
第３図　１区調査区平面図・断面図

第３図　土層注記表

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SK2325	1	褐色（7.5YR４/3）	シルト	酸化鉄、礫を少量含む。自然堆積層。
2	SK2325	2	灰白色（10YR8/2）	シルト	灰白色火山灰の自然堆積層。
3	SK2325	3	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	酸化鉄を含む。自然堆積層。
4	SK2325	4	褐灰色（10YR4/1）	粘土	酸化鉄を含む。自然堆積層。
5	SK2325	5	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂	黄灰色（2.5Y4/1）の粘土がスジ状に混在。自然堆積層。
6	SK2326	1	黒褐色（7.5YR3/2）	粘質シルト	締りあり、粘性あり、小礫を含む。自然堆積層。
7	SK2326	2	黒色（10YR1.7/1）	粘土	締りあり、粘性あり。うすい黄橙色の粘土層が間に入る。自然堆積層。
8	SK2326	3	黄褐色（2.5YR5/3）	砂質シルト	締りあり。小礫を含む。自然堆積層。
9	SK2326	4	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土	締りあり、粘性あり。炭を含む。
10	SK2326	5	灰白色（5Y8/1）	シルト	締りあり。灰白色火山灰の自然堆積層。
11	SK2326	6	灰黄色（2.5Y6/2）	シルト	締りあり。小礫と酸化鉄を含む。自然堆積層。
12	SK2326	7	にぶい黄橙色（10YR6/4）	砂質シルト	Ⅳ層に由来する土（地山の崩落土）。自然堆積層。
13	SK2326	8	褐灰色（10YR4/1）	粘土	締りあり、粘性あり。カベに近づくにつれて砂が混じる。自然堆積層。
14	SK2326	9	にぶい黄橙色（10YR5/4）	粘質シルト	締りあり。砂、Ⅳ層ブロックを含む。自然堆積層。
15	SX2327	1	黒褐色（10YR3/1）	粘質シルト	締りあり。酸化鉄、マンガン、黄褐色シルトブロックを含む。
16	SD2328	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	締りあり。Ⅳ層のブロックを含む。
17	SD2329	1	褐灰色（7.5YR4/1）	粘質シルト	締りあり、粘性あり。酸化鉄、小礫、砂を含む。



第４図　５区調査区平面図・断面図



（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			写真	備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高			
1	須恵系土器 高台付皿	SK2326	2層	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ	(11.5) 17/24	5.5 24/24	2.8	1-7		R1
2	土師器 坏	SK2326	2層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	(14.3) 6/24	4.4 24/24	3.9	1-8		R3
3	陶器 擂鉢	-	LⅡ	ロクロナデ	おろし目	-	(8.3) 10/24	3.9			R5

第５図　１区出土遺物

３　まとめ

今回の調査では、１区で土坑２基、溝跡２条と小溝群を発見した。ＳＫ 2326 の年代については中層に灰白色火山灰の一次堆積が認められることから、灰白色火山灰が降下した 10 世紀前葉以前から自然に堆積していたと考えられるが、詳細な時期は不明である。１区の西側で、畑に関連すると考えられるＳＸ 2327 小溝群が検出されている。

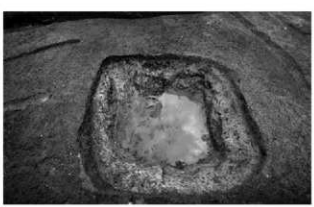
また、計画地南側と西側において、遺構確認面であるⅢ層上面までの深さを確認するため２～５区の試掘を行ったが、２～４区ではⅢ層上面まで掘削したが遺構は確認されなかった。５区では南北方向に伸びる溝跡を３条確認したが、遺物は出土しなかった。今回試掘を行った箇所は、盛土工事により遺構面が保護されるため、遺構の完掘は行ってない。そのため、５区で確認した溝跡の遺構の性格は不明である。これらの結果から、地表面から 75 ㎝～ 94 ㎝の深さでⅢ層上面となる状況を確認した。

１区全景写真（東から）

1　ＳＫ2325断面（南から）

2　ＳＸ2327完掘状況（北から）

3　ＳＫ2326断面（東から）



4　ＳＫ2326完掘状況（南から）

5　５区検出状況（東から）

6　ＳＫ2326土器出土状況（東から）

7　須恵系土器高台付皿（第５図- １）

8　土師器坏（第５図- ２）

写真図版１

Ⅻ　新田遺跡第157次調査

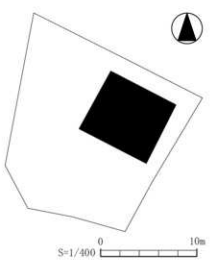
1　調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和３年３月４日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、40か所に９ｍの柱状改良杭の設置が予定されており、申請地の北側隣接地では、昭和56年度に実施した第１次調査時に、竪穴建物跡や掘立柱建物跡等の遺構を発見している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

第１図　調査区位置図

その後、地権者から令和３年３月17日に埋蔵文化財発掘の届出、９月９日に発掘調査の承諾書が提出されたことを受け、９月15日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。

表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。９月29日に遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代の溝跡や柱穴等を確認した。９月30日から10月11日にかけて順次遺構の掘り下げを行い、平面図・断面図の作成を行いながら、10月６日に測量を実施した。また、調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、Ⅲ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断された。10月18日には調査用器材を搬出し、10月19日に全ての調査区の埋め戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（１）基本層序（第４図）

Ⅰa層：現代の住宅盛土層。にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）。層厚約60cmである。

Ⅰb層：現代の耕作土層。暗褐色砂質土（10YR3/3）。層厚約70 ～ 80cmである。

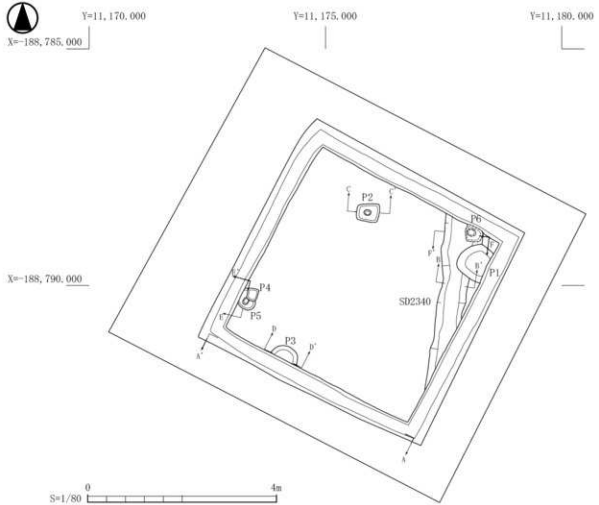
Ⅱ 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土（10YR3/1）。層厚約5cmである。上面は後世の削平を受けている。

Ⅲ 層：古代の遺構検出面。黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。層厚約20cmである。

Ⅳ 層：古代の堆積層。黒褐色粘質土（2.5Y3/1）。Ⅴ層由来の砂粒少量含む。層厚約10cmである。

Ⅴ 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）。酸化鉄多量含む。層厚約20 ～ 30cmである。

Ⅵ 層：古代以前の基盤層。黄褐色粘質土（2.5Y5/4）。層厚約10cm以上である。



第３図　調査区平面図

（２）発見遺構と遺物

ＳＤ2340溝跡（第３・５図）

【位置】調査区東側で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で東に10度偏している。

【調査状況・重複】P1・P6と重複し、前者より古く、後者より新しい。

【形状・規模】上幅は50㎝、深さ７㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【遺物】遺物は出土していない。

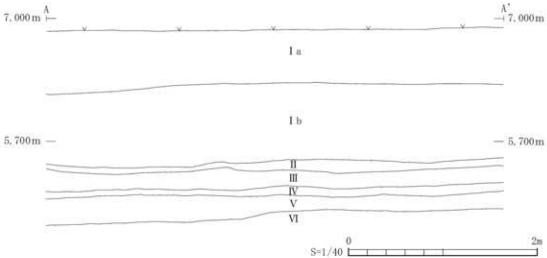
（３）その他の発見遺物

基本層Ⅲ層から、須恵器坏１点（第６図）の他、須恵器甕２点が出土しているが、いずれも小破片である。

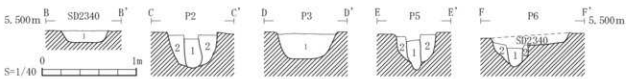
３　まとめ

（１）古代の溝跡や柱穴・ピットを発見した。出土遺物の様相から古代の遺構と考えられる。

（２）北側に隣接する第１次調査においては多数の遺構が確認されたが、本調査において遺構の確認は少数であるため、当該地は遺構が希薄な区域にあたると考えられる。

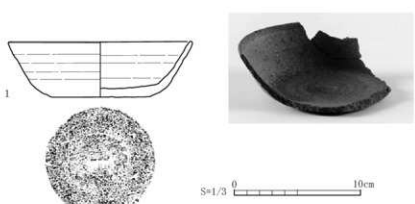


第４図　調査区南壁土層断面図



SD2340　1層　褐灰色粘質土（10YR4/1）　黄灰色ブロック少量含む
P2　1層　黒褐色粘土（10YR3/1）　柱痕跡
　　2層　黒褐色粘質土（10YR3/2）　黄褐色ブロック少量含む
P3　1層　黒褐色土（10YR3/1）　炭化物微量含む
P5　1層　黒褐色粘土（10YR3/1）　柱痕跡
　　2層　黒褐色粘質土（10YR3/2）　黄灰色ブロック少量含む
P6　1層　黒褐色粘土（10YR3/1）　柱痕跡
　　2層　黒褐色粘質土（10YR3/2）　黄灰色ブロック少量含む

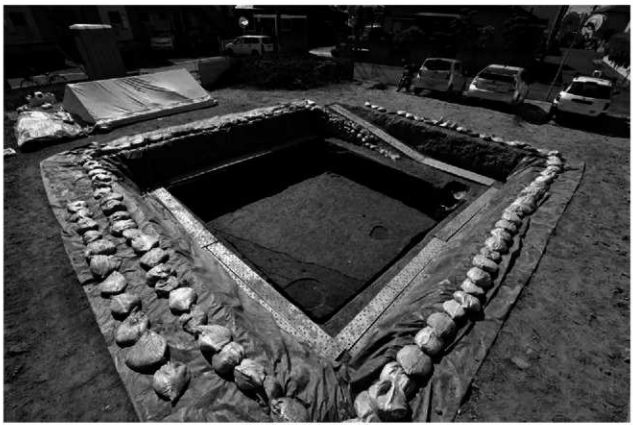
第５図　遺構断面図



（単位：cm）

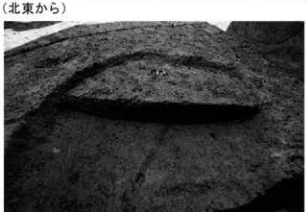
番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	須恵器坏	遺構検出面	Ⅲ	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り無調整	ロクロナデ	(14.6) 6/24	8 24/24	4.4	底部ヘラ記号「×」	R1

第６図　出土遺物



遺構検出状況（北東から）

作業状況（南東から）



Ｐ１断面（東から）

ＳＤ2340 断面（南から）

ＳＤ2340 完掘状況（南から）

写真図版１

Ｐ２断面（北から）

Ｐ３断面（南西から）

Ｐ５断面（東から）

Ｐ６断面（北から）

調査区完掘状況（北東から）

写真図版２

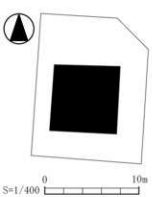
13　新田遺跡第158次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和３年６月２日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎部分において42か所に7.5mの柱状改良杭の設置が予定されているが、申請地付近では令和２年度に第140次調査を実施しており、現地表面から約1.2mで遺構を確認している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

第１図　調査区位置図

その後、地権者から承諾書が提出されたことを受け、10月20日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。10月25日に遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。検出作業の結果、遺構や遺物は発見されなかった。11月12日には調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、Ⅳ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。11月15日から16日にかけて図面作成のため任意の測量基準杭を設置し、平面図・断面図の作成を行った。11月18日に調査区完掘状況の写真撮影、11月19日に機材撤収、11月28日に調査区の埋戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（１）**基本層序**（第４図）

Ⅰa層：現代の宅地造成時盛土層。黄褐色砂層（2.5Y5/4）。層厚約75cmである。

Ⅰb層：現代の宅地造成時盛土層。黒褐色土（10YR3/2）。層厚約10 ～ 25cmである。

Ⅰc層：現代の耕作土。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約30 ～ 55cmである。

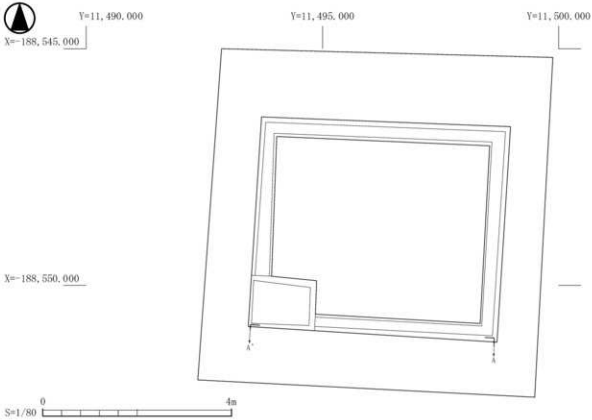
Ⅱ 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土（10YR2/2）。 層厚約10cmである。

Ⅲ 層：古代の堆積層。灰黄褐色粘質土（10YR4/2）。層厚約20 ～ 30cmである。

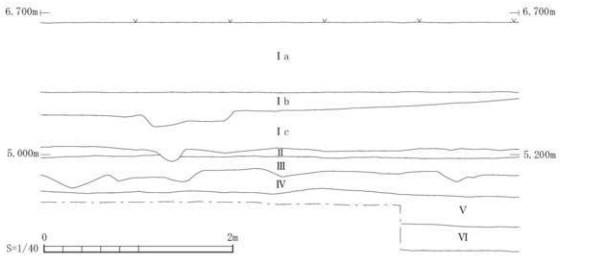
Ⅳ 層：古代の基盤層。オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）。層厚約25cmである。第140次調査時の遺構検出面。

Ⅴ 層：古代以前の基盤層と考えられる。黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。層厚は約30cmである。

Ⅵ 層：古代以前の堆積層と考えられる。暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）。層厚約25cmである。有機物腐食層が互層状に堆積する。



第３図　調査区平面図



第４図　調査区南壁土層断面図

３　まとめ

（１）今回の調査において、遺構・遺物は発見されなかった。

（２）新田遺跡第140次調査においては希薄ながら遺構が確認されているが、当該地は遺構が認められない範囲にあたると考えられる。

調査区完掘状況（北東から）

調査区南壁断面（北から）

作業状況（南東から）

写真図版

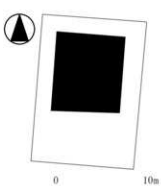
14　新田遺跡第159次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和３年７月26日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎部分において34か所に7.59mの柱状改良杭の設置が予定されているが、申請地付近では令和２年度に第140次調査を実施しており、現地表面から約1.2mで遺構を確認している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

第１図　調査区位置図

その後、地権者から承諾書が提出されたことを受け、10月21日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。11月４日に遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。検出作業の結果、古代の溝跡と考えられる遺構を発見し、随時掘下げを行った。11月12日には調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、Ⅳ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。11月15日から16日にかけて図面作成のため任意の測量基準杭を設置し、平面図・断面図の作成を行った。11月18日に調査区完掘状況の写真撮影、11月19日に機材撤収、11月26日に調査区の埋戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（１）**基本層序**（第４図）

Ⅰa層：現代の宅地造成時盛土層。黄褐色砂層（2.5Y5/4）。層厚約70cmである。

Ⅰb層：現代の宅地造成時盛土層。黒褐色土（10YR3/2）。層厚約15cmである。

Ⅰc層：現代の耕作土。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約60cmである。

Ⅱ 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土（10YR2/2）。 層厚約10cmである。

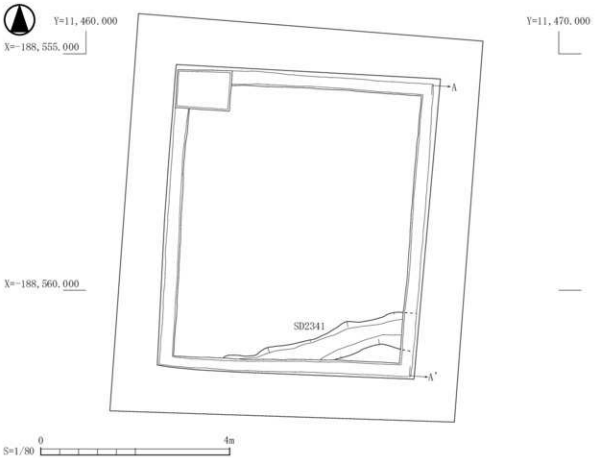
Ⅲa層：古代の堆積層。灰黄褐色粘質土（10YR4/2）。層厚約５cmである。

Ⅲb層：古代の遺構検出面。黒褐色土（10YR2/2）。層厚約10cmである。褐色砂質ブロック少量含む。

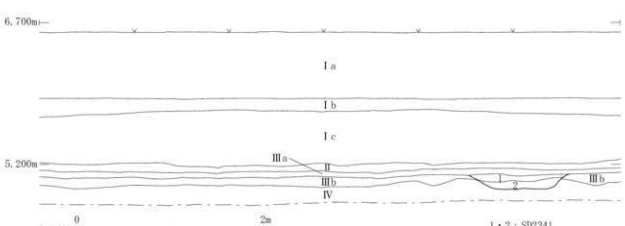
Ⅳ 層：古代の基盤層。オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）。層厚約25cmである。酸化鉄多量含む。

Ⅴ 層：古代以前の基盤層と考えられる。黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。層厚は約30cmである。

Ⅵ 層：古代以前の堆積層と考えられる。暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）。層厚約25cmである。有機物腐食層が互層状に堆積する。



第３図　調査区平面図



第４図　調査区東壁土層断面図

（２）発見遺構と遺物

ＳＤ2341溝跡（第３・４図）

【位置】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。方向は東で北に13度偏している。

【調査状況・重複】重複関係は認められない。

【形状・規模】上幅は107cm、深さ15cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】２層に区分される。１層は黒褐色粘質土(10YR3/2)で、粘性やや強く、締まりは密、混入物をあまり含まない均質な堆積層。２層は黒褐色粘質土(10YR3/2)で、粘性やや強く、締まりは密、黄褐色砂質ブロック少量含む。
【遺物】遺物は出土していない。

３　まとめ

（１）古代の溝跡を発見した。
（２）新田遺跡第140次調査成果と同様に、当該地においても希薄ながら遺構が分布している。

遺構検出状況（南西から）

SD2341 溝跡断面（西から）

調査区北壁土層断面（南から）

写真図版

15　新田遺跡第161次調査

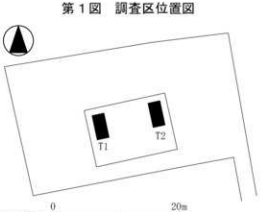
1　調査に至る経緯と経過

本件は、新田字六歳地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和３年９月28日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、54か所に８ｍの柱状改良杭の設置が予定されており、当該工事により遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存が必要となった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、12月22日に２箇所のトレンチを設定し、重機により表土掘削を行った。

トレンチ壁面の土層観察から当該地は谷地であり、遺構が残存していないと判断されるため、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、同日中に埋戻して現地作業の一切を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

Ⅰa層：現代の住宅盛土層。褐灰色砕石（10YR6/1）。層厚約30㎝である。

Ⅰb層：近代以降の耕作土層。灰黄褐色土（10YR5/2）。層厚約40㎝である。ビニールが混入する。

Ⅱ　層：湿地状堆積層。黒褐色粘質土（10YR3/1）。層厚約30㎝である。

Ⅲ　層：河川堆積層。黄褐色砂質土（2.5Y5/4）。層厚約40cm以上である。

Ｔ２　掘削状況（南から）

Ｔ２　調査区東壁断面（西から）

16　山王遺跡第225次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和２年９月29日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、基礎工事で現地表から42cmの深さで掘削した後、6.5mの深さまで35か所に杭工事を行うものである。

申請地周辺では、東側近接地で平成28年度に第177次調査を実施しており、現表土から約2.3mで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

第１図　調査区位置図

その後、４月２日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、４月13日には重機による掘削を開始した。申請地の敷地範囲が狭隘であることから、発生土の大部分は場外へ搬出した。

掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、小規模な柱穴や溝跡を確認し、表土中から近世の擂鉢や古代の須恵器片が出土したことから、古代及び近世の遺構の存在が想定された。同日夕方には概ね掘削を完了し、調査区南東部に出入口用のスロープを造成した後、環境整備作業に移った。

同月14日には作業員を動員して土嚢作り及びシートの設置、排水用側溝の切り回しを行った。

その後16日には遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。同月21日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、同月22日～５月６日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。また、調査区外周壁面の土層観察により、Ⅳ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しなかった。

同月７日には調査用器材を搬出し、同月10日に調査区の埋め戻しを行った。同月11日に標高移動を行い、現地作業の一切を終了した。

2　調査成果

（１）基本層序（第２図）

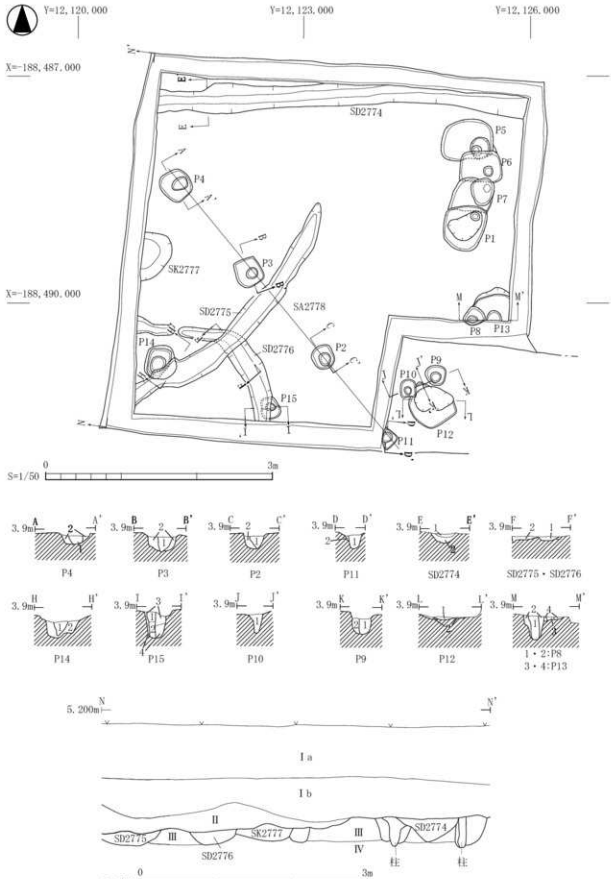
Ⅰ層：現代の盛土層。砕石を主体とするⅠa層は調査区全体で層厚約70cmであり、粘質土を主体とするⅠb層は約55cmである。

Ⅱ層：旧耕作土層。暗褐色シルト(10YR3/4)。 層厚約10cm ～ 35cmである。

Ⅲ層：古代及び近世の遺構検出面である。にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)。層厚約14cm ～ 16cmである。

Ⅳ層：黒褐色シルト(10YR2/2)。層厚約10cmである。

Ⅴ層：灰黄褐色シルト(10YR4/2)。層厚約10cmである。



第２図　調査区平面図・断面図

（2）発見遺構と遺物

ＳＤ2774溝跡（第２図）

【位置】調査区北端部で発見した東西方向の溝跡である。方向は東で北に12度偏している。

【調査状況・重複】西壁面で柱穴と重複しており、これらより新しい。

【形状・規模】幅は約45cmである。底面はＶ字形であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の褐灰色(10YR4/1)シルトである。粘性無し。締まり弱。

【遺物】土師器坏、須恵器坏が出土している。

ＳＤ2775溝跡（第２図）

【位置】調査区南西部で発見した溝跡である。方向は東で北に50度偏している。

【調査状況・重複】ＳＤ2776、Ｐ14と重複しており、それらより新しい。

【形状・規模】幅は約35cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐色(10YR3/1)シルトの単層である。粘性弱。締まり強。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ2776溝跡（第２図）

【位置】調査区南西部で発見した溝跡である。調査区南東部で直角気味に屈曲する。

【調査状況・重複】ＳＤ2775・Ｐ15と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】上幅は約35cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐灰色(10YR4/1)シルトの単層である。粘性弱。締まり中。φ２㎜程度の炭化物を少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＫ2777土坑（第２図）

【位置】調査区中央西端部で発見した土坑である。

【調査状況・重複】西壁でＳＤ2776及び小ピットと重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】平面楕円形であり、長軸約75cm、短軸約45cmである。

【埋土】単層の褐灰色シルト(10YR5/1)である。締まり弱。粘性弱。φ２㎜程度の炭化物及びφ４㎜程度の焼土を多量に含む。

【遺物】土師器甕Ａ類２点、須恵器坏ＢⅡ類２点が出土している。

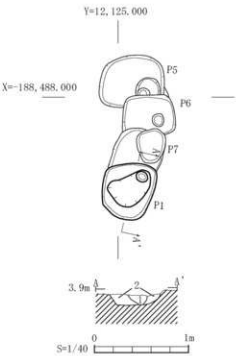
ＳＡ2778柱列跡（第２図）

【位置】調査区中央西寄りで発見した柱列跡である。掘立柱建物を構成する可能性もあるが、調査範囲内では確認できず、全容は不明である。

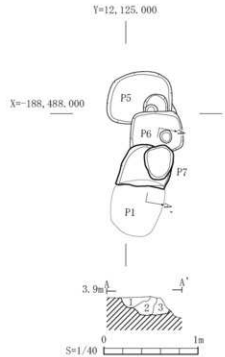
【調査状況・重複】他の遺構との重複はない。

【形状・規模】調査区内で確認できた規模は、東西３間以上である。柱はいずれも抜き取られている。掘方直径はＰ４で測ると30～45cmである。

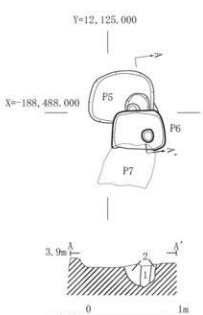
【埋土】１層は柱抜き取り穴である。均質な黒褐色粘土(10YR3/2)である。締まり弱。粘性強。２層は掘方埋土である。黒褐色粘土(10YR3/2)を主体とし、φ３㎜程度の淡黄色シルト(2.5Y8/3)を斑状に含む。



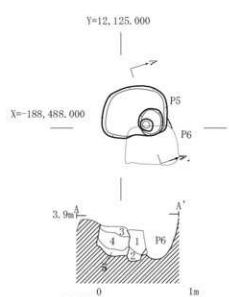
第３図　Ｐ１ 平面・断面図



第４図　Ｐ７ 平面・断面図



第５図　Ｐ６ 平面・断面図



第６図　Ｐ５ 平面・断面図

【遺物】抜き取り穴から土師器甕A類及び近世以降の陶器が出土している。

Ｐ１（第３図）
【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は切り取られており、底面付近にのみ柱痕跡が残存している。
【調査状況・重複】Ｐ７と重複しており、これより新しい。
【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約65cm、柱痕跡の直径は約13cmである。
【埋土】１層は柱痕跡である。黒褐色粘土(10YR3/2)。締まり弱。粘性弱。２層は掘方埋土である。暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)を主体とし、φ６mm程度の斑状淡黄色シルト(2.5Y8/3)を多量に含む。
【遺物】１層から陶器塊（小野相馬 写真図版１－４）、２層から染付磁器碗（肥前系 写真図版１－７）が出土している。

Ｐ７（第４図）
【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は抜き取られた後人為的に埋め戻されている。
【調査状況・重複】Ｐ１・Ｐ６と重複しており、前者より古く後者より新しい。
【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は残存部分で約48cm、抜取り穴の直径は約40cmである。
【埋土】1・2層は抜き取り穴である。１層は微量の酸化鉄を含む黄灰色シルト(2.5Y4/1)である。締まり強。粘性強。２層は灰色シルト(5Y5/1)を主体とし、φ２mm程度の淡黄色シルト(5Y8/3)を少量含む。締まり強。粘性弱。３層は掘方埋土である。灰色シルト(5Y5/1)を主体とし、φ５mm程度の浅黄色シルト(5Y8/3)を多量に含む。
【遺物】１層から瓦質土器、加工石が出土している。

Ｐ６（第５図）
【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は抜き取られている。
【調査状況・重複】Ｐ７・Ｐ５と重複しており、前者より古く後者より新しい。
【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約55cm、抜き取り穴の直径は約14cmである。
【埋土】１層は柱抜き取り穴である。黄灰色シルト(2.5Y4/1)を主体とし、φ５mm程度の浅黄橙色シルトブロック(10YR8/4)を多量に含む。橙色焼土(7.5YR6/6)を少量含む。締まり弱。粘性弱。２層は掘方埋土である。黄灰色シルト（2.5Y4/1）を主体とし、浅黄橙色シルト(10YR8/4)、焼土(7.5YR6/6)、炭化物、灰白色火山灰を少量含む。締まり強。粘性中程度。
【遺物】須恵器蓋が出土している。

Ｐ５（第６図）
【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は切り取られている。
【調査状況・重複】Ｐ６と重複しており、これより古い。
【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約56cmである。柱痕跡の直径は約16cmである。
【埋土】１層は切り取り穴、２層は柱痕跡である。３～５層は掘方埋土である。１層は黄灰色シルト(2.5Y4/1)である。焼土(7.5YR6/6)を少量含む。２層は黒褐色粘土(10YR3/1)である。浅黄色シルト

(10YR8/3)を少量含む。３層は浅黄橙色シルト(10YR8/3)を主体とし、黄灰色シルト(2.5Y4/1)を少量含む層、４層は黄灰色シルト(2.5Y4/1)を主体として浅黄橙色シルト(10YR8/3)を少量含む層、５層は３層と相似する層である。

【遺物】遺物は出土していない。

３　まとめ

（１）古代及び近世の柱穴、溝跡を発見した。

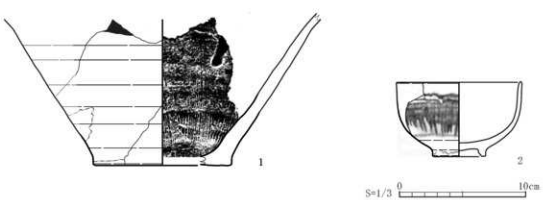
（２）当地区付近には伊達家家臣の成田氏の屋敷が所在したとされる（多賀城市教育委員会2021a）。今回の調査区及び周辺で発見された近世の掘立柱建物は、成田氏の屋敷と関わる可能性がある。

参考文献

多賀城市教育委員会2018「山王遺跡第177次調査」『新田・山王遺跡ほか―震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ―』多賀城市文化財調査報告書第137集,pp.231-290

多賀城市教育委員会2021a『多賀城市の歴史遺産　南宮村　山王村』多賀城市文化財調査報告書第147集

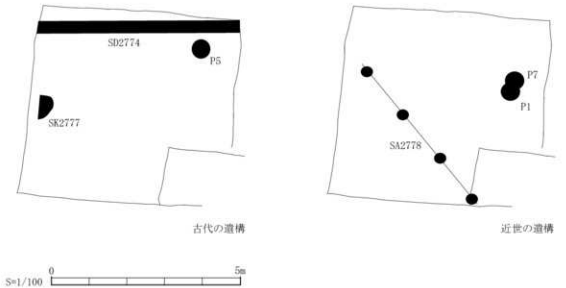
多賀城市教育委員会2021b「Ⅸ　山王遺跡第221次調査」『多賀城市内の遺跡２―令和２年度発掘調査報告書―』,pp.25-32



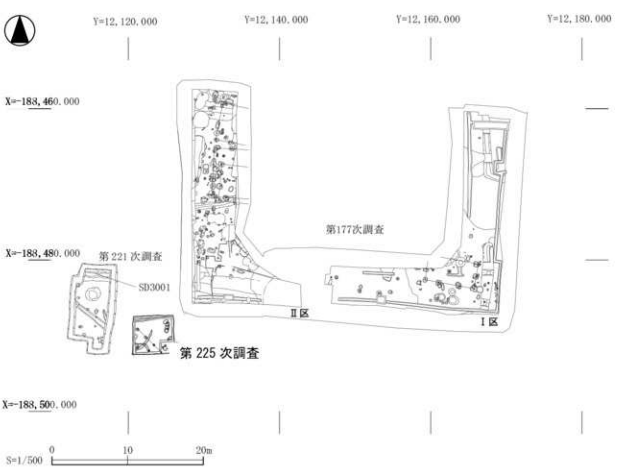
（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口　径 残存率	底　径 残存率	器高		
1	無釉陶器 擂鉢	－	L1	体部下半まで鉄サビ後、上半に鉄釉。	体部下半まで鉄サビ後、上半に鉄釉。おろし目　14本　工具	－	(11.0) 17/24	8.0	岸	R1
2	施釉陶器 丸埦	－	L1	下地に灰オリーブ釉鉄釉流し掛け	灰オリーブ釉	(10.0) 13/24	(4.3) 22/24	5.9	大堀相馬	R2

第７図　第225次調査出土遺物



第８図　遺構変遷模式図



第９図　第225次調査と近隣の調査区合成図

1：施釉陶器擂鉢（岸 L1 第７図－１ R-1）
2：施釉陶器小埦（大堀相馬 L1 第７図－２ R-2）
3：施釉陶器埦皿類（志野 L1 R-4）

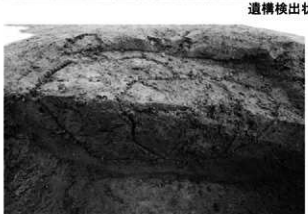
S=1/3 0 10cm

4：施釉陶器埦（小野相馬 P1 抜取穴 R-7）
5：施釉陶器埦皿類（志野 R-5）
6：磁器碗（肥前系 L1 R-3）
7：磁器碗（肥前系 P1 掘方埋土 R-8）

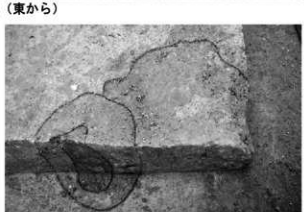
S=1/2 0 10cm

写真図版１

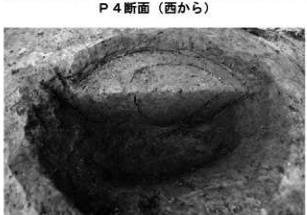
遺構検出状況（東から）



Ｐ４断面（西から）



Ｐ８・Ｐ13 重複状況（南から）



Ｐ３断面（西から）

Ｐ２検出状況（西から）

写真図版２

SD2775・SD2776 重複状況（北東から）

SD2776・P15 重複状況（北から）

P9 断面（北から）

P14 断面（東から）

P1 断面（西から）

P7 断面（西から）

P6 断面（西から）

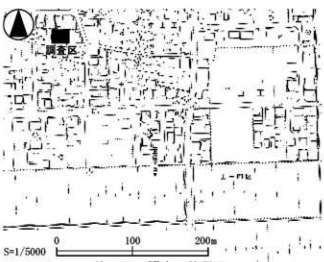
P5 断面（西から）

写真図版2

17　山王遺跡第227次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西山王における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和３年３月17日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、対象面積1222.08㎡の事業地内において、約120㎡の住宅を建築するものである。基礎部分の工事では、現地表から９ｍの深さまで46か所にパイルを打設するものである。



第１図　調査区位置図

申請地周辺では、東側近接地で平成17年度に第88次調査を実施しており、現表土から約１ｍで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、５月24日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、５月28日には重機による掘削を開始した。なお本事業については、東日本大震災の復興に伴う住宅建設工事であることから、第一面の確認調査に留め、遺跡を性格付ける重要な遺構のみ完掘の対象とした。

掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、Ｔ字に接続する区画溝や井戸跡を確認した。同日夕方には概ね掘削を完了し、調査区南西部に出入口用のスロープを造成した後、環境整備作業に移った。６月１日には作業員を動員して土嚢作り及びシートの設置、排水用側溝の切り回しを行った。

その後同月２日には遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。同月６月８日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、同月９日～25日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。

同月30日には調査用器材を搬出し、７月１日に調査区の埋め戻しを行い、現地作業の一切を終了した。

2　調査成果

（1）基本層序（第３図）

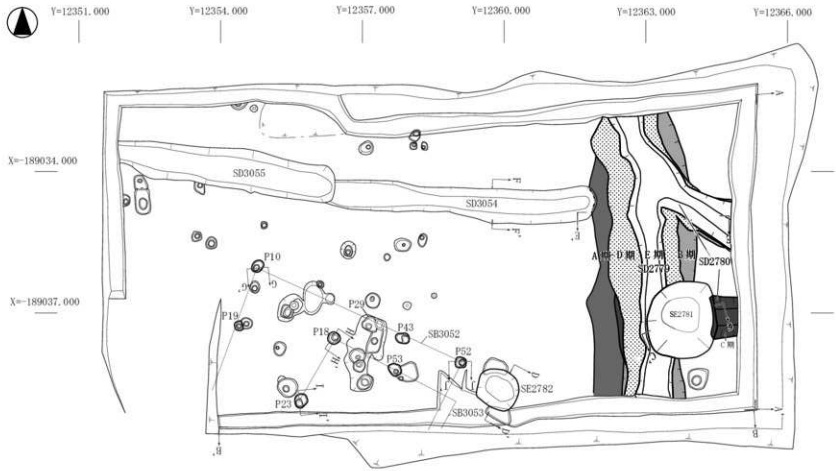
Ⅰ層：現代の耕作土。暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)。近代の陶磁器片を含む。層厚約60～70cmである。

Ⅱ層：古代の最終堆積層。黒色粘土(2.5Y2/1)。ＳＤ2779・2780廃絶後の窪みに薄く堆積する。層厚約６～10cmである。

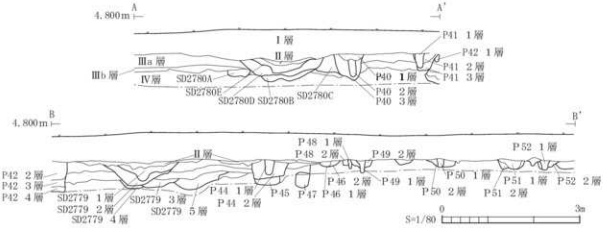
Ⅲa層：黄灰色シルト(2.5Y4/1)。粘性中程度。微量の酸化鉄を含む。層厚約18～20cmである。

Ⅲb層：黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1)。粘性弱。φ１～２㎜程度の白色粒を少量含む。

Ⅳ層：淡黄色細砂(2.5Y8/3)。層厚は50cm以上である。

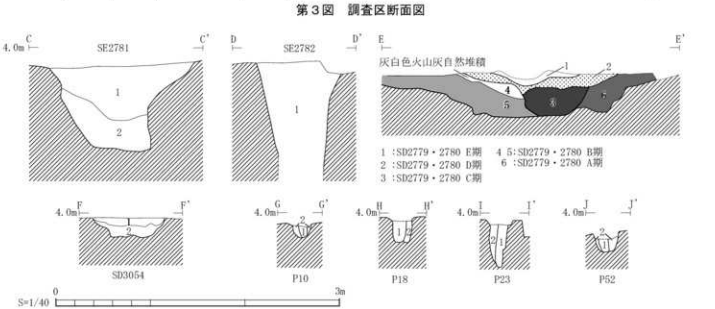

Y=12351.000
Y=12354.000
Y=12357.000
Y=12360.000
Y=12363.000
Y=12366.000
X=-189034.000
X=-189037.000
SD3055
SD3054
P10
P20
P19
P18
P43
SB3052
P53
P52
SE2782
P23
SB3053
A期～D期
E期
B期
SD2779
SD2780
SE2781
C期
S=1/80
0
3m

第２図　調査区平面図



遺　構	層　位	土　色	土　性	備　考
P40	1層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	柱切り取り穴、締まり弱、粘性弱。
	2層	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	柱底部、締まり強、粘性強。
	3層	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2mm程度の灰白色火山灰を少量含む。
P41	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	柱抜き取り穴、締まり中程度、粘性弱、φ4～5mm程度の炭化物及び地土粒を含む。
	2層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2～3mm程度の白色粒を少量含む。
	3層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ4～5mm程度の地山ブロック (5YR/3) を少量含む。
P42	1層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2mm程度の黒色粘土ブロック (10YR2/1) を少量含む。
	2層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ3～4mm程度の黒色粘土ブロック及び地山ブロック (5YR/3) を多量に含む。
	3層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2mm程度の黒色粘土ブロック (10YR2/1) を少量含む。
	4層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ3～4mm程度の黒色粘土ブロック (10YR2/1) 及び地山ブロック (5YR/3) を多量に含む。
P44	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	柱抜き取り穴、締まり強、粘性弱、φ2～3mm程度の炭化物・地土を少量含む。
	2層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、準大の灰白色火山灰ブロックを多量に含む。
P45		黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	脚方埋土。
P46	1層	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	シルト	柱抜き取り穴、締まり強、粘性弱。
	2層	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	脚方埋土、φ2mm程度の地土粒を少量含む。
P47		黒色 (10YR2/1)	粘土	脚方埋土。
P48	1層	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	柱底部、粘性強、締まり強。
	2層	黄灰色 (2.5Y6/1)	シルト	脚方埋土、φ1～2mm程度の炭化物を少量含む。
P49	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	柱抜き取り穴、締まり弱、粘性強、φ3～4mm程度の地山ブロック (5YR/3) を微量含む。
	2層	灰黄色 (2.5Y6/3)	シルト	脚方埋土、締まり弱、粘性弱、φ1～2mm程度の黒褐色粘土 (2.5Y3/1) を多量に含む。
P50	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	柱抜き取り穴、締まり弱、粘性弱、φ1～2mm程度の地山ブロック (5YR/3)
	2層	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2～3mm程度の地山ブロック (5YR/3) 少量含む。
P51	1層	黄灰色 (2.5Y6/1)	シルト	柱抜き取り穴、φ2～3mm程度の地山ブロック を少量。
	2層	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	シルト	脚方埋土、φ3～4mm程度の地山ブロック (5YR/3) を多量に含む。
P52	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	柱抜き取り穴、φ2～3mm程度の炭化物を少量含む。
	2層	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト	脚方埋土、締まり強、粘性弱、φ2～3mm程度の地山ブロック (5YR/3) 少量含む。

第３図　調査区断面図



第４図　遺構断面図

（２）発見遺構と遺物

SD2779・2780溝跡（第２・３・４・６図）

南北溝ＳＤ2779と東西溝ＳＤ2780は、調査区東壁付近で接続し、ともに５時期の変遷を確認したことから、ここでは一連の区画溝として記述する。

【位置】調査区東半部で発見した。

【変遷】それぞれ古い順にＡ～Ｅ５時期の変遷を確認した。東西方向のSD2780はＣ期で一端南側に付け替えが行われるものの、Ｄ・Ｅ期にはＢ期とほぼ同一地点に作り直される（第６図）。

【重複】ＳＥ2781と重複しており、これより古い。

Ａ期

【規模】上幅は東壁で測ると50.4cmである。

【方向】SD2779はほぼ真北であり、SD2780は東で南に約８度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）である。締まり強。粘性中。底面付近にφ３～４㎜程度の淡黄色細砂ブロックを少量含む。粘性弱。締まり強。

【遺物】須恵器坏（ＢＶ類 第５図－１）が出土している。

Ｂ期

【規模】上幅は東壁で測ると1.14mである。

【方向】ＳＤ2779はほぼ真北であり、ＳＤ2780は東で南に約16度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】上層は灰白色火山灰の自然堆積層であり、下層は黒褐色粘土（2.5Y3/1）である。締まり弱。

【遺物】須恵器壺、土師器坏B類、獣骨が出土している。

Ｃ期

【規模】上幅は東壁で測ると49.4cmである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780はほぼ真西に伸びる。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】黄灰色シルト（2.5Y4/1）。φ３～４㎜程度の地山ブロックを多量に含む。人為堆積か。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類 墨書「大？」 第５図－３）が出土している。

Ｄ期

【規模】上幅は東壁で測ると約1.79mである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780は東で南に約18度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はおよそ平坦である。

【埋土】黄灰色シルト（2.5Y4/1）φ３～４㎜程度の灰白色火山灰ブロックを少量含む。締まり中。粘性弱。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類 第５図－２）、須恵器坏、不明土製品（写真図版２－10）が出土している。

Ｅ期

【規模】上幅は東壁で測ると最大約1.21mである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780は東で南に約18度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はおよそ平坦である。

【埋土】黒褐色シルト（2.5Y3/1）。締まり中。粘性弱。φ１～２㎜程度の白色粒を少量含む。

【遺物】須恵系土器高台付皿（第５図－４）が出土している。

ＳＤ3054溝跡（第２・４図）

【位置】調査区中央北寄りで発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ2780の延長に位置しており、Ｂ～Ｅ期のいずれかの時期に機能した区画溝とみられる。

【方向】東で約３度南に偏している。

【重複】ＳＤ3055、ＳＤ2779Ａと重複しており、前者より古く後者より新しい。

ＳＤ3055溝跡（第２図）

【位置】調査区北西隅で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ2780の延長に位置しており、Ｂ～Ｅ期のいずれかの時期に機能した区画溝とみられる。

【方向】東で約10度南に偏している。

【重複】ＳＤ3054、小ピットと重複しており、これより新しい。

ＳＢ3052掘立柱建物跡（第２・４図）

【位置】調査区中央部やや南西寄りで発見した掘立柱建物である。

【桁行・梁行】桁行３間以上、梁行２間以上である。

【柱痕跡・柱抜取穴の有無】Ｐ52、Ｐ10、Ｐ19で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＢ3053と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

【掘方】平面形は円形を基調としており、直径はＰ10で測ると約20cmである。

【柱痕跡】平面形は円形であり、直径はＰ10で測ると約9.1cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＢ3053掘立柱建物跡（第２・４図）

【位置】調査区中央部やや南西寄りで発見した掘立柱建物である。

【桁行・梁行】桁行２間以上、梁行２間以上である。

【柱痕跡・柱抜取穴の有無】Ｐ53、Ｐ18、Ｐ23で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＢ3052と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

【掘方】平面形は円形を基調としており、直径はＰ23で測ると約30cmである。

【柱痕跡】平面形は円形であり、直径はＰ23で測ると約10cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＥ2781井戸跡（第２・４図）

【位置】調査区東半部で発見した素掘りの井戸跡である。

【重複】ＳＤ2779・2780と重複しており、これより新しい。

【規模】直径は約1.24m、深さは74cmである。

【埋土】埋土は２層に分層される。１層は黒色粘土(10YR2/1)、２層は黒褐色粘土（10YR3/1）である。いずれも植物遺体(葉・樹木枝等)を多量に含む。

【遺物】ＳＤ2779Ｅ由来とみられる須恵系土器高台付皿（第５図－６）が出土している。

ＳＥ2782井戸跡（第２・４図）

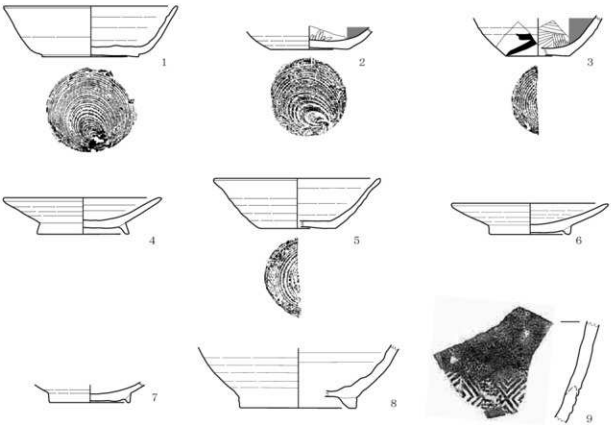
【位置】調査区中央部やや南東寄りで発見した素掘りの井戸跡である。

【重複】柱穴と重複しており、これより新しい。

【規模】直径は約88cm、深さは120cm以上である。

【埋土】黒色粘土（10YR2/1）。粘性強。締まり強。炭化物、黄褐色土ブロック、木片を少量含む。

【遺物】棒状木製品、加工石材（写真図版２－９）、鉄滓が出土している。

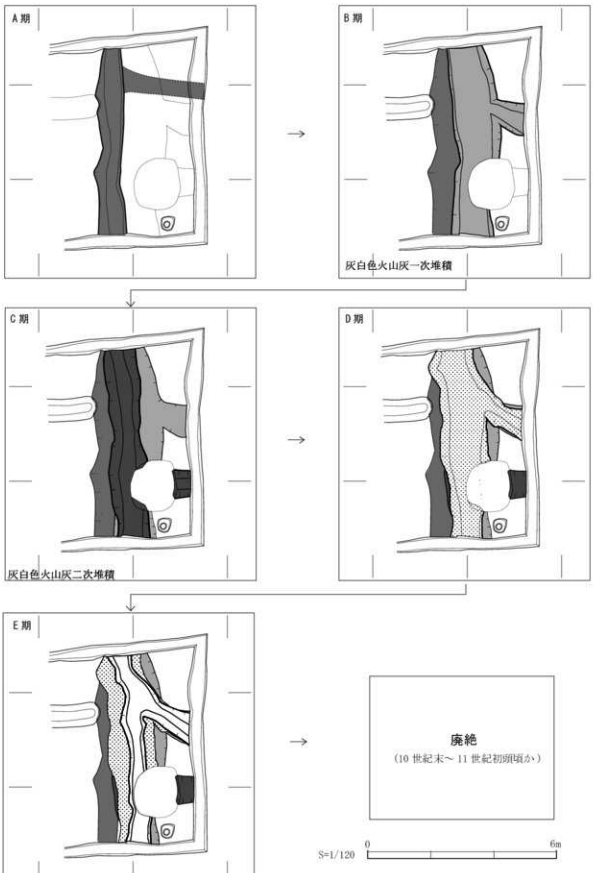


S=1/3　0　10cm

（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量 口径 残存率	法量 底径 残存率	法量 器高	備考	登録番号
1	須恵器坏	SD2780E	－	ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整	ロクロナデ	(13.7) 4/24	7.6 24/24	4.0	写真図版2-2	R8
2	土師器坏	SD2779D	－	ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整	ヘラミガキ後 黒色処理	－	6.1 24/24	－	写真図版2-3	R7
3	土師器坏	SD2779C	－	ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整 墨書「大？」	ヘラミガキ後 黒色処理	－	(4.9) 10/24	－	写真図版2-6	R5
4	須恵器土器 高台付皿	SD2779A	－	ロクロナデ 底部：切り離し不明 高台貼付	内面平滑	(12.3) 1/24	7.0 24/24	2.9	写真図版2-1	R6
5	須恵器坏	SD3054	I層	ロクロナデ 底部：回転糸切無調整	－	(13.1) 12/24	－	3.9	写真図版2-4	R3
6	須恵器土器 高台付皿	SE2781	I層	ロクロナデ	内面平滑	(12.2) 1/24	6.3 24/24	2.4	写真図版2-5	R1
7	須恵系土器 高台付皿	－	I	ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整	ロクロナデ	－	6.3 24/24	－		R5
8	須恵器 長頸瓶	－	I	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	(9.1) 5/24	－	写真図版2-7 大戸	R9
9	無釉陶器 壺	－	I	自然釉 重角押印文	粘土帯接合痕	－	－	－	写真図版2-8 提美	R10

第５図　出土遺物



第６図　ＳＤ2779・2780 変遷図

3まとめ

（1）古代

南北方向の大溝ＳＤ2779及びそれに接続する東西方向の溝跡ＳＤ2780、ＳＤ2779以西に延びる溝跡ＳＤ3054・3055を発見したほか、古代のものとみられる大型の掘方を持つ柱穴を南壁の断面観察により複数確認している。

本調査区は多賀城南面に広がる方格地割のうち、最も西側で確認した南北道路である西９道路推定線から約130ｍ西側に位置している。ＳＤ2779・2780溝跡は、規模や変遷が道路側溝と類似していることから、未知の道路である可能性も想定されたが、ＳＤ2779の西側に同様の南北溝が確認できないこと、東側には古代の掘立柱建物の一部とみられる柱穴を複数確認していることから、道路側溝ではなく単独の区画溝と判断した。

変遷は、それぞれＡ～Ｅ５時期を確認した（第６図）。最も古いＡ期区画溝から、回転糸切り無調整の須恵器（第５図－１）が出土しているほか、２番目に古いＢ期で灰白色火山灰の自然堆積層を確認している。また、Ｂ期以降いずれかの時期に、東西方向の区画溝ＳＤ3054・3055が設けられた。

ＳＤ2780はＣ期で一端南側に付け替えが行われるものの、Ｄ・Ｅ期にはＢ期とほぼ同一地点に作り直される。最も新しいＥ期区画溝からは、須恵系土器高台付皿が出土している（第５図－４）。これらは市川橋遺跡ＳＫ565（多賀城市教育委員会1994）出土例等と類似しており、10世紀後半以降のものとみられる。

以上のことから、ＳＤ2779・2780区画溝は、概ね９世紀中頃から後半頃に構築され、数度の改修を経ながら、10世紀後半頃までは機能していたと考えられる。

（2）中世

調査区西半部を中心に、不整形の掘立柱建物ＳＢ3052・3053及び小柱穴群を確認したほか、素掘りの井戸跡ＳＥ2781・2782を確認した。いずれも古代の遺構より新しく、遺物をほとんど含まない。規模・構造及び遺物包含量などから、概ね中世のものと考えた。

ＳＥ2781は、調査区東半部で発見した素掘りの井戸跡である。第２層は有機物を多く含む自然堆積層であり、堆積中位から採取した有機物片（葉）についてＡＭＳ年代測定を行ったところ、12世紀後半から13世紀前半を中心とする年代が得られた（詳細は附章に記載）。

また、表土（Ｌ1）中から渥美窯製品とみられる陶器片が出土している（第５図－９）。胎土はやや黒みのある砂質土で、外面には自然釉が認められる。粘土帯接合部外面では、重角押印文が帯状に連続施文されている。同様の意匠を持つものとして、『愛知県史』編年２ｂ期（12世紀末～13世紀初頭頃）に位置づけられる坪沢10号窯跡出土例（第７図）が挙げられる（田原町教育委員会1971, 愛知県史編さん委員会2012）。

第７図　参考資料 重角押印文
（田原町教育委員会 1971）

以上、断片的な資料に基づく推定ではあるものの、当地区に所在する中世の遺構については、平安時代末～鎌倉時代を中心とするものと考えられる。

参考文献

愛知県史編さん委員会2012『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系

多賀城市教育委員会1994『市川橋遺跡ほか－平成５年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第35集

田原町教育委員会1971『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡－田原町坪沢古窯址の発掘を中心として－』

ＳＤ3054断面

ＳＤ3054 須恵器坏（第５図－５）出土状況

ＳＤ2779・2780Ｄ完掘状況

ＳＤ2779・2780接続部分断面

ＳＥ2781断面

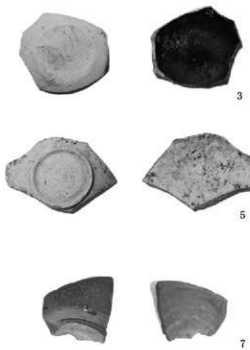
ＳＥ2782断面

遺構検出状況（東から）

写真図版１

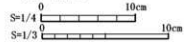
1～2：縮尺任意

1：須恵系土器高台付皿（SD2779E　第５図－４　R6）
2：須恵器坏（SD2780A　第５図－１　R8）



3：土師器坏（SD2779B　第５図－２　R7）
4：須恵器坏（SD3054 I 層　第５図－５　R3）
5：須恵系土器高台付皿（SE2781 I 層　第５図－６　R1）
6：土師器坏（SD2779C　第５図－３　R5）
7：須恵器長頸瓶（大戸 LI　第５図－８　R11）
8：無釉陶器壺（屋敷 LI　第５図－９　R10）
9：加工石材（P-29抜取り穴　R9）
10：不明土製品（SD2779D R12）

3～7・9：S=1/4
8　：S=1/3
10　：縮尺任意



写真図版２

附章　山王遺跡（第 227 次調査）における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

宮城県多賀城市に所在する山王遺跡（SN227）の測定対象試料は、SE2781 から出土した葉 1 点である（表 1）。

2　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

(1) δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1σ=68.3%）あるいは 2 標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCal4.4 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦

年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料No.1の ^{14}C 年代は 840±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は 1176～1228cal AD の範囲で示される。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-210303	No.1	遺構: SI2781　層位: f2	植物片（葉）	AaA	**-28.13 ± 0.22**	**840 ± 20**	**90.02 ± 0.24**

[IAA 登録番号：#A732-1]

表2　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC （%）			
IAAA-210303	900 ± 20	89.44 ± 0.23	844 ± 21	1176calAD - 1228calAD (68.3%)	1165calAD - 1261calAD (95.4%)

［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

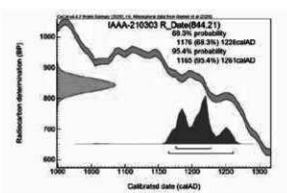


図1　暦年較正年代グラフ（参考）

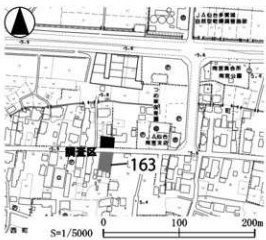
18　山王遺跡第 228 次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

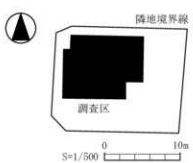
令和３年１月５日に地権者から当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅の基礎工事の際、直径約 21 ㎝、長さ 6.5 ｍの杭を 35 本打ち込むというものである。

申請地周辺では南側で平成 28 年度に第 163 次調査を実施しており、現地表から 60 ㎝のところで遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。その後、令和３年６月に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、本発掘調査を行うこととなった。



第１図　調査区位置図

令和３年６月８日から調査に着手した。重機で表土等を除去し、Ⅳ層上面まで掘削した。Ⅳ層上面で遺構の検出作業を行い、溝跡と土坑、柱穴を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は７月 16 日までに終了した。19 日に埋戻しを行い、すべての調査を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序

Ⅰａ層：現代の盛土。山砂を含む。調査区東側で層が厚くなる。厚さは約 25 ～ 50 ㎝である。

Ⅰｂ層：現代の盛土。厚さは 35 ㎝である。

Ⅱ　層：にぶい赤褐色シルト（2.5YR5/3）。炭化物を含む。Ⅲ層の高さに揃えるような整地層である。層厚は約 20 ㎝である。

Ⅲ　層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。炭化物を含む。層厚は約 20 ～ 25 ㎝である。

Ⅳ　層：古代～近世の遺構検出面。にぶい黄褐色シルト（10Y4/3）。炭化物を含む。調査区北側と東側では確認出来ない。層厚は約 10 ～ 25 ㎝である。

Ⅴ　層：黄褐色粗砂（2.5Y5/3）。層厚は約 30 ㎝である。

（2）発見遺構と遺物

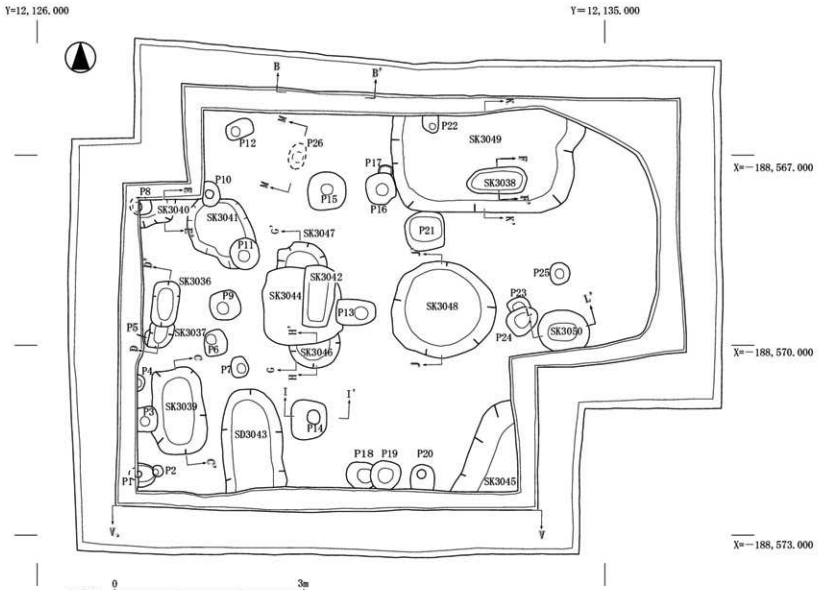
ＳＸ 3051 整地層（第４図）

【位置】調査区北側でⅣ層と同レベルで確認した整地層である。

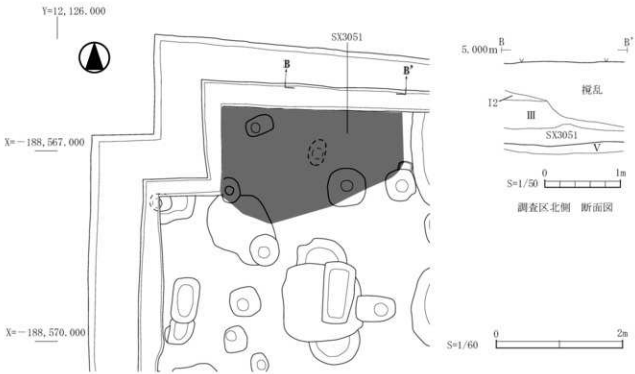
【重複】Ｐ 26 より新しい。

【規模】長軸が約 2.9 ｍ、短軸が約 1.6 ｍ、深さが約 30 ㎝である。

【埋土】埋土はにぶい褐色の砂質シルトである。


Y=12,126.000
Y=12,135.000
X=−188,567.000
X=−188,570.000
X=−188,573.000
B
B'
P12
P26
P22
SK3049
P17
SK3038
P10
P15
P16
P8
SK3040
SK3041
P11
SK3047
P21
SK3036
SK3042
SK3044
P13
SK3048
P25
P23
P9
P5
SK3037
P6
SK3046
P24
SK3050
P4
P7
SK3039
P3
SD3043
P14
P18
P19
P20
SK3045
P1
P2
S=1/60
0
3m

第３図　調査区平面図



第４図　SX3051整地層範囲

【遺物】土師器甕や平瓦、その他土師器片が少量出土している。

ＳＤ 3043 溝跡（第３図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】無し。

【規模】南北方向の溝跡で西に４度偏している。確認した長さが約 1.6 ｍ、幅が約１ｍ、深さが 40 ㎝。遺構の南側が調査区の外に伸びているため、全体の規模は不明である。

【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】１層から須恵器の小片が出土している。

ＳＫ 3036 土坑（第３図）

【位置】調査区西側で発見した。

【重複】ＳＫ 3037 より新しい。

【規模】南北方向に長い土坑である。確認した長さが約 70 ㎝、幅が約 45 ㎝、深さが 12 ㎝である。

【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】２層から鉄製の刀子が１点出土している（第７図）。

ＳＫ 3037 土坑（第３図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】ＳＫ 3036 よりも古く、Ｐ６よりは新しい。

【規模】南北方向に長い、楕円形の土坑である。確認した長さが約 40 ㎝、幅が 35 ㎝、深さが 12 ㎝である。遺構の北側がＳＫ 3036 によって壊されている。

ＳＫ 3037 土坑（第３図）
【位置】調査区南側で発見した。
【重複】ＳＫ 3036 よりも古く、Ｐ６よりは新しい。
【規模】南北方向に長い、楕円形の土坑である。確認した長さが約 40 ㎝、幅が 35 ㎝、深さが 12 ㎝である。遺構の北側がＳＫ 3036 によって壊されている。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3038 土坑（第３図）
【位置】調査区北東側で発見した。
【重複】ＳＫ 3049 より新しい。
【規模】東西方向の土坑である。確認した長さが約 1 m、幅が約 40 ㎝、深さが 10 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】陶器小片が少量出土している。

ＳＫ 3039（第３図）
【位置】調査区南側で発見した。
【重複】Ｐ３より古い。
【規模】南北方向の土坑である。確認した長さが約 1.3 m、幅が約 80 ㎝、深さが 10 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】磁器、陶器の小片が少量出土している。

ＳＫ 3040 土坑（第３図）
【位置】調査区西側で発見した。
【重複】Ｐ８より古い。
【規模】確認した長さが約 60 ㎝、幅が約 40 ㎝、深さが 18 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3041 土坑（第３図）
【位置】調査区北側で発見した。
【重複】Ｐ 10、11 より古い。
【規模】確認した長さが約 1.2 m、幅が約 1 m、深さが 18 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ 3042 土坑（第３図）
【位置】調査区中央で発見した。
【重複】ＳＫ 3044 より新しい。
【規模】南北方向に長い土坑である。確認した長さが約 90 ㎝、幅が約 50 ㎝、深さが 12 ㎝である。
【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3044 土坑（第３図）
【位置】調査区中央で発見した。
【重複】ＳＫ 3042 より古く、ＳＫ 3046、3047 より新しい。
【規模】1.2 × 1.2 ｍの大きさである。深さは約 40 ㎝で、それより下層については湧き水のため、確認することは出来なかった。
【埋土】３層確認し、１層が人為堆積で、２、３層が自然堆積である。
【遺物】１層から土師器、須恵器の小片が少量出土している。

ＳＫ 3045 土坑（第３図）
【位置】調査区南側で発見した、土坑である。
【重複】無し。
【規模】長軸が約 1.5 ｍ、短軸が約 1.2 ｍ、深さが約 40 ㎝である。
【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。
【遺物】１層から須恵器、碰器、陶器の小片が少量出土している。

ＳＫ 3046 土坑（第３図）
【位置】調査区中央で発見した。
【重複】ＳＫ 3044 より古い。
【規模】楕円形で確認した長さが約 80 ㎝、幅が約 40 ㎝、深さが約 22 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3047 土坑（第３図）
【位置】調査区南側で発見した。
【重複】ＳＫ 3042、3044 より古い。
【規模】確認した長さが約 75 ㎝、幅が約 40 ㎝、深さが約 28 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3047 土坑（第３図）
【位置】調査区南側で発見した。
【重複】ＳＫ 3042、3044 より古い。
【規模】確認した長さが約 75 ㎝、幅が約 40 ㎝、深さが約 28 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

ＳＫ 3048 土坑（第３図）
【位置】調査区中央で発見した。
【重複】無し。
【規模】楕円形である。確認した長さが約 1.65 ｍ、幅が約 1.5 ｍ、深さが約 36 ㎝である。
【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。
【遺物】１層から土師器小片が１点出土している。

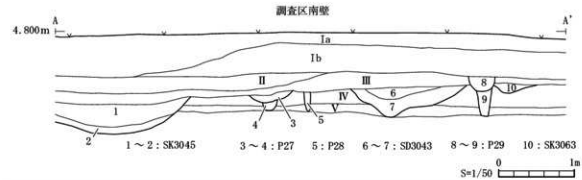
ＳＫ 3049 土坑（第３図）
【位置】調査区北側で発見した。
【重複】ＳＫ 3038、Ｐ 22 より古い。
【規模】確認した長さが約３ｍ、幅が約 1.5 ｍ、深さが約 22 ㎝である。
【埋土】２層確認し、全て人為堆積である。
【遺物】１層から陶器擂鉢の小片や陶器碗の小片、２層から須恵器甕や平瓦が出土している。

ＳＫ 3050 土坑（第３図）
【位置】調査区東側で発見した。
【重複】無し。
【規模】確認した長さが約 80 ㎝、幅が約 60 ㎝、深さが約 15 ㎝である。
【埋土】１層確認し、人為堆積である。
【遺物】出土していない。

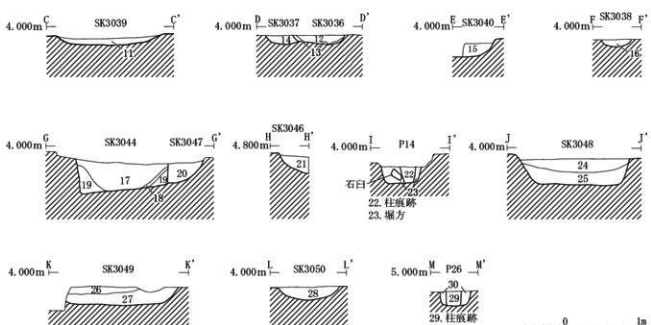
３　まとめ

今回の調査では、古代の遺構と近世の遺構を確認した。古代の遺構としてはＳＸ 3051 とその下層から見つかったＰ 26 が挙げられる。ＳＸ 3051 から出土した遺物には土師器甕や平瓦が出土しており（第６図 - 1、3）、近世の遺物は出土していない。土師器甕は摩耗がはげしいが非ロクロ整形で、外内面共にハケメ調整が見られることから、およそ９世紀前葉頃のものと考えられる。

また、ＳＫ 3036 土坑、ＳＫ 3039 土坑、ＳＫ 3038 土坑、ＳＫ 3045 土坑、ＳＫ 3049 土坑、Ｐ 14、Ｐ 15 からは近世の遺物が出土しているため、近世の遺構と考えられる。その中でも、Ｐ 14 からは寛永通宝（第７図 - 11）が出土していることから、遺構の年代は江戸時代前半以降であると考えられる。他の溝跡や土坑からは年代決定できるものが出土していないため、詳細は不明である。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SK3045	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭化物を含む。人為堆積。
2	SK3045	2	黒褐（10YR3/1）	シルト	地山砂ブロックを多く含む。人為堆積。
3	P27	1	褐（7.5YR4/3）	シルト	炭化物を含む。柱抜取穴。人為堆積。断面でのみ検出。
4	P27	2	暗褐（10YR3/3）	シルト	柱抜取穴。炭化物を含む。断面でのみ検出。
5	P28	1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	柱抜取穴。断面でのみ検出。
6	SD3043	1	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	炭化物、褐色のシルトブロックを含む。人為堆積。
7	SD3043	2	暗褐（10YR3/3）	シルト	炭化物、褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
8	P29	1	黒褐（7.5YR3/2）	シルト	柱抜取穴。焼土、灰色シルトブロックを含む。
9	P29	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	柱穴堀方。黄褐シルトブロックを含む。
10	SK3063	1	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	褐色シルトブロックを含む。人為堆積。



第５図　遺構断面図

第５図　遺構断面図土層注記表

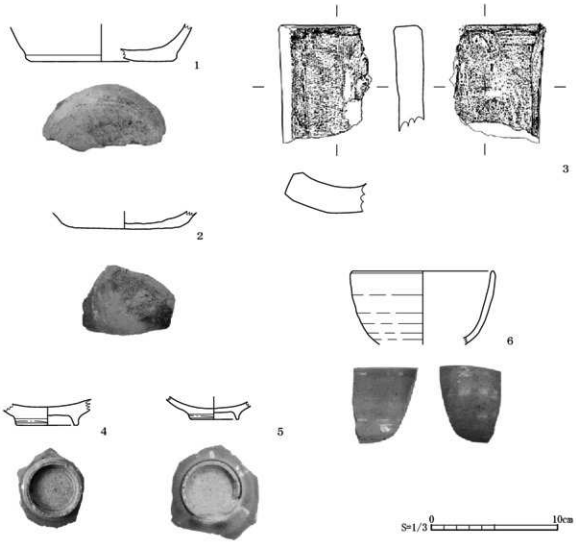
No.	遺構	層位	土色	土性	備考
11	SK3039	1	黄褐（2.5Y5/3）	砂質シルト	人為堆積。
12	SK3036	1	褐（7.5YR4/3）	シルト	焼土、炭化物を含む。人為堆積。
13	SK3036	2	黄褐（2.5Y5/4）	砂	焼土、炭化物を含む。人為堆積。
14	SK3037	1	にぶい黄褐（10YR5/3）	シルト	焼土、炭化物を含む。人為堆積。
15	SK3040	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭化物、黄褐シルトブロックを含む。人為堆積。
16	SK3038	1	褐（10YR4/4）	シルト	炭化物を含む。人為堆積。
17	SK3044	1	褐（7.5YR4/3）	シルト	炭化物、焼土、明黄褐シルトブロックを含む。人為堆積。
18	SK3044	2	にぶい黄褐（10YR5/3）	砂	自然堆積。
19	SK3044	3	黒褐（10YR3/1）	シルト	自然堆積。
20	SK3047	1	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	炭化物、褐色シルトブロックを含む。自然堆積。
21	SK3046	1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
22	P14	1	褐（10YR4/4）	シルト	柱痕跡跡。
23	P14	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	柱穴堀方。
24	SK3048	1	にぶい黄褐（10YR4/3）	シルト	炭化物、砂ブロックを含む。人為堆積。
25	SK3048	2	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、砂ブロック、褐色粘土ブロックを含む。人為堆積。
26	SK3049	1	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	炭化物、黄褐シルトブロックを含む。人為堆積。
27	SK3049	2	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭化物、地山砂を含む。人為堆積。
28	SK3050	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭化物、砂を含む。人為堆積。
29	P26	1	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	シルト	柱痕跡跡。
30	P26	2	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	褐色シルトブロックを含む。柱穴堀方。

本調査区は旧県道泉塩釜線沿いに位置し、江戸時代の南宮村にあたり、街道沿いには集落があったとされている。「伊達世臣家譜」によれば南宮村は17世紀初頭に伊達家家臣成田左馬重勝が拝領した土地であり、周辺には屋敷があったとされている。そのため、今回の調査で確認した近世の遺構に関しては前述の集落や成田氏の屋敷に関する可能性がある。

調査区全景（北から）

調査区北壁断面（南から）

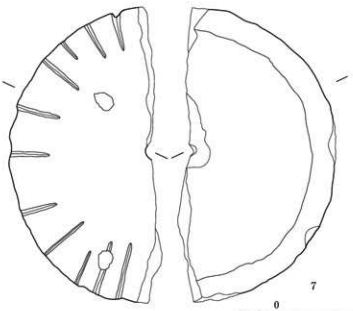
写真図版

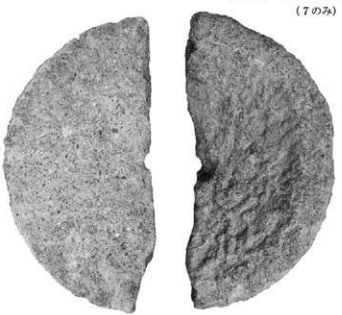


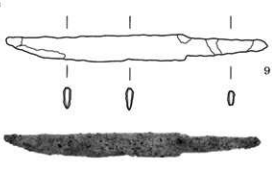
（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	土師器 甕	SX3051	—	摩滅	摩滅	—	(11) 3/24	(2.9)		B9
2	須恵器 坏	P26	堀方	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り		—	(8.4) 3/24	(1.5)		B4
3	平瓦	SX3051	—	最大長9.3、最大幅7.3、最大厚21。凸面にヘラケズリ、凹面に布目。						B10
4	施釉陶器 碗	SK3049	01	底部：回転ヘラ切り→高台貼り付け 釉色：灰白 底部無釉	釉色：灰白	—	(4.8) 24/24	(2.1)		B5
5	施釉陶器 碗	SK3049	01	底部：回転ヘラ切り→高台貼り付け 釉色：オリーブ灰 底部無釉	釉色：オリーブ灰	—	—	(1.8)		B6
6	施釉陶器 碗	SK3049	02	釉色：にぶい黄色	釉色：にぶい黄色	(11.2) 4/24	—	(5.8)		B7

第６図　出土遺物１







（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
7	石製品 石臼	P14	堀方	径30.7，厚さ11，残存12/24						R2
8	陶器 すり鉢	P13	堀方	ロクロナデ	かき目アリ	—	—	6		R3
9	刀子	SK3036	#2	最大長27，最大幅3.5（柄部分：3），最大厚6						W2
10	古銭	遺構確認面	Ⅳ	寛永通宝（新寛永），外形2.1					完形	
11	古銭	P14	堀方	寛永通宝（古寛永），外形2.3					完形	

第７図　出土遺物２

19　山王遺跡第 229 次調査

1　調査に至る経緯と経過

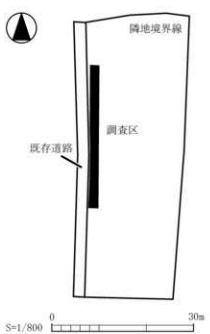
本件は、南宮字町地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和３年７月 12 日に地権者から当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では約 1,200 ㎡の土地で既存の擁壁等の撤去を行ったのち、道路の拡幅を行い、５区画の宅地造成を行うもので、上下水道管埋設の為、深さ最大 2.02 ｍの掘削を行うものである。道路設置に伴いアスファルト舗装で 50 ㎝の掘削が生じ、側溝等の設置で最大 80 ㎝の掘削を行う内容である。

申請地周辺では東側隣接地で令和３年度に第 228 次調査を実施しており、現地表から約 1.3 ｍのところで遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。その後、令和３年７月に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、確認調査を行うこととなった。

令和３年７月 29 日から調査に着手した。重機で盛土・表土を除去し、Ⅳ層上面で遺構の検出作業を行い、土坑跡と柱穴を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は９月２日までに終了した。６日に埋戻しを行い、すべての調査を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序

Ⅰａ層：現代の盛土。調査区東側で層が厚くなる。厚さは約 25 ～ 50 ㎝である。

Ⅰｂ層：現代の盛土。調査区南側でのみ確認した。厚さは約 15 ～ 45 ㎝である。

Ⅰｃ層：現代の盛土。調査区南側でのみ確認した。厚さは約５～ 20 ㎝である。

Ⅰｄ層：現代の盛土。厚さは 35 ㎝である。

Ⅱ　層：黒褐色シルト（10YR3/2）で、炭化物を含む。Ⅲ層の高さに揃えるような整地層である。厚さは 18 ㎝である。調査区南側では確認出来ず。

Ⅲ　層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）で、炭化物を含む。厚さは 20 ～ 25 ㎝である。

Ⅳ　層：にぶい黄褐色シルト（10Y4/3）で、炭化物を含む。古代の遺構検出面。厚さは 10 ～ 26 ㎝である。

Ⅴ　層：黄褐色粗砂（2.5Y5/3）。厚さは 28 ㎝である。

（2）発見遺構と遺物

ＳＫ 3060 土坑（第４図）

【位置】調査区北側で発見した土坑である。

【重複】なし。

【規模】調査区内で南北方向に約 70 cmの長さを確認した、深さは最大で約 12 cm。

【埋土】にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）で、炭化物を含んでいる。人為堆積である。

【遺物】出土していない。

Ｐ１（第４図）

【位置】調査区北側で発見した。

【重複】なし。

【規模】大きさは 45 cm× 50 cmほど。深さは最大 14 cmである。

【埋土】暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）で地山ブロックを含む、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ 3062 土坑（第４図）

【位置】調査区南側で発見した、土坑である。

【重複】なし。

【規模】南北方向で約 1.3 mの長さを確認した。遺構の西側半分が調査区の外に広がるため、平面の規模は不明である。

【埋土】３層確認した。人為堆積である。

【遺物】出土していない。

Ｐ３（第５図）

【位置】調査区南側東壁で確認した。平面では未確認である。

【重複】ＳＸ 3061 よりも新しい。

【規模】大きさは断面で南北方向に約 1.1 mである。平面ではプランが確認出来なかったため、全体の規模は不明である。

【埋土】１層は柱痕跡である。２～４層は堀方である。

【遺物】出土していない。

ＳＸ 3061（第５図）

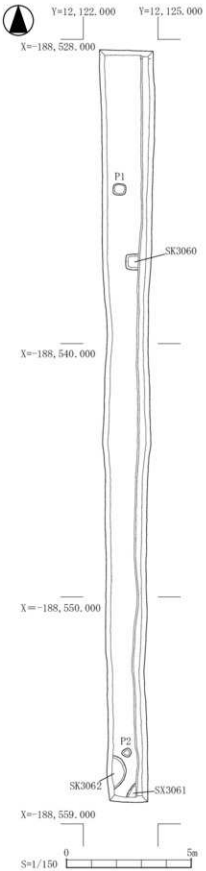
【位置】調査区南側で発見した。

【重複】Ｐ３よりも古い。

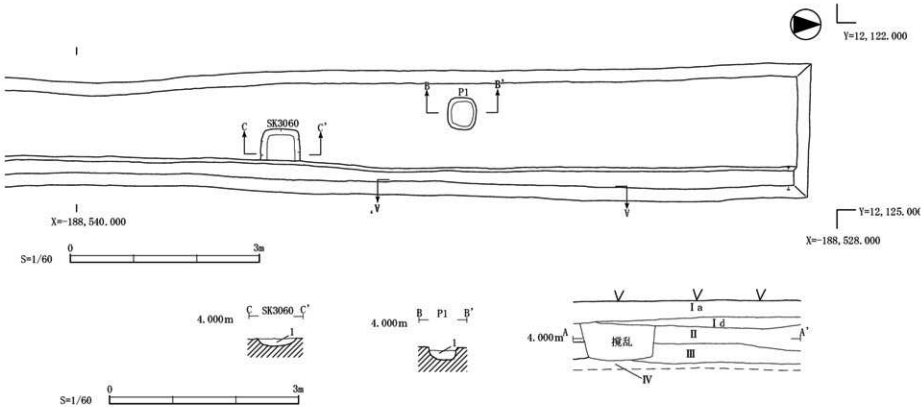
【規模】遺構の半分以上が調査区の外の為、不明である。

【埋土】４層確認した。全て自然堆積である。

【遺物】出土していない。

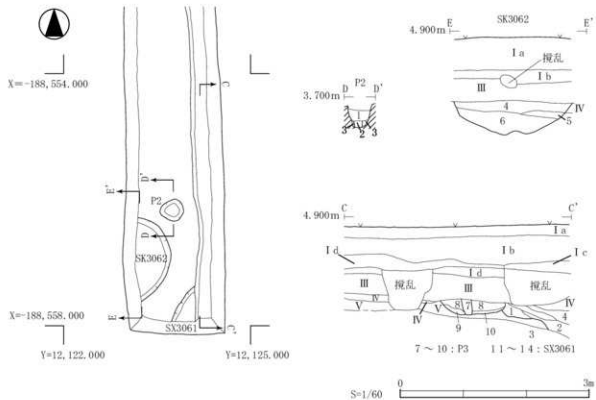


第３図　調査区平面図



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P1	1	暗オリーブ灰（2.5GY4/1）	シルト	地山ブロックを含む。人為堆積。
2	SK3060	1	にぶい黄褐（10YR4/3）	シルト	炭化物、地山ブロックを含む。人為堆積。

第４図　調査区北側遺構平面図・断面図



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P2	1	黒褐（10YR3/1）	粘質シルト	柱抜取穴。
2	P2	2	黒褐（10YR3/1）	粘質シルト	柱痕跡。
3	P2	3	黄褐（2.5Y5/3）	シルト	柱穴堀方。
4	SK3062	1	黒褐（10YR3/1）	シルト	
5	SK3062	2	暗灰黄（2.5Y4/2）	砂	
6	SK3062	3	黒褐（10YR3/1）	シルト	炭化物を含む。
7	P3	1	黒褐（10YR3/1）	粘質シルト	柱。
8	P3	2	褐灰（10YR4/1）	粘質土	柱穴堀方。
9	P3	3	褐灰（10YR5/1）	粘質シルト	炭化物、礫を含む。柱穴堀方。
10	P3	4	灰褐（7.5YR6/2）	粘質シルト	柱穴堀方。
11	SX3061	1	黒褐（10YR3/2）	粘質土	自然堆積。
12	SX3061	2	灰黄褐（10YR4/2）	粗砂	地山ブロックを含む。自然堆積。
13	SX3061	3	黒褐（10YR3/1）	粘質土	自然堆積。
14	SX3061	4	褐灰（10YR4/1）	粘質シルト	地山ブロックを含む。自然堆積。

第５図　調査区南側遺構平面図・断面図

Ｐ２（第５図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】なし。

【規模】不整円形で、大きさは 40 cm× 40 cm程である。

【埋土】３層確認した。

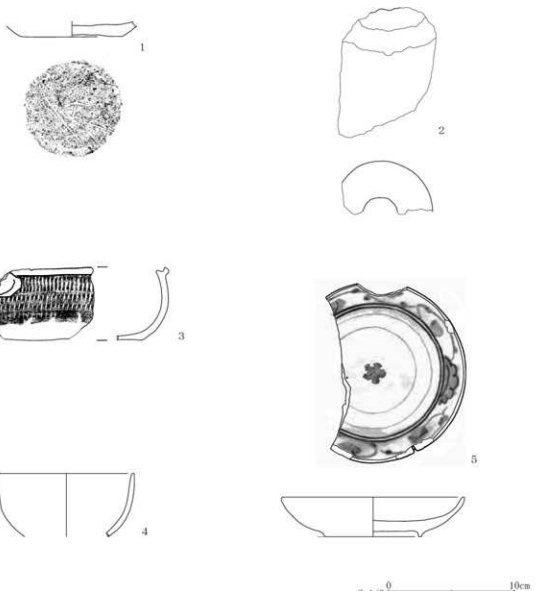
【遺物】出土していない。

3　まとめ

今回の調査ではⅣ層上面より遺構の検出作業を行い、土坑２基、柱穴２基、性格不明遺構１基を確認した。出土した遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器である。今回確認した遺構からは遺物が出土しなかったが、遺構確認面であるⅣ層から、陶器や磁器が出土したことから、およそ近世に属する遺構であると考えられる。

また、本調査の南側で実施した第 228 次調査で確認された SX3051 整地層の続きについては今回確認されなかった。

作業状況



（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量 口径 残存率	法量 底径 残存率	法量 器高	備考	登録番号
1	須恵器 坏	－	LⅣ	ロクロナデ 底部：切り離し不明→ヘラ削り		－	(8) 19/24	(1.2)		R2
2	土製品 羽口	－	LⅣ	最大長9.2ｃｍ、最大幅7.4ｃｍ、最大厚3ｃｍ。色調灰白色。					鉄滓融着	R3
3	陶器 行平鍋	－	LⅢ	飛鉋 鉄釉（茶褐色）		－	－	5.8	大堀相馬産か	R4
4	陶器 丸碗	－	LⅣ	灰釉		(18) 4/24	－	(5.0)	大堀相馬産か	R6
5	磁器 染付小皿	－	LⅢ	高台に回線	見込みに蛇の目の釉剥ぎ 〃　五弁花	(14.6) 16/24	(7.6) 18/24	3.2	肥前系か	R7

第６図　出土遺物

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

調査区東壁断面（西から）

調査区南側検出状況（西から）

写真図版

20　山王遺跡第230次調査

1　調査に至る経緯と経過

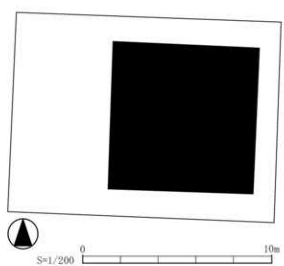
本件は、南宮字町、字伊勢地内における個人住宅新築に伴う本発掘調査である。

令和２年12月22日に地権者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、144.95㎡の敷地に約58㎡の個人住宅を建築するもので、基礎工事において現地表面から36㎝掘削したのち、直径20㎝の改良杭35本を深さ6.75mまで打ちこむものである。

当該地隣接地において、平成28年度に第177次調査を実施しており、現地表面から約2.3mで遺構を確認しており、遺跡への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された工法以外では、十分な地盤強度が得られないことから、本発掘調査を実施することになった。

令和３年７月16日に、地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、隣接地で実施した第231次調査とともに７月20日から発掘調査に着手した。重機による表土除去から始め、排出した土砂は、調査区内に置けないため場外搬出を行った。掘削は、Ⅵ層上面まで行い、遺構があることを確認した。７月29日から作業員を入れ、環境整備を行い、その後、９月７日まで遺構確認作業、遺構の掘削、写真撮影、測量をした。同月15日には調査区の埋め戻し、器材の撤収が終了し、現場作業を完了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序（第４図）

Ⅰ層：現代の盛土層。層厚約50 ～ 160㎝ある。

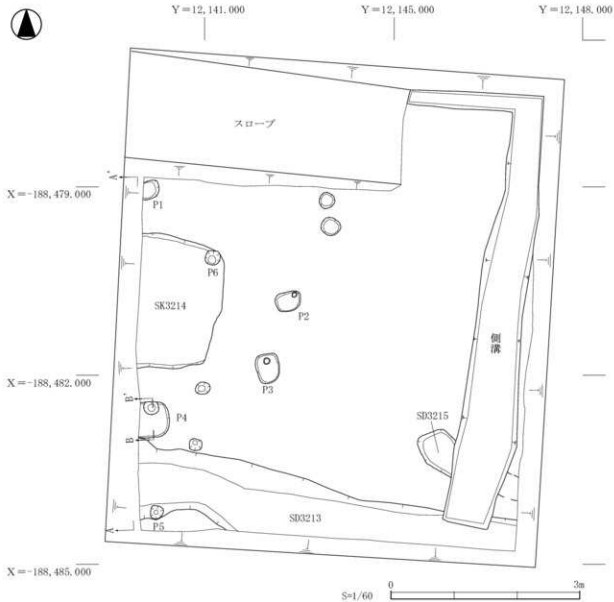
Ⅱ層：旧耕作土層で、調査区北側で確認している。黒色粘質土(7.5YR2/1)で、層厚約10㎝ ～ 20㎝である。

Ⅲ層：調査区北側で確認している。黄褐色粘質土(2.5Y5/1)で、層厚約５～ 20㎝ある。

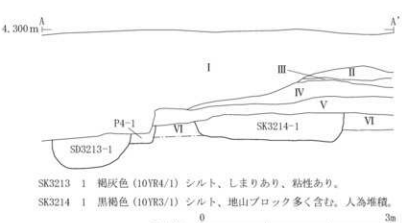
Ⅳ層：調査区中央部から北側に広がる。黒褐色粘質土(10YR3/2)で、層厚約10 ～ 30㎝ある。

Ⅴ層：調査区中央部から北側で確認している。褐灰色粘質土(10YR4/1)で、層厚約15 ～ 20㎝ある。

Ⅵ層：調査区全体で確認している。にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)で、古代から近世の遺構確認面である。



第３図　調査区平面図



第４図　調査区西壁断面図

第５図　遺構断面図

（2）発見遺構と遺物

ＳＤ3123溝跡（第３・４図）

【位置】調査区南側に位置する。Ｐ４・５と重複しており、Ｐ５より古く、Ｐ４より新しい。

【形状・規模】東西方向の溝跡で、調査区外に延びる。調査区東側では、溝跡南側が調査区外にある。幅約1.0m、深さ約0.5mある。

【埋土】褐灰色（10YR4/1）シルトの単層である。

【遺物】小片の古代の土師器や須恵器、平瓦が出土している。また、漆器の碗の蓋等の木製品が出土している（第７図）。

ＳＫ3214土坑（第３・４図）

【位置】調査区中央西側に位置する。Ｐ６と重複しており、それより古い。

【形状・規模】遺構西側は、調査区外にあるが、平面形状は方形と思われる。南北約2.1m、深さ約0.4mある。

【埋土】黒褐色（10YR3/1）シルトで、Ⅵ層由来のブロックが多く混じる。人為堆積である。

【遺物】土師器の坏が出土している（第６図）。他にも小片であるが須恵器なども出土している。調査区壁際で刀子が出土している（第７図）。

Ｐ１（第３図）

【位置】調査区北西隅に位置する。

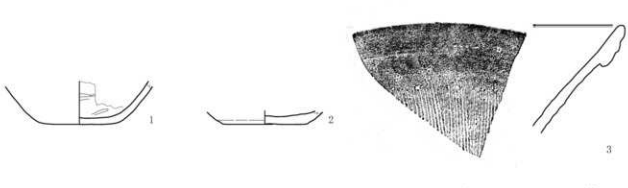
【形状・規模】遺構西側は調査区外にあり詳細は不明であるが、隅丸方形であろう。確認できる軸で約0.3m、深さは約0.2mある。

【埋土】黒褐色（10RY3/1）のシルトの単層である。

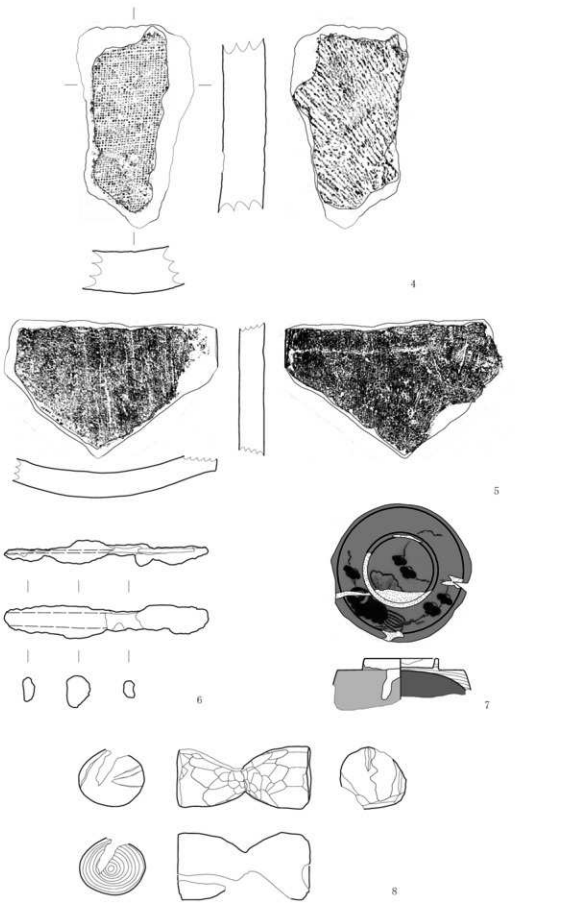
【遺物】須恵器の坏が出土している（第６図）。他に小片であるが、土師器、須恵器が出土している。

３　まとめ

ＳＤ3213溝跡は、近世のものと思われる漆器が出土していることから、近世以降の溝跡と考えられる。また、ＳＫ3214土坑は、人為的に埋め戻されており、古代の遺物が出土しているものの、この遺構に伴うものかは不明である。しかし、近世の遺物が出土していないことから、中世以前のものと考えられる。



第６図　出土遺物（１）



第７図　出土遺物（２）

第７図　出土遺物観察表

（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	土師器 坏	SK3214	1	摩滅により不明 底部：摩滅により不明	ヘラミガキ→黒色処理	－	(6.0) 10/24	－		R2
2	須恵器 坏	P１	1	ロクロナデ 底部：回転ヘラキリ→ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	－	(7.0) 8/25	－		R1
3	陶器 擂鉢	－	V	ロクロナデ 鉄釉	鉄釉、卸目	－	(7.0) 8/26	－		R5
4	平瓦	SD3213	1	布目	縄目	13.7	6.5	3.4		R3
5	平瓦	SD3213	1	布目→ヘラナデ	布目→ヘラケズリ	10.7	16.8	2.0		R4
6	鉄製品 刀子	SK3214	1			(16.2)	2.5	1.8	木製の柄が残存	R1
7	木製品 漆器盌	SD3213	1	深緑の地に赤漆で瓜の絵付け	黒色漆	(10.8)	つまみ径 (6.0)	4.0		W2
8	木製品 木錘	SD3213	1			(4.9)	10.6	5.2		W1

調査区全景（南から）

ＳＫ 3214 完掘貝享（東から）

ピット等検出状況（西から）

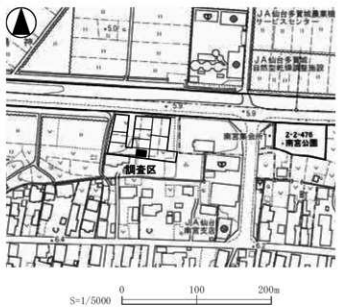
調査風景（南から）

21　山王遺跡第231次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町、字伊勢における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和３年２月25日、地権者から当該地での事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、住宅部分の基礎工事において柱状改良杭29本を深さ6.25mまで打設するものである。当該地周辺では、東側近接地で平成28年度に第177次調査を実施しており、現表土から2.3mの深さで遺構が発見されている。そのため遺跡に影響を与える可能性が懸念されることから、事業者と工法変更による保護協議を行った。しかし、提出された工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。



第１図 調査区位置図

地権者より発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことから、７月20日より現地調査を開始した。なお、重機による表土掘削と埋め戻しは、隣地で実施された山王遺跡第230次調査と合わせて実施した。７月21日から重機による表土掘削を実施し、８月３日より作業員を動員して調査区内の排水溝の造作及びに調査区内の精査に着手した。８月26日に調査区内の遺構の分布の確認を終え、遺構検出状況の写真撮影を実施した。９月２日から遺構の掘り下げ、写真撮影を実施し、その後図面の作成を行った。９月15日に現地作業及び器材の撤収作業が完了し、17日に休憩施設を撤去した。９月22日から重機で埋め戻しを行い、同日に現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

（１）基本層序（第３図）

Ⅰ層：現代の盛土。層厚１m40cm程度。

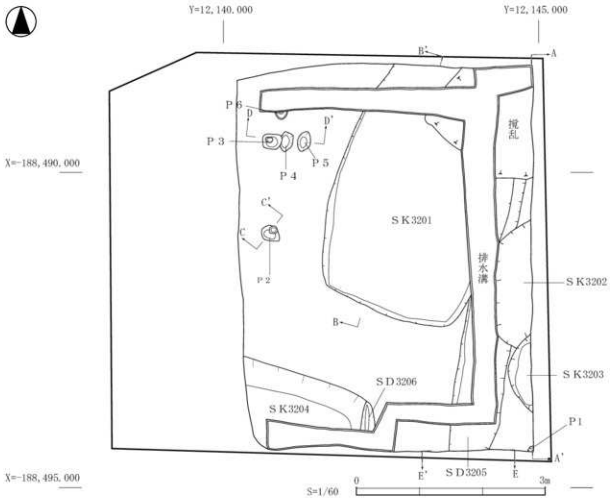
Ⅱ層：旧表土層。黒色シルト（10YR1.7/1）。層厚10 ～ 20cm程度。

Ⅲ層：旧耕作土。暗褐色シルト（10YR3/4）。層厚15cm程度。

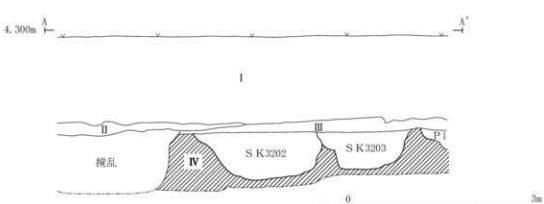
Ⅳ層：遺構検出面。黄褐色砂質シルト（2.5Y5/3）。層厚１m以上。これより上面は削平を受けている。

（２）発見遺構と遺物（第３・４図）

調査区内からは土坑４基、小溝２条、柱穴４基を発見した。

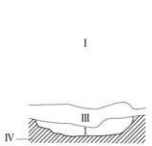


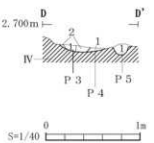
第２図　調査区平面図



遺構	土　色	粒度	粘性	しまり	備　考
ＳＫ3202	黒褐色（10YR3/1）	シルト	中	中	土器小片を少量含む。
ＳＫ3203	黒褐色（7.5YR3/1）	粘土	中	中	
Ｐ１	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	中	中	

第３図　調査区東壁断面図





遺構	No.	土　色	粒度	粘性	しまり	備　考
S K3201	1	黄灰色（2.5Y4/1）	粘土	弱	中	黄系の砂が混じる。
P 2	1	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	弱	強	抜取穴。
	2	灰褐色（7.5YR4/2）	シルト	弱	中	地山の粒が混じる。
P 3	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	強	強	抜取穴。粘質土。
	2	黄灰色（2.5Y4/1）	シルト	中	中	地山ブロックが混じる。
P 4	1	黄灰色（2.5Y5/1）	シルト	弱	中	砂質土。
P 5	1	灰黄色（2.5Y6/2）	シルト	中	中	やや粘質土。
S D3205	1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	中	中	

第４図　遺構断面図

ＳＫ3201土坑（第４図）

【位置】調査区中央に位置する。

【重複】ＳＤ3205溝跡と重複し、それより新しい。ＳＫ3202との切合いは確認できない。

【平面形・規模】平面形は、隅丸長方形。規模は長軸で４ｍ以上、短軸で約2.８ｍ。長軸の方向は北で東に17度偏している。

【壁・底面】壁は直線的に立ち上がる。検出面より80㎝程度掘り下げたところで、崩れやすい砂質の地山であったため安全を考慮し、掘削を停止した。そのため、遺構の底面を確認することはできなかった。

【埋土】人為堆積による単層である。

【遺物】土器の小片が少量出土した。

ＳＤ3205溝（第４図）

【位置】調査区東側に位置する。

【重複】調査区東半分の重複する遺構の中で最も古い。

【平面形・規模】南北方向の溝である。平面で確認できるのは溝の底部分であり、断面図で確認すると、幅は約１ｍ、深さ約10 ～ 16㎝である。

【埋土】単層である。

【遺物】遺物は出土しなかった。

３　まとめ

当該調査において、遺構はすべてⅣ層から掘り込まれているが、遺構の年代決定となる資料は出土していない。しかし、遺構を検出したⅣ層は、土色や土質等の類似性から、山王遺跡第221次調査における基本層Ⅵ層と対応すると考えられる。そのため、当該調査におけるⅣ層検出遺構も、古代及び近世の遺構であると考えられる。

調査区全景（北から）

ＳＰ3207 断面（南東から）

Ｐ2・Ｐ3・Ｐ4 断面（南から）

ＳＫ3204・ＳＤ3206 重複状況（南から）

ＳＫ3204 断面（北から）

写真図版

22　山王遺跡第232次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は南宮字伊勢における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和３年６月29日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現地表から最大約54cmの盛土を施した後、雨水排水側溝の設置を行い、幅約４ｍの道路を敷設するものであり、遺跡への影響が懸念された。

このことから、対象地における遺構の分布状況を把握する目的で、確認調査を行うこととなった。

その後、９月29日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、10月５日には重機による掘削を開始した。

第１図　調査区位置図

道路部分に２箇所、宅地部分に１箇所の調査区を設定し、それぞれ東からＴ１、Ｔ２、Ｔ３と呼称することとした。掘削はＴ１から西へ向かって通し番号順に行い、発生土は事業地内に仮置きした。

Ｔ１及びＴ２で東西方向に延びる２条の溝を確認した。両遺構は近接する山王遺跡第95次調査及び平成８年度宮城県調査区で発見した北２道路南北両側溝の延長に位置していることから、それらと一連の遺構と考えた。

調査区内における湧水が激しいことから、同月６日には調査区内に排水用側溝及び水中ポンプ設置用の釜場を造作した。その後、調査区全体の荒削りを行ったところ、Ｔ２で井戸跡とみられる落ち込み状遺構や、複数の柱穴を確認した。同月７日には全ての調査区の全景写真撮影、任意の測量基準点の設置を完了し、1/100スケールの調査区配置図を作成した。

その後降雨が続いたこともあり、１週間程度現地作業を中断したものの、同月14日から19日にかけて平面・断面図の作成を行い、当初任意で設定した測量基準点に対して世界測地系座標を与えた。同月22日には調査区の埋め戻しを、23日には休憩施設の撤去を行い、現地作業の一切を完了した。

2　調査成果

（１）基本層序（第２図）

Ⅰa層：現代の盛土層。拳大の礫が大部分を占める。層厚は約1.25mである。

Ⅰb層：旧耕作土。層厚20 ～ 40cmである。

Ⅱ 層：古代の最終堆積層。黒色粘土（10YR2/1）。地形の落ちや窪み等に部分的に堆積する。

Ⅲ 層：古代の遺構検出面。緑灰色シルト(5G6/1)。

（２）発見遺構と遺物

ＳＤ3056溝跡（第３・４・５図）

【位置】Ｔ１で確認した東西方向の溝跡である。北２道路南側溝とみられる。
【重複】他の遺構との重複はない。
【形状・規模】確認できた規模は、調査区東壁で上幅最大約120cm、深さ最大約60cmである。
【埋土】１層は黒褐色シルト(10YR3/1)である。φ２～３㎜程度の焼土を微量含む。２層は褐灰色シルト(10YR5/1)である。φ５～６㎜程度の灰白色火山灰ブロックを少量含む。３層はオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)である。

ＳＤ3057溝跡（第３・４・５図）
【位置】Ｔ２南半部で確認した東西方向の溝跡である。北２道路北側溝とみられる。
【重複】小ピットと重複しており、これより古い。
【形状・規模】確認できた規模は、西壁で上幅最大約110cm、深さ最大約35cmである。
【埋土】１層は黒色粘土（10YR2/1）である。均質な自然堆積層。２層は黒褐色粘土（10YR3/1）である。地山由来のオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)ブロックを少量含む。３層はオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)である。φ２cm程度の黒色粘土（10YR2/1）ブロックを少量含む。

ＳＥ3058井戸跡（第３・４図）
【位置】Ｔ２北半部で発見した井戸跡である。
【重複】他の遺構との重複はない。
【遺物】掘方埋土１層から須恵器坏が出土している（第２図）。

３　まとめ

（１）古代では、多賀城南面の方格地割を構成する北２道路の南北両側溝ＳＤ3056・3057のほか、ＳＥ3058井戸跡を確認した。
（２）小ピットは北２道路と重複しており、これより新しい。隣接地点の調査で同様の状況を確認したものについては、概ね近世のものと解釈されている（多賀城市教育委員会2013,宮城県教育委員会1998）。
（３）以上から、当該地点には古代及び近世の遺構が分布すると考えられる。

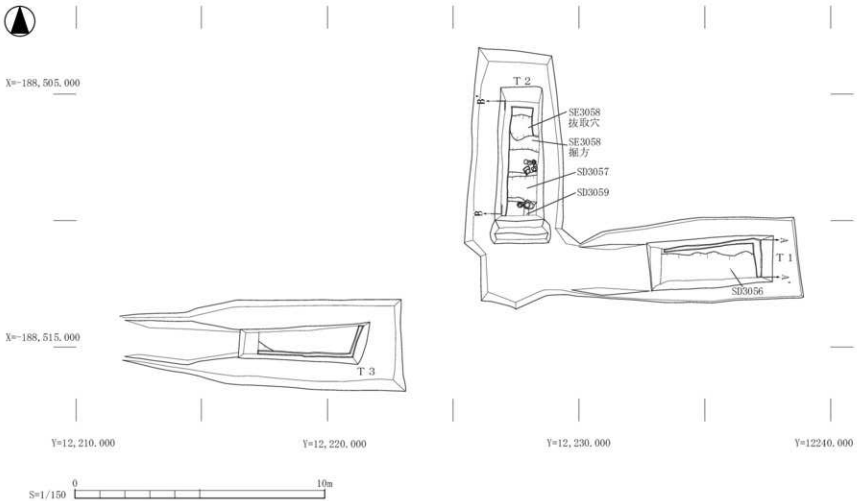
参考文献

多賀城市教育委員会2013「山王遺跡第９５次調査」『多賀城市内の遺跡２』多賀城市文化財調査報告書第111集,pp.18-25
宮城県教育委員会1998『山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集

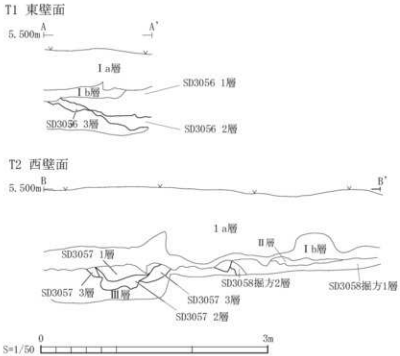
（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量 口径 残存率	法量 底径 残存率	法量 器高	備考	登録番号
1	須恵器坏	SE3058	掘方1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り後、周縁部のみ回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	(8.1) 5/24	－		R1

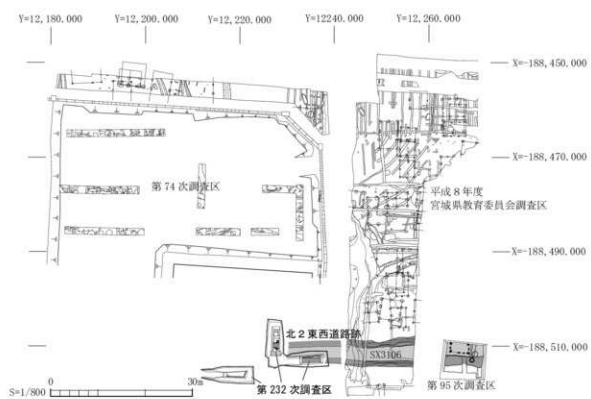
第２図 遺物実測図及び観察表


X=-188,505.000
X=-188,515.000
T 2
SE3058
抜取穴
SE3058
掘方
SD3057
SD3059
T 1
SD3056
T 3
Y=12,210.000
Y=12,220.000
Y=12,230.000
Y=12240.000
S=1/150
0
10m

第３図　調査区平面図



第４図　調査区断面図



第５図　近隣の調査区との位置関係

Ｔ１遺構検出状況（西から）

Ｔ２遺構検出状況（西から）

Ｔ３遺構検出状況（東から）

Ｔ３深掘りトレンチ（西から）

Ｔ１東壁断面

Ｔ２北壁断面

北２道路検出状況（西から）

23　山王遺跡第 234 次調査

1　調査に至る経緯と経過

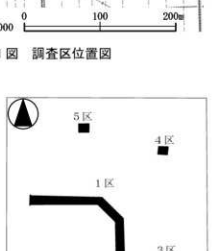
本件は、山王字山王地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和３年５月 13 日に地権者から当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では開発面積 2,358.8 ㎡の敷地に幅６ｍの道路と 11 区画の宅地を造成するもので、現地表から約 85 ㎝の盛土をした後、最大 1.2 ｍの掘削を行うものである。

申請地周辺では南側で昭和 63 年度に第７次調査を実施しており、現地表から約 20 ㎝のところで遺構が発見されている。このことから、当該地区も遺跡が広がっていることが想定されるため、確認調査を実施することになった。その後、令和３年 10 月１日に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、確認調査を行うこととなった。

第１図　調査区位置図

令和３年 10 月 18 日から調査に着手した。開発敷地内に５ヶ所のトレンチを設定し、重機で盛土・表土を除去し、Ⅱ層上面で遺構が検出された。また、一部深掘りを行い、下層の状況を確認した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は 10 月 29 日までに終了した。30 日に埋戻しを行い、11 月２日にテント及び仮設トイレの返却を終え、すべての調査を終了した。



第２図　調査区配置図

2　調査成果

（1）基本層序

Ⅰａ層：現代の水稲耕作土層。暗オリーブ灰色粘土（2.5GY3/1）。厚さは約 20 ㎝である。

Ⅰｂ層：現代の水稲耕作土層。灰オリーブ色年度（7.5Y4/2）。１区南端から、２区に向けて畦畔を確認した。厚さは約 10 ㎝である。上面に酸化鉄の層が含まれる。

Ⅱ　層：古代の遺構検出面。にぶい黄色年度（2.5Y6/4）。酸化鉄を含む。厚さは約 30 ㎝である。

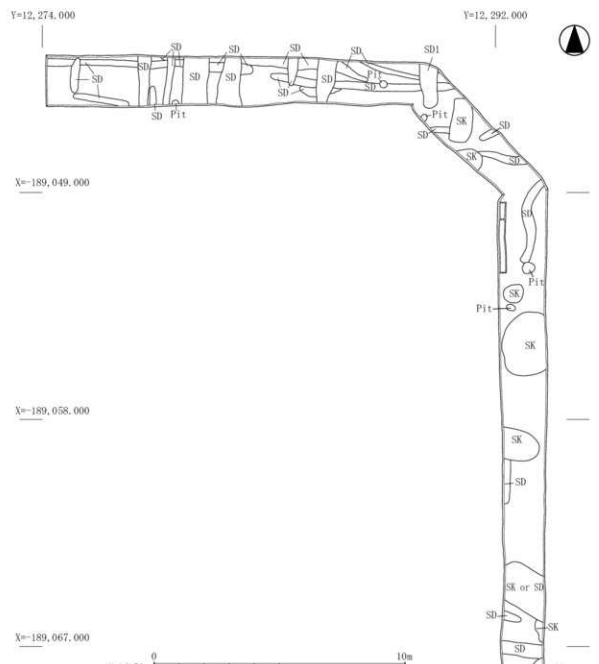
Ⅲ　層：にぶい黄色シルト（2.5Y6/4）。酸化鉄を含む。厚さは 10 ㎝である。

Ⅳ　層：にぶい黄色シルト（2.5Y6/4）。厚さは約 20 ㎝である。

（2）発見遺構と遺物

調査区１区北側で、東西及び南北に並行する小溝群や南北に並行する溝跡が密度濃く分布している様子を確認した。調査区南側では、溝跡や土坑、柱穴などを確認した（第３図）。

遺物に関しては、ＳＤ１で底部が回転糸切された須恵器坏の底部や甕、土師器の小破片が出土している。Ⅱ層からは須恵器や土師器の小破片が少量ではあるが出土している。遺構の掘り下げは行っていないが、出土遺物から古代に属する遺構であると推定される。



第３図　１区平面図

（3）まとめ

今回の調査では、遺構の分布について調査区のほぼ全体に及んでいる状況を確認した。遺構の掘り下げに関しては行っていないため、詳細な時代は不明ではあるが、遺構確認面であるⅡ層および遺構の埋土から土師器と須恵器が出土していることから、古代に属する遺構であると推定される。

調査区南側では、昭和63年度に当計画地の南側で第7次調査を実施しており、古代の土坑や溝跡、柱穴が発見されている。このことから本調査区にも同様な遺構の広がりがあると推定される。

また、計画地東側と西側で遺構確認面であるⅡ層上面までの深さを確認するため、2～5区の試掘を行った。地表面から20 ㎝～40 ㎝の深さで2層上面となる。2、3、4区で溝跡を確認し、5区では遺構は確認されなかった。

1区　南側検出状況（南から）

1区　北側検出状況（西から）

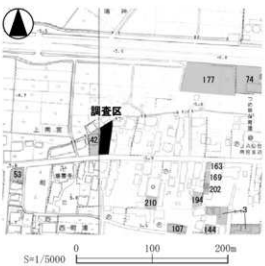
24　山王遺跡第235次調査

1　調査に至る経緯と経過

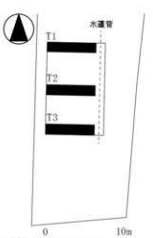
本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和３年10月12日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、42か所に6.75mの柱状改良杭の設置が予定されており、当該工事により遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存が必要となった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、11月19日に３箇所のトレンチを設定し、重機により表土掘削を行った。

本件の西側に隣接する第42次調査では、溝跡や土坑を確認しているが、本調査区においては近代のかく乱が認められるのみで、いずれの調査区でも遺構は確認されなかった。そのため、当該地には残存していないと判断し、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、同日中に埋戻して現地作業の一切を終了した。



第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

Ⅰa層：現代の住宅盛土層。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約20cmである。

Ⅰb層：現代の住宅盛土層。明黄褐色土(2.5Y7/6)。層厚約20～45cmである。

Ⅱ層：近代の盛土層。黒褐色土(10YR3/2)。層厚約80cmである。Ｔ３では、Ⅲ層との境で、近代の火災の際の炭化物と思われる整地層を確認した。

Ⅲ層：古代の地山面。オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3)。層厚約10cm以上と考えられる。

Ｔ１　検出状況（東から）

Ｔ１　基本層序（北から）

25　山王遺跡第237次調査

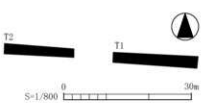
1　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字八幡地内における排水路整備工事に伴う発掘調査である。令和４年１月18日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。本件工事は、既存の土側溝の底面を長さ35.3m、幅1.3m、深さ24cmの規模で掘下げ、新たにフリューム側溝を設置する計画である。しかし、周辺の調査成果や、事前の試掘調査の結果から、工事による掘削が遺構面まで達しない状況を確認し、遺構検出面まで保護層が確保される状況を提示したが、宮城県文化財課から確認調査の指示回答であった。そのため、指示事項に則り当該調査を実施した。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、２月８日に２箇所の調査区を設定し、重機により表土掘削を行った。

検出作業の結果、いずれの調査区でも遺構は確認されなかったため、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、２月９日に当該地を引渡して現地作業の一切を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

2　調査成果

Ⅰ層：表土層・既存排水路堆積層。暗褐色土（10YR3/3）。層厚約100cmである。

Ⅱ層：古代以降の堆積層。黒褐色土（10YR2/2）。層厚約30cmである。

Ⅲ層：古代の堆積層。にぶい黄色粘質土（2.5Y6/4）。層厚約30cmである。Ｔ１の東側に残存している。
黒褐色粘土層が互層状に混入している。

Ⅳ層：古代の地山面。明黄褐色砂層（2.5Y6/6）。

Ｔ１　検出状況（東から）

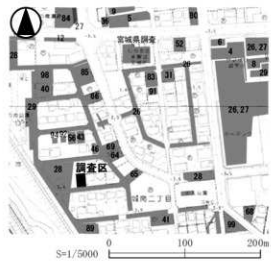
Ｔ１　基本層序（北から）

26　市川橋遺跡第101次調査

1　調査に至る経緯と経過

本件は、城南二丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和２年12月９日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、29か所に７ｍの柱状改良杭の設置が予定されていた。

申請地の南側隣接道路では平成10～14年度に実施した第25～29次調査において、方格地割を形成する東１道路をはじめ、竪穴建物跡や掘立柱建物跡等、多数の遺構を発見している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。



第１図　調査区位置図

その後、地権者から12月24日に埋蔵文化財発掘の届出、令和３年７月15日に発掘調査の承諾書が提出されたことを受け、７月26日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分をダンプトラックにより場外へ搬出した。

第２図　調査区配置図

表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区の環境整備を開始した。

８月３日には第Ⅱ層の遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代のものとみられる土坑を確認した。８月10日には測量座標杭の設置や平面図の作成を行い、８月18日から第Ⅱ層の掘下げを開始した。８月19日には第Ⅲ層の遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、東１南北道路西側溝の一部や、小溝群等を確認した。８月20日には第Ⅲ層の平面図を作成し、順次遺構の掘下げを行った。８月27日には各遺構の断面図を作成し、調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、第Ⅳ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。

８月30日には完掘状況の写真撮影、９月１日に機材撤収、９月７日に調査区の埋戻しを行い、現地作業の一切を終了した。

2　調査成果

（1）基本層序（第４図）

Ⅰa層：城南地区土地区画整理事業時の盛土層。灰黄色礫層（2.5Y6/2）。層厚約200cmである。

Ⅰb層：現代の水稲耕作土層。褐灰色粘土（10YR4/1）。層厚約40cmである。

Ⅱ 層：古代の基盤層で第Ⅰ遺構検出面。黒褐色土（10YR3/1）。遺物・炭化物微量含む。層厚約15～30cm

である。上面は後世の削平を受けている。

Ⅲ 層：古代の基盤層で第Ⅱ遺構検出面。暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）。層厚約10cmである。

Ⅳ 層：古代以前の堆積層。黄灰色砂層（2.5Y4/1）。層厚約７cmである。

Ⅴ 層：古代以前の基盤層。黄灰色シルト（2.5Y6/1）。層厚約15cmである。

Ⅵ 層：古代以前の基盤層。暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）。層厚約10～20cmである。

Ⅶ 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂層（2.5Y5/2）。層厚約15cmである。

Ⅷ 層：古代以前の基盤層。黄灰色シルト（2.5Y4/1）。層厚約20cmである。

（２）発見遺構と遺物

Ⅱ層上面で土坑、Ⅲ層上面で東１道路西側溝・小溝群・ピットを確認した。

〔Ⅲ層上面〕

ＳＤ3621東１道路西側溝（第３～５図）

【位置】調査区東側で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で東に７度偏している。

【調査状況・重複】SX3622小溝群と重複し、それより新しい。

【形状・規模】上幅は145cm以上、深さ55cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】２層に区分される。１層は黒褐色粘質土(2.5Y3/1)で、粘性やや強く、締まりは密、炭化物・砂粒少量含む。２層は黒褐色粘質土(2.5Y3/1)で、粘性やや強く、締まりは密、φ５～10cm黄褐色ブロックやや多く含む。

【遺物】遺物は須恵器坏１点（第６図）の他、須恵器坏３点、甕６点、土師器坏１点、甕５点、不明１点が出土しているがいずれも小破片である。

ＳＸ3622小溝群（第３～５図）

【位置】調査区全域で発見した小溝群で、４条確認した。方向は西で北に約２度～６度偏している。

【調査状況・重複】SK3620・SD3621・P2・P3と重複しており、SK3620・SD3621より古く、P2・P3より新しい。

【形状・規模】上幅は20cmから75cm、深さ５cmから８cmである。底面は皿状または平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土(10YR3/1)。粘性なし。締まり密。φ５mm～１cm程度の黄褐色ブロック・砂粒を微量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

〔Ⅱ層上面〕

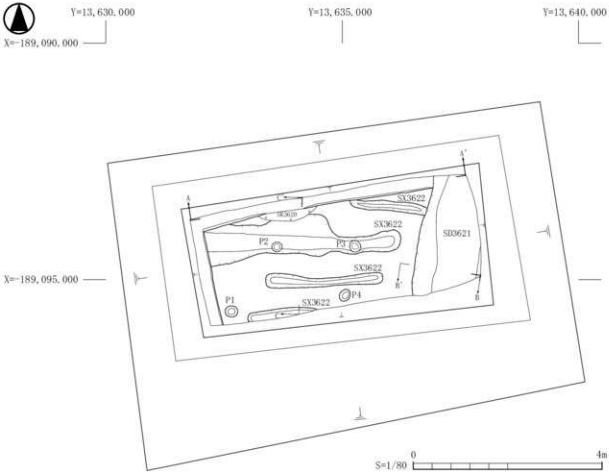
ＳＫ3620土坑（第４・７図）

【位置】調査区北側で発見した土坑である。

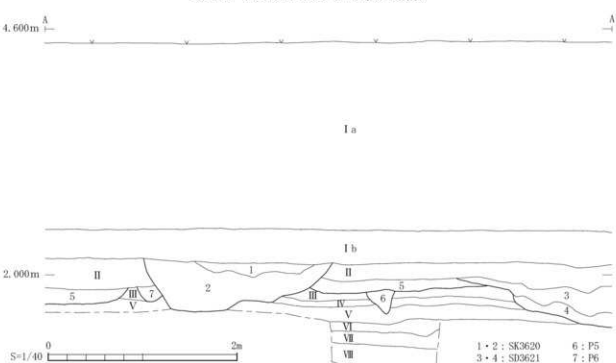
【調査状況・重複】SX3622小溝群と重複し、それより新しい。

【形状・規模】長軸200cm以上、短軸70cm以上、深さ53cmである。底面は一部段状であるが概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

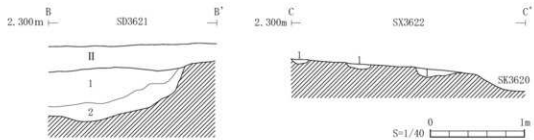
【埋土】２層に区分される。１層は黒褐色土(10YR3/2)で、粘性なし、締まりは密、炭化物微量含む。２層は黒褐色土(10YR2/2)で、粘性なし、締まりは密、炭化物・φ２～５cm黄褐色ブロック多量含む。



第３図　調査区平面図（Ⅲ層検出遺構）



第４図　調査区北壁土層断面図



SD3621 1層 黒褐色粘質土（2.5Y3/1）炭化物・砂粒少量含む
2層 黒褐色粘質土（2.5Y3/1）φ5cm黄褐色ブロックやや多く含む

SX3622 1層 黒褐色粘土（10YR3/1）黄褐色ブロック・砂粒少量含む

第５図　遺構断面図

（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	須恵器坏	SD3621	1	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 無調整	ロクロナデ	(15.0) 2/24	(9.2) 13/24	4.4		R2

第６図　ＳＤ3621 出土遺物

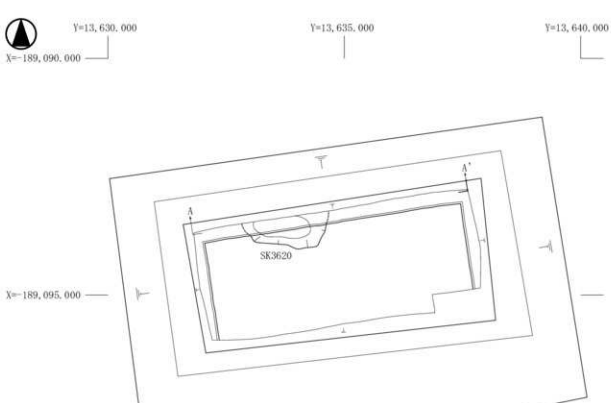
【遺物】遺物は須恵器坏１点、瓶類１点、不明１点、土師器坏１点、坏蓋１点、甕６点が出土しているがいずれも小破片である。

（３）その他の遺物（第８図）

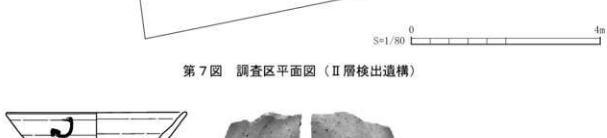
P1から土師器甕３点、基本層Ⅱ層から、須恵器杯１点（第６図１）の他、灰釉陶器１点、須恵器坏18点、坏蓋１点、甕17点、瓶類５点、瓦２点、土師器坏19点、坏蓋１点、甕99点が出土しているが、いずれも小破片である。

３　まとめ

ここでは、Ⅲ層上面で確認したSD3621の層位と出土遺物、周辺の調査成果からその性格について検討する。



第７図　調査区平面図（Ⅱ層検出遺構）

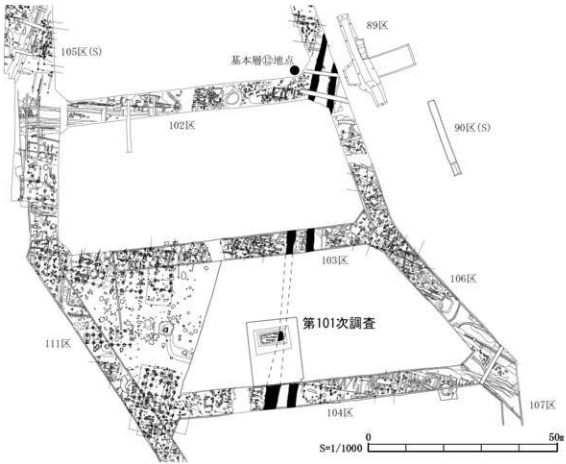


（単位：cm）

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	須恵器坏	遺構検出面	Ⅱ	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 無調整	ロクロナデ	(14.2) 4/24	(8.2) 10/24	(3.4)	墨書「紀」	R1

第８図　Ⅱ層出土遺物

SD3621は、多賀城市城南地区土地区画整理事業に伴う市川橋遺跡第28次調査（多賀城市教育委員会2004）において確認されている、104区東１道路西側溝（以下、SD1941）の北側延長線上に該当するものと考えられる（第９図）。



第９図　東１道路西側溝　想定模式図

次に、基本層序の対応関係についてみてみると、当該調査ではⅠ層（表土層）直下にⅡ層が認められ、中世以降の遺物は混入しないことから、古代の基本層と考えられる。また、第28次調査の基本層序⑫地点ではⅠ層（表土層）直下がⅣ層で、灰白色火山灰降下以前の堆積層と位置付けている。その他、土質や混入物などの様相から、当該調査基本層第Ⅱ層と第28次調査基本層第Ⅳ層が対応関係にあると考えられる。

次に、SD3621とSD1941の対応関係についてみてみると、SD3621は基本層第Ⅱ層に覆われており、その西側に重複する溝跡は認められない。SD1941の場合、基本層第Ⅳ層に覆われる時期は古い時代からａ～ｃ期の３時期が確認されているが、その中で西側に溝跡の重複が認められない時期はａ期のみである。以上のことから、SD3621は東１道路西側溝の中で最も古いａ期に該当すると考えられる。また、当該調査区で確認できなかったｂ・ｃ期については、東側の調査区外に残存しているものと想定される。

次に出土遺物から遺構の年代を検討してみると、SD3621では須恵器・坏Ⅲ類（回転ヘラ切り→無調整）１点（第６図）が出土しているが、それ以外の遺物は小破片であり、年代決定には至らない。また、SD1941については、報告書中に遺構の年代について触れられていないため詳細は不明であるが、基本層Ⅳ層に覆われている状況である。以上のことから、東１道路西側溝ａ期は、造成時期として概ね９世紀後半を下らないと考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会2004『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市文化財調査報告書第75集

Ⅱ層検出状況（南東から）

SK3620 断面（南から）

作業状況（東から）

Ⅲ層検出状況（東から）

平面図作成状況（西から）

写真図版 1

SD3621 東１道路西側溝北壁断面（南から）

SD3621 東１道路西側溝完掘状況（北から）

SX3622 小溝群断面（東から）

調査区北壁基本層序（南から）

Ⅲ層完掘状況（東から）

写真図版２

27　高崎遺跡第 129 次調査

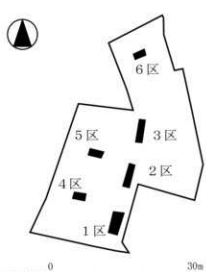
1　調査に至る経緯と経過

本件は、高崎二丁目地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。

令和３年４月 25 日、地権者より当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、約 928 ㎡の範囲において、現地表から最大約 30 ㎝の盛土を行い、最大深さ 90 ㎝の掘削を行うものである。当該地の西側の第 17 次調査では、現地表から約 25 ㎝下で遺構を発見している。このことから、遺跡への影響が懸念されたため、確認調査を行うこととなった。

地権者から令和３年９月６日に発掘調査の依頼者と承諾書の提出を受け、９月 27 日から発掘調査に着手した。計画地内に６箇所の調査区を設定した。重機で盛土・表土を除去した。９月 28 日から発掘作業員による遺構の検出作業を行ったが、遺構、遺物は確認出来なかった。28 日に掘削及び断面図作成、写真撮影などの記録を終了した。10 月４日に埋戻しを行い、調査を終了した。

第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

１区　完掘状況（東から）

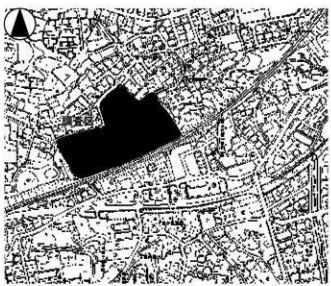
６区　完掘状況（南から）

28　野田遺跡第６次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷二丁目における樹木抜根工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和３年２月15日に事業者より当該地での当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、当該地約18,000㎡の範囲内で樹木抜根を実施するものである。当該地では、平成19年度に第４次調査（確認調査）を実施しており、南向きの傾斜地で竪穴建物跡等の遺構を検出している。しかしながら、第４次調査では遺跡の西側を部分的に調査したに留まり、遺跡全体の広がりは把握しきれていない。樹木抜根工事の後、宅地造成工事を実施することを考慮し、遺跡の広がりを確認する必要があったため、確認調査を実施することとなった。



第１図　調査区位置図

事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出されたことから、６月15日より現地調査を開始した。調査区が広域であるため、丘陵の尾根を境に北斜面を北区、南斜面を南区として、北区に12箇所、南区に26箇所の調査区を設定し、北区から重機で表土掘削を行った。なお、南区には野田遺跡第４次調査の調査区が含まれているが、確認調査が完了しているため、今回の調査対象からは除外した。

６月16日より作業員を動員し表土掘削が完了した北区から、順次調査区内の精査を実施した。６月18日より重機での表土掘削及び調査区内の精査と並行して、光波測量を開始した。精査が完了した調査区では、記録作業を行った。７月29日から８月３日までの４日間重機による埋め戻しを行った。８月５日には、休憩施設と発掘器材等の撤収を行い、確認調査を終了した。

２　調査成果

（１）基本層序

丘陵の尾根付近は遺構検出面（Ⅴ層）まで、基本的に表土（Ⅰ層）があるのみである。しかしながら、当該地は丘陵地であるため斜面の傾きや形状によって、部分的に堆積層や旧表土が見られる。北区斜面裾に設定した６Ｔでは、表土以外にも土層の重なりが見られた。

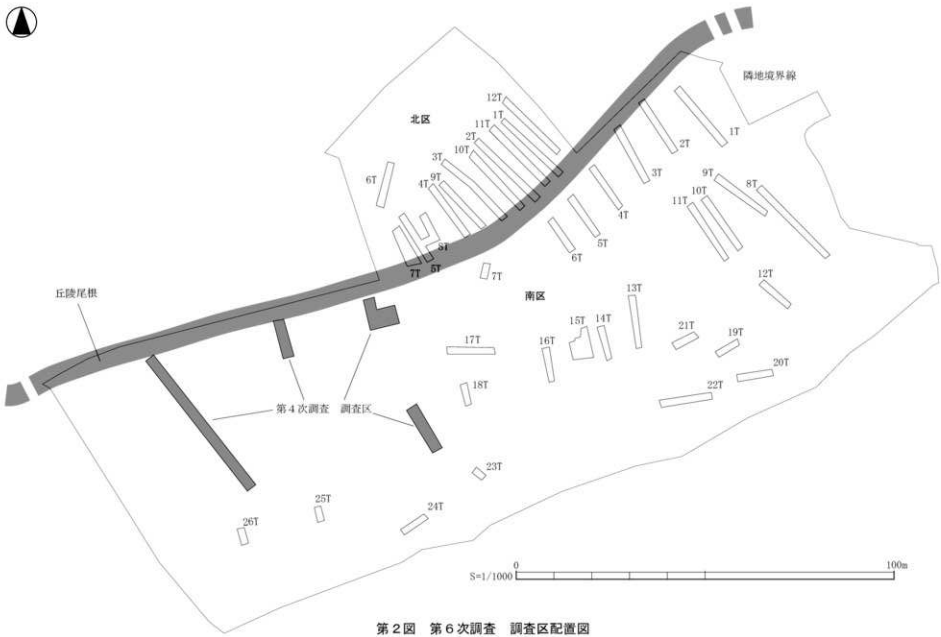
Ⅰ層：表土。にぶい黄褐色砂層（10YR4/3）。

Ⅱ層：盛土整地層。明黄褐色砂層（2.5YR6/6）。小礫が混じる。北区６Ｔでのみ検出。

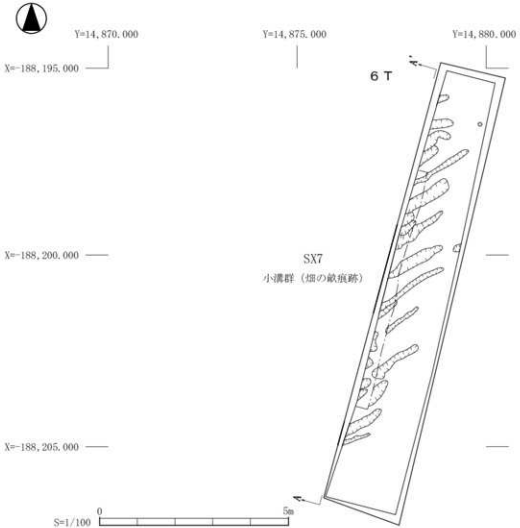
Ⅲ層：旧表土。暗褐色砂層（10YR3/3）。

Ⅳ層：堆積層。にぶい黄褐色均質砂層（10YR4/3）。

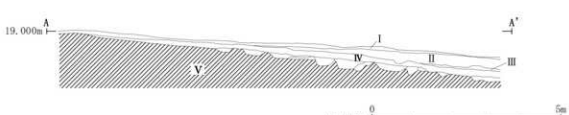
Ⅴ層：地山。遺構検出面。褐色砂層（10YR4/6）。



第２図　第６次調査　調査区配置図

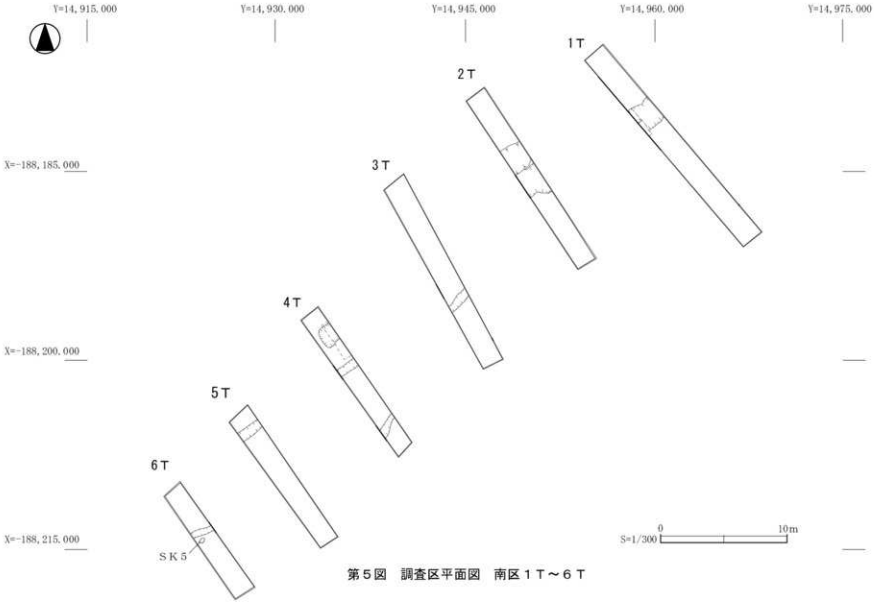


第３図　調査区平面図　北区６T

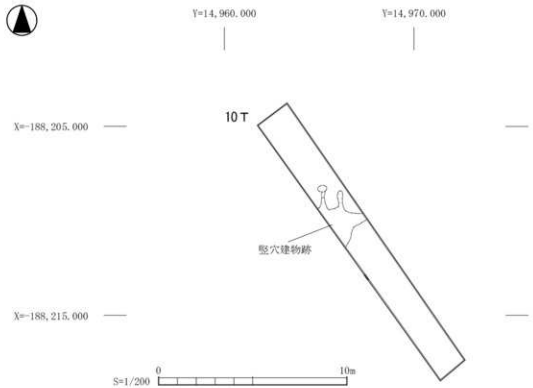


遺　構	層位	土　色	粒　度	備　考
ＳＸ７ 小溝群 （畑の畝跡）	1	褐色（10YR4/6）	砂	地山のブロックに黒褐色（10YR3/2）の砂のブロックが混じる。人為的に埋め戻されたもの。

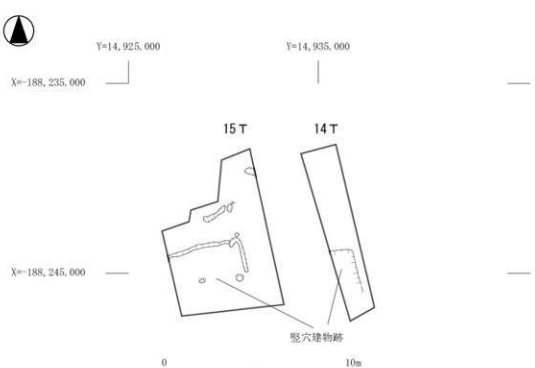
第４図　調査区西壁断面図　北区６T



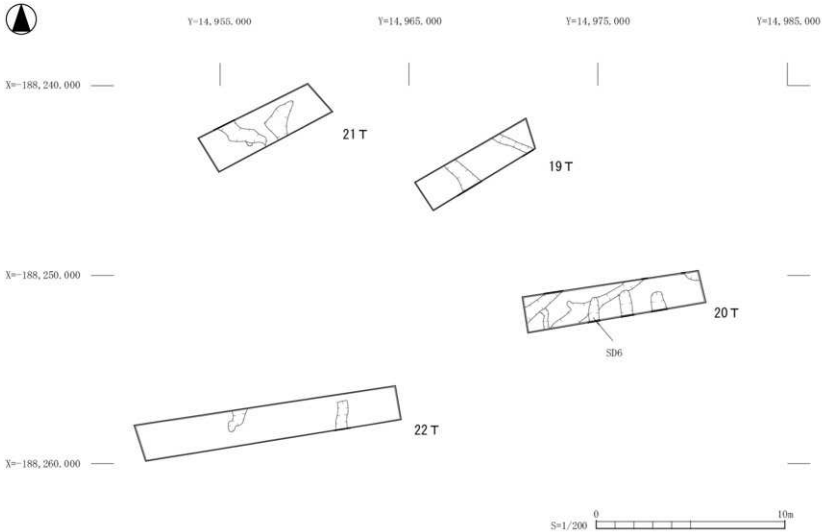
第５図　調査区平面図　南区１Ｔ～６Ｔ



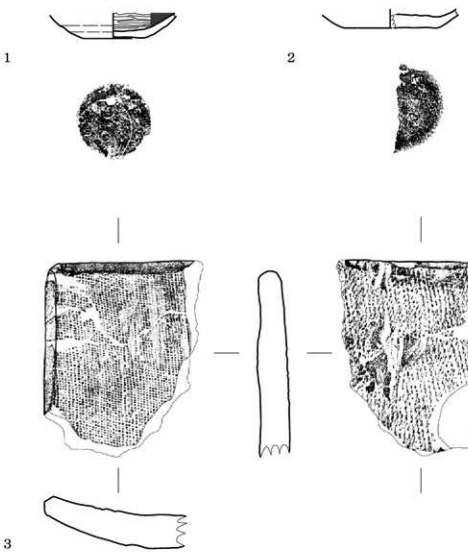
第６図　調査区平面図　南区 10Ｔ



第７図　調査区平面図　南区 14Ｔ～ 15Ｔ



第８図　調査区平面図　南区 19Ｔ～ 22Ｔ



（単位：cm）

No.	種類	遺構	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	備考
				外面	内面					
1	土師器 坏	南区６Ｔ ＳＫ５	1	ロクロナデ 底部：回転糸切り、無調整	ヘラミガキ、黒色処理	—	5.0cm 21／24	(2.0cm)	R1	A類
2	須恵器 坏	南区22Ｔ	1	ロクロナデ 底部：切り離し不明	ロクロナデ	—	7.2cm 11／24	(1.5cm)	R5	Ⅰ類
3	瓦 平瓦	南区20Ｔ ＳＤ６	1	縄目	布目	—	—	—	R4	

第９図　出土遺物実測図

なお、当該地は丘陵地であるため、掘削した深さや層厚は場所による異なる。

（２）発見遺構と遺物（第３・４・５・６・７・８・９図）

北区では、６Ｔで、畑の畝の痕跡を発見したが、その他の調査区では遺構は検出しなかった。南区では、丘陵上の１Ｔ～６Ｔから溝跡や土坑、丘陵斜面裾部の10Ｔ、14Ｔ～15Ｔから竪穴建物跡、ＪＲ東北本線線路沿いの19Ｔ～22Ｔから小溝群を検出した。

遺物は、平瓦片、土器片等が出土している。

［北区６Ｔ］

ＳＸ７小溝群（畑の畝跡）（第３・４図）

【位置】調査区の西壁寄り。

【平面形・規模】形状は、調査区西壁から北東に向かう細い小溝状。20条程度が平行している。

【遺物】埋土から須恵系土器の坏類体部小片が出土している。

［南区６Ｔ］

ＳＫ５土坑（第５図）

【位置】調査区の中央西壁寄り。

【平面形・規模】形状は、やや不整形。規模は長軸約40㎝、短軸約30㎝。

【遺物】ロクロ成形で、内面に黒色処理を施した土師器坏の底部（Ａ類）（第９図１）が出土している。

［南区20Ｔ］

ＳＤ６小溝跡（第８図）

【位置】調査区の中央南壁寄り。

【平面形・規模】形状は、南北に長い小溝状。溝の幅は約50㎝。

【遺物】平瓦片（第９図３）等が出土している。

３　まとめ

野田遺跡第４次調査では、南向きの丘陵西側にある上段の平坦部に竪穴建物跡２軒が発見されていた。第６次調査では南向きの丘陵裾の平坦部東側（10Ｔ）と中央（14Ｔ～15Ｔ）に竪穴建物跡を検出したことから、南向きの丘陵の平坦部には古代の竪穴建物群が存在する可能性がある。

北区６Ｔ全景（北から）

南区６Ｔ　ＳＫ５土師器坏底部出土状況

南区 10Ｔ全景（北から）

南区 14Ｔ全景（北から）

写真図版１

南区 15Ｔ全景（南から）

南区 19Ｔ全景（南から）

南区 20Ｔ全景（西から）

写真図版２

南区 21Ｔ全景（東から）

南区 22Ｔ全景（東から）

1

2

3

出土遺物写真

写真図版３

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき２
書名	多賀城市内の遺跡２
副書名	令和３年度ほか発掘調査報告書 新田遺跡　山王遺跡　市川橋遺跡　高崎遺跡　野田遺跡 小沢原遺跡　留ヶ谷遺跡　東田中窪前遺跡
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	大木丈夫　丹野修太　小原駿平　赤澤靖章　桑折肇　高橋伶奈
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－１　TEL：022-368-0134
発行年月日	

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さんのういせき 山王遺跡 （第226次）	みやぎけんたがじょうしなくうみがまち 宮城県多賀城市南宮字町61番	042099	18013	38度 18分 04秒	140度 58分 428秒	20201130 ～ 20201225	83.22㎡	個人住宅 新　築
たかさきいせき 高崎遺跡 （第127次）	みやぎけんたがじょうしためがやいっちょうめ 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目31-5	042099	18018	38度 17分 38秒	140度 59分 47秒	20200911 ～ 20200917	45㎡	個人住宅 新　築
ひがしたなかくぼまえいせき 東田中窪前遺跡 （第9次）	みやぎけんたがじょうしひがしたなかいっちょうめ 宮城県多賀城市東田中一丁目283-2	042099	18037	38度 17分 36秒	140度 59分 45秒	20201209 ～ 20201225	18.75㎡	個人住宅 新　築
おざわはらいせき 小沢原遺跡 （第21次）	みやぎけんたがじょうしうきしまにちょうめ 宮城県多賀城市浮島二丁目319番1、 341番、349番1、351番1	042099	18043	38度 18分 13秒	141度 00分 09秒	20201130 ～ 20201225	238.7㎡	介護施設 建　築
とめがやいせき 留ヶ谷遺跡 （第10次）	みやぎけんたがじょうしためがやいっちょうめ 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目330番13	042099	18047	38度 18分 05秒	141度 00分 18秒	20201207 ～ 20201208	88㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第151次）	みやぎけんたがじょうしなくうあざいちりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塚101番1 の一部	042099	18012	38度 18分 04秒	140度 57分 49秒	20210412 ～ 20210601	65.52㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第152次）	みやぎけんたがじょうしなくうあざいちりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塚101番1 の一部	042099	18012	38度 18分 03秒	140度 57分 49秒	20210412 ～ 20210601	61.6㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第153次）	みやぎけんたがじょうしなくうあざいちりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塚101番1 の一部	042099	18012	38度 18分 03秒	140度 57分 18秒	20210412 ～ 20210601	54.21㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第154次）	みやぎけんたがじょうしにいだあざにろ 宮城県多賀城市新田字後104番の一 部、105番1の一部	042099	18012	38度 17分 57秒	140度 57分 31秒	20210413 ～ 20210507	200㎡	賃貸住宅 及び道路 造成
にいだいせき 新田遺跡 （第155次）	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 なんぐうあざいちりづか 南宮字一里塚81-1、102-1、104-4、 75-2、79-1、 なんぐうあざこうしん 南宮字庚申294、293-5	042099	18012	38度 18分 03秒	140度 57分 47秒	20210412 ～ 20210603	200㎡	宅地造成
にいだいせき 新田遺跡 （第157次）	みやぎけんたがじょうしにいだあざにろ 宮城県多賀城市新田字後16番7	042099	18012	38度 17分 57秒	140度 57分 40秒	20210915 ～ 20211019	56.35㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第158次）	みやぎけんたがじょうしなくうあざこうしん 宮城県多賀城市南宮字庚申228番、 298番の一部	042099	18012	38度 18分 05秒	140度 57分 53秒	20211020 ～ 20211130	50.4㎡	個人住宅 新　築
にいだいせき 新田遺跡 （第159次）	みやぎけんたがじょうしなくうあざこうしん 宮城県多賀城市南宮字庚申295番1、 299番の各一部	042099	18012	38度 18分 05秒	140度 57分 52秒	20211020 ～ 20211130	62.9㎡	個人住宅 新　築

新田遺跡 (第161次)	宮城県多賀城市新田字六歳5番地2、5番地16、7番地1、7番地2の各一部	042099	18012	38度 17分 49秒	140度 57分 39秒	20211222	16㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第225次)	宮城県多賀城市南宮字町81番14	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 19秒	20210413 ～ 20210511	158.57㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第227次)	宮城県多賀城市山王字西山王8番1	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 29秒	20210528 ～ 20210701	119.24㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第228次)	宮城県多賀城市南宮字町77番1	042099	18013	38度 18分 04秒	140度 58分 19秒	20210608 ～ 20210719	233.1㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第229次)	宮城県多賀城市南宮字町77番1、77番2、77番3	042099	18013	38度 18分 04秒	140度 58分 19秒	20210728 ～ 20210907	147.11㎡	宅地造成
山王遺跡 (第230次)	宮城県多賀城市南宮字町81番16、字伊勢202番12	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 20秒	20210720 ～ 20210922	144.95㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第231次)	宮城県多賀城市南宮字町81番15、字伊勢202番4	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 20秒	20210720 ～ 20210922	50㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第232次)	宮城県多賀城市南宮字伊勢207番2の一部	042099	18013	38度 18分 06秒	140度 58分 23秒	20211005 ～ 20211022	30㎡	宅地造成
山王遺跡 (第234次)	宮城県多賀城市山王字山王二区144番地	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 26秒	20211018 ～ 20211102	170㎡	宅地造成
山王遺跡 (第235次)	宮城県多賀城市南宮字町92番の一部	042099	18013	38度 18分 05秒	140度 58分 14秒	20211119	26.65㎡	個人住宅 新築
山王遺跡 (第237次)	宮城県多賀城市南宮字八幡地内	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 40秒	20220208 ～ 20220209	45.89㎡	排水路整備
市川橋遺跡 (第101次)	宮城県多賀城市城南二丁目6－9	042099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 21秒	20210726 ～ 20210908	59.22㎡	個人住宅 新築
高崎遺跡 (第129次)	宮城県多賀城市高崎二丁目135番7、139番4、541番	042099	18018	38度 17分 37秒	140度 59分 49秒	20210927 ～ 20211006	28.5㎡	宅地造成
野田遺跡 (第6次)	宮城県多賀城市留ヶ谷二丁目87番地他1筆	042099	18023	38度 18分 15秒	140度 00分 14秒	20210615 ～ 20210813	1600㎡	樹木抜根工事

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡 (第226次)	集落・都市・屋敷	奈良・平安・近世	井戸跡、溝跡	土師器、須恵器、須恵系土器、陶器、木製品、服製品、古銭	
高崎遺跡 (第127次)	集落				
東田中須前遺跡 (第9次)	集落				
小沢原遺跡 (第21次)	散布地				
留ヶ谷遺跡 (第10次)	散布地				

新田遺跡（第151次）	集落	奈良・平安	溝跡		
新田遺跡（第152次）	集落				
新田遺跡（第153次）	集落	奈良・平安	小溝群		
新田遺跡（第154次）	集落・屋敷	奈良・平安	小溝群	土師器、須恵系土器	
新田遺跡（第155次）	集落・屋敷	奈良・平安	土坑、小溝群	土師器、須恵系土器	
新田遺跡（第157次）	集落	奈良・平安	溝跡	須恵器	
新田遺跡（第158次）	集落				
新田遺跡（第159次）	集落	奈良・平安	溝跡		
新田遺跡（第161次）	集落				
山王遺跡（第225次）	集落・都市・屋敷	奈良・平安・近世	溝跡、柱列	陶器、磁器	
山王遺跡（第227次）	集落・都市・屋敷	奈良・平安・中世	区画溝、井戸跡、掘立柱建物跡	土師器、須恵器、須恵系土器、陶器	
山王遺跡（第228次）	集落・都市・屋敷	奈良・平安・近世	土坑	土師器、須恵器、瓦、陶器、石製品、古銭	
山王遺跡（第229次）	集落・都市・屋敷	近世	土坑	須恵器、土製品、陶器、磁器	
山王遺跡（第230次）	集落・都市・屋敷	近世	溝跡	土師器、須恵器、瓦、陶器、木製品	
山王遺跡（第231次）	集落・都市・屋敷	奈良・平安・中世・近世	土坑		
山王遺跡（第232次）	集落・都市	奈良・平安・近世	北２道路跡	須恵器	
山王遺跡（第235次）	集落・都市				
山王遺跡（第237次）	集落・都市				
市川橋遺跡（第101次）	集落・都市	奈良・平安	東１道路跡	須恵器	
高崎遺跡（第129次）	集落				
野田遺跡（第6次）	集落	古代	竪穴建物跡、小溝群	土師器、須恵器、瓦	

要約	山王遺跡第226次調査では、古代の井戸跡や近世の溝跡を発見した。
	高崎遺跡第127次調査では、年代不明のピットを発見した。
	東田中窪前遺跡第9次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	小沢原遺跡第21次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	留ヶ谷遺跡第10次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第151次調査では、古代の溝跡を発見した。
	新田遺跡第152次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第153次調査では、古代のピットや小溝群を発見した。
	新田遺跡第154次調査では、古代の畑の畝跡と考えられる小溝群等を発見した。
	新田遺跡第155次調査では、古代の小溝群や土坑を発見した。
	新田遺跡第157次調査では、古代の溝跡やピットを発見した。
	新田遺跡第158次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第159次調査では、古代の溝跡を発見した。
	新田遺跡第161次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第225次調査では、古代の溝跡やピット、近世の柱列やピットを発見した。
	山王遺跡第227次調査では、古代の区画溝や柱穴、中世の井戸や掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第228次調査では、古代のピットや近世の土坑、ピットを発見した。
	山王遺跡第229次調査では、近世の土坑、ピットを発見した。
	山王遺跡第230次調査では、近世の溝跡を発見した。
	山王遺跡第231次調査では、古代から近世と考えられる土坑等を発見した。
	山王遺跡第232次調査では、古代の多賀城南面の道路網のうちの北２道路を発見した。
	山王遺跡第234次調査では、古代の溝跡や土坑を発見した。
	山王遺跡第235次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第237次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	市川橋遺跡第101次調査では、古代多賀城南面の道路網のうちの東１道路西側溝a期や小溝群、土坑を発見した。
	高崎遺跡第129次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	野田遺跡第６次調査では、北区では古代の小溝群、南区では竪穴建物跡等を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第152集

多賀城市内の遺跡２

― 令和３年度ほか発掘調査報告書 ―

令和４年３月26日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
電 話（０２２）３６８－０１３４

発行　多 賀 城 市 教 育 委 員 会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電 話（０２２）３６８－１１４１

VEGETABLE OIL INK
この印刷物は、環境にやさしい「植物油インキ」を使用しています。